

Institute for Advanced Studies on Asia

第 3 期
中期目標期間の
外部評価に係る
活動報告書
《専任教員編》

2016 年度～ 2021 年度



東京大学東洋文化研究所

凡例

- ・本報告書は、第3期中期目標期間中に東京大学東洋文化研究所（東文研）に任期なしの専任教員として所属していた研究者の活動状況をまとめたものである。
- ・第3期中期目標期間が終了した2022年3月末日に東文研に所属していた教員に関する記述は、基本的に、氏名と職位、所属部門、研究テーマ、東文研ホームページ上でのプロフィールのURLを呈示する冒頭部に加え、「Ⅰ. 対象期間中の研究業績一覧」と「Ⅱ. 対象期間中の研究・教育活動」からなる。2022年3月より前に退職した教員に関する記述はこのうち「Ⅱ. 対象期間中の研究・教育活動」を除いた部分からなる。
- ・所属部門、役職は2022年3月末日現在のものである。ただし、2022年3月より前に退職した教員については、退職時のものを示している。

目 次

凡例.....	1
目次.....	2
汎アジア研究部門	
池本 幸生 教授.....	5
菅 豊 教授.....	8
松田 康博 教授.....	13
名和 克郎 教授.....	23
藏本 龍介 准教授.....	26
東アジア第一研究部門	
黒田 明伸 教授.....	28
高見澤 磨 教授.....	30
真鍋 祐子 教授.....	33
小寺 敦 教授.....	36
東アジア第二研究部門	
大木 康 教授.....	39
中島 隆博 教授.....	42
板倉 聖哲 教授.....	50
塚本 磨充 教授.....	57
田中 有紀 准教授.....	61
南アジア研究部門	
高橋 昭雄 教授.....	63
青山 和佳 教授.....	66
馬場 紀寿 教授.....	69
古井 龍介 教授.....	72
小川 道大 准教授.....	75
西アジア研究部門	
榊屋 友子 教授.....	77
森本 一夫 教授.....	80
秋葉 淳 教授.....	85
渡邊 祥子 准教授.....	87

新世代アジア研究部門

園田 茂人 教授.....	89
安富 歩 教授.....	94
佐藤 仁 教授.....	97
上原 究一 准教授.....	100

国際学術交流室

柳 幹康 准教授.....	102
---------------	-----

第3期中期目標期間途中で退職した教員

田中 明彦 教授.....	104
平勢 隆郎 教授.....	106
長澤 榮治 教授.....	108
羽田 正 教授.....	110

池本 幸生 教授

所属部門 汎アジア研究部門

研究テーマ アマルティア・センのケイパビリティ・アプローチの応用に関する研究—発展途上国の貧困問題、日本の不平等問題、サステイナブル・コーヒーに関する研究

プロフィール <https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/ikemoto.html>

I. 対象期間中の研究業績一覧

■ 著書

Jose 川島良彰、池本幸生、山下加夏『コーヒーで読み解く SDGs』ポプラ社、2021.3.

■ 翻訳

アマルティア・セン『不平等の再検討—潜在能力と自由』池本幸生、野上裕生、佐藤仁（訳）岩波書店、1999.7. 岩波現代文庫版、2018.10.

■ 学術論文

Magami, Michi., Yukio Ikemoto, “Multi-Dimensional Child Poverty in Japan.”『教職課程年報』（成蹊大学）第 31 号（2021.12）、35–49.

Yasmin, S., Sakurai, T. and Ikemoto, Y. “Determinants of Adoption of Modern Dairy Farming in Selected Areas of Mymensingh District in Bangladesh.” *Journal of Sustainability Science and Management* 16(8), 2021.12: 218–228.

Ikemoto, Yukio. “Equality and Inequality in Japanese Modernization.” *L’Asie comme horizon de pensée: Japon, expériences de modernisation et de développement*, Académie Royale du Maroc, 2020, 56–101.

Yasmin, S. and Ikemoto, Y. “Profile of Women Dairy Farmers in Two Villages of Mymensingh District.” *Asian Social Science* (Canadian Center of Science and Education) 16(7), 2020: 119–127.

平位匡、池本幸生「『正義のアイデア』にみるセンの経済学—帰納法と演繹法」『東洋文化研究所紀要』（東京大学東洋文化研究所）第 174 巻（2019.2）、1–32.

Kurata, Masamitsu., Noriatsu Matsui, Yukio Ikemoto, Hiromi Tsuboi. “Do Determinants of Adopting Solar Home Systems Differ between Households and Micro-Enterprises? Evidence from Rural Bangladesh.” *Renewable Energy* 129, 2018.6: 995–1013.

Kurata, Masamitsu, Noriatsu Matsui, Yukio Ikemoto, Hiromi Tsuboi. “Multidimensional Impacts of Solar Home Systems: Evidence from Rural Bangladesh.” *Economics Bulletin* 38(2), 2018.1: 995–1013.

Dishanka, S. and Ikemoto, Y. “Justice in the Tea Estate Community in Sri Lanka: An Explanation through Freedom-Based Capability Approach.” *Journal of Social and Development Sciences* 9(1), 2018: 6–18.

Hirai, Tadashi., and Yukio Ikemoto. “Sen’s Economics in The Idea of Justice: Induction vs Deduction.” *Review of Political Economy* 29(1), 2017.1: 93–110.

Hirai, Tadashi., Flavio Comim, and Yukio Ikemoto. “Happiness and Human Development: A Capability Perspective.” *Journal of International Development* 28(7), 2016.8: 1155–1169.

國分圭介、池本幸生「東アジアのグローバル化と国内格差、国家間格差」『Int'l ecowk』（国際経済労働研究所）第 1060 号（2016.5）、7–13.

■ 書評論文・書誌紹介

池本幸生「現代日本の不平等についての議論とセンの不平等論—『現代文庫版訳者あとがき』にかえて」アマルティア・セン『不平等の再検討』（岩波現代文庫）岩波書店、2018.10、299–314.

■ 一般向け記事

池本幸生「裸の王様」『学内広報』（東京大学広報室）第 1532 号（2020.3）、12.

池本幸生「ケイパビリティ・アプローチその再考と展望」『環境会議』（事業構想大学院大学出版部）第 52 号（2019.9）、34–40.

池本幸生「川島義彰（コーヒーハンター）一豆に注ぐ情熱が貧困を救う」『Newsweek 日本版』（CCC メディアハウス）第 34 巻第 17 号（2019.5）、29.

池本幸生「「コーヒー」から世界の貧困を考える」『潮』（潮出版社）第 691 号（2016.9）、124–129.

II. 対象期間中の研究・教育活動

ノーベル経済学賞を受賞したアマルティア・センが主導するケイパビリティ・アプローチ研究に関する理論研究と、その理論をベトナム、タイ、日本などでの貧困問題に応用した実践研究を継続して行った。

2011 年に翻訳出版したアマルティア・センの『正義のアイデア』には、世の中の不正義を取り除いていくための具体的な方法が書かれている。「正義とは何か」という哲学的問いは現実の不正義を取り除く上で役に立たないが、現実の不正義を取り除こうとするセンの比較アプローチは、現実の不正義を特定することから始まり、それをどう取り除いて行くかという方法を示す。言い換えれば、不正義が蔓延している国で、不正義が放置されている状況を分析するためにセンの『正義のアイデア』が使えるということである。日本は急速に不平等化してきたが、平等であった時代に働いていたメカニズムが、どのようにして機能不全に陥ったかを明らかにしようとした。

上記研究の一環として、アダム・スミスの『国富論』と『道徳感情論』、ジェレミ・ベンサム『道徳および立法の諸原理序説』の見直しを行なった。アダム・スミスは利己主義を擁護し、ベンサムは「最大多数の最大幸福」で少数者を切り捨てる主張をしたと一般には理解されている

が、そうではなかった。利己的な動機を基礎に据える経済学だけで、利己的ではない人間の社会を説明することはできない。ケイパビリティ・アプローチは利己的な動機だけでなく、それ以外の動機も取り込むことができる。

教育面では新領域創成科学研究科国際協力学専攻（協力講座）、農学生命科学研究科農業・資源経済学専攻（協力講座）、農学部等の教育活動に積極的に関わった。

日本サステイナブルコーヒー協会の理事として、コーヒーのサステナビリティに関する一般向け講演会「コーヒーサロン」を開催し、社会貢献事業を多数企画・実施した。

菅 豊 教授

所属部門 汎アジア研究部門

研究テーマ パブリック・ヒストリー、パブリック・フォークロア、ヴァナキュラー文化

プロフィール <https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/suga.html>

I. 対象期間中の研究業績一覧

■ 著書

菅豊『鷹將軍と鶴の味噌汁—江戸の鳥の美食学』講談社、2021.8.

福田アジオ、菅豊、塚原伸治『超越 20 世紀民俗学—対話福田亜細男』陳志勤、趙彦民、彭偉文（訳）、山東画報出版社、2021.6.（中国語）

菅豊『河川の帰属—人與環境の民俗学』郭海紅（訳）、中西書局、2020.12.（中国語）

■ 編著

菅豊、北條勝貴（編）『パブリック・ヒストリー入門—開かれた歴史学への挑戦』勉誠出版、2019.10.

■ 学術論文

스가 유타카(菅豊)「중국의 ‘유산’ 정책과 현실의 상극—유네스코에서 ‘전통의 담당자’까지(中国における「遺産」政策と現実との相克—ユネスコから「伝統の担い手」まで)」『실천민속학연구 (実践民俗学研究)』실천민속학회 (実践民俗学会) 第 39 号 (2022.2)、9–49.（韓国語）

菅豊「非物質文化遺産的幻影」『遺産』（南方科技大学）2021 年第 1 期（第 5 輯）（2022.1.）、153–177.（中国語）

菅豊「コメント 近世・近代移行期の歴史をもつれあい」『人民の歴史学』（東京歴史科学研究会）第 229 卷（2021.11）、25–30.

菅豊「災禍のパブリック・ヒストリーの災禍—東日本大震災・原子力災害伝承館の「語りの制限」事件から考える「共有された権限 (shared authority)」」標葉隆馬（編）『災禍をめぐる記憶と語り』ナカニシヤ出版、2021.3、113–152.

菅豊「地方創生と「新しい野の学問」としての地域学」『学術の動向』（日本学術会議）26（2）（2021.2）、26–30.

菅豊「民俗学芸術論題的転向—從民間芸術到支撐人之“生”的芸術 (vernacular 芸術)」『民俗研究』（山東大学）2020 年第 3 期（総第 151 期）（2020.5）、3–24.（中国語）

菅豊「新しい科学的知見が動物文化に与える影響—錦鯉を題材に」『家畜資源研究会報』（家畜資源研究会）第 19 卷（2020.3）、8–20.

菅豊「パブリック・ヒストリー—現代社会において歴史学が向かうひとつの方向性」菅豊・北條勝貴（編）『パブリック・ヒストリー入門—開かれた歴史学への挑戦』勉誠出版、2019.10、1-12.

菅豊「パブリック・ヒストリーとはなにか？」菅豊、北條勝貴（編）『パブリック・ヒストリー入門—開かれた歴史学への挑戦』勉誠出版、2019.10、3-68.

스가 유타카（菅豊）「공공민속학의 가능성과 과제—학문의 공공성이 문제되는 시대에 민속학은 어떻게 대응할 것인가?（公共民俗学の可能性と課題—学問の公共性が問われる時代に民俗学者はどう対応するのか?）」『실천민속학연구（実践民俗学研究）』（실천민속학회（実践民俗学会））第34号（2019.8）、9-37.（韓国語）

菅豊「共約不可能性（incommensurability）に民俗学はいかに対応すべきか」『日本民俗学』（日本民俗学会）第299号（2019.8）、82-87.

陸薇薇、菅豊「“中国錦鯉”是如何誕生的？—現實與虛擬空間中的“第三種文化”」『復印報刊資料・文化研究』（中国人民大学）2019年第6期（2019.6）、69-79.（中国語） 収録誌は中国出版重要記事を精選・収録する特別誌。本論文は『民俗研究』2019年第2期掲載論文の精選収録分。

菅豊「文化遺産の適応性管理—我們該如何應對文化遺產管理（CHM）的不確定性？」『中国芸術時空』（中国芸術研究院）2019年第3期（2019.5）、51-59.（中国語）

陸薇薇、菅豊「“中国錦鯉”是如何誕生的？—現實與虛擬空間中的“第三種文化”」『民俗研究』（山東大学）2019年第2期（総第144期）（2019.3）、126-135.（中国語）

菅豊「費孝通眼中的“羊”—印刻在家畜体内的江南農業發展史」『南京農業大学学报（社会科学版）』第19卷第1期（2019.1）、25-32.（中国語）

菅豊「東アジアの国家をめぐる協調と競争—跨国文化としての鑑賞錦鯉文化の協働的創造活動」陳尚勝、楊魯慧、余東華（編）『東亞運命共同体—首屆山東論壇會議論文集』山東大学出版社、2019.1、99-110.

菅豊「フィールドワークの宿痾—公共民俗学者・宮本常一がフィールドに与えた「迷惑」」『社会人類学年報』（弘文堂）第44号（2018.11）、1-27.

菅豊「エスノグラフィーの順応的管理」『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』（東京大学大学院情報学環）第95号（2018.10）、i-iii.

菅豊「見えない「戦闘地帯（Kampfzone）」—都市の社会的弱者の静かなる排除」大場茂明、大黒俊二、草生久嗣（編）『文化接触のコンテキストとコンフリクト—環境・生活圏・都市』清文堂、2018.8、83-116.

福田亜細男、菅豊、塚原伸治「総括」『民間文化論壇』（中国文学芸術界聯合会）2018年第4期（総第251期）（2018.7）、71-73.（中国語）

福田亜細男、菅豊、塚原伸治「與現場觀衆討論」『民間文化論壇』2018年第4期（総第251期）（2018.7）、66-70.（中国語）

- 福田亜細男、菅豊、塚原伸治「民俗学の実践問題」『民間文化論壇』（中国文学芸術界聯合会）2018 年第 3 期（総第 250 期）（2018.5）、57–64.（中国語）
- Suga, Yutaka. “Stille Gewalt: Städte, Flüsse, unsichtbare Mauer und sozial Schwache in der japanischen Gesellschaft.” *Themen und Tendenzen der deutschen und japanischen Volkskunde im Austausch*. Edited by Johannes Moser. Münster: Waxmann Verlag GmbH, 2018, 99–118.（ドイツ語）
- 菅豊「日本現代民俗学的“第三条路”—文化保護政策、民俗主義及公共民俗学」周星、王霄冰（編）『現代民俗学的視野與方向—民俗主義・本真性・公共民俗学・日常生活』商務印書館、2018.4、333–352.（中国語）
- 菅豊「公共民俗学的可能性」周星、王霄冰（編）『現代民俗学的視野與方向—民俗主義・本真性・公共民俗学・日常生活』商務印書館、2018.4、810–847.（中国語）
- 福田亜細男、菅豊、塚原伸治「民俗学的調査論問題」『民間文化論壇』（中国文学芸術界聯合会）2018 年第 2 期（総第 249 期）（2018.3）、55–66.（中国語）
- 福田亜細男、菅豊、塚原伸治「民俗学的定義の問題」『復印報刊資料・文化研究』（中国人民大学）2018 年第 2 期（2018.2）、104–115.（中国語） 収録誌は中国出版重要記事を精選・収録する特別誌。本論文は『民間文化論壇』2017 年第 5 期掲載論文の精選収録。
- 福田亜細男、菅豊、塚原伸治「民俗学的国際性的問題」『民間文化論壇』（中国文学芸術界聯合会）2018 年第 1 期（総第 248 期）（2018.1）、32–41.（中国語）
- 福田亜細男、菅豊、塚原伸治「民俗学の方法問題」『民間文化論壇』2017 年第 6 期（総第 247 期）（2017.11）、24–30.（中国語）
- 福田亜細男、菅豊、塚原伸治「伝承母体論の問題」『民間文化論壇』（中国文学芸術界聯合会）2017 年第 6 期（総第 247 期）（2017.11）、31–38.（中国語）
- 福田亜細男、菅豊、塚原伸治「民俗学的定義の問題」『民間文化論壇』（中国文学芸術界聯合会）2017 年第 5 期（総第 246 期）（2017.9）、27–36.（中国語）
- Suga, Yutaka. “Into the Bullring: The Significance of ‘Empathy’ after the Earthquake.” *Fabula* (International Society for Folk Narrative Research (ISFNR)) 58(1-2), 2017.7: 25–38.
- 福田亜細男、菅豊「『超越“20 世紀民俗学”—我們從與福田亜細男的討論中學習甚麼?』為民俗学的衰頹而悲哀的福田亜細男」『民間文化論壇』（中国文学芸術界聯合会）2017 年第 4 期（総第 245 期）（2017.7）、27–36.（中国語）
- 菅豊「『超越“20 世紀民俗学”—我們從與福田亜細男的討論中學習甚麼?』序言」『民間文化論壇』（中国文学芸術界聯合会）2017 年第 4 期（総第 245 期）（2017.7）、25–26.（中国語）
- 菅豊「民俗学者的田野介入與社会現實的再建構—通過田野調查構築現實」『民俗研究』（山東大学）2017 年第 3 期（総第 133 期）（2017.5）、49–56.（中国語）
- 菅豊「幻影化する無形文化遺産」飯田卓（編）『文化遺産と生きる』臨川書店、2017.5、68–96.

菅豊、張帥、邢光大「公共民俗学與新在野之学及日本民俗学者的中国研究」『民俗研究』（山東大学）2017年第3期（総第133期）（2017.5）、38-48.（中国語）

菅豊「歴史のなかの環境とコモンズ—日本のサケの資源利用」水島司（編）『環境に挑む歴史学』勉誠出版、2016.10、83-93.

菅豊「公益與共益—從日本の“社会性”伝統再構成看国家與民衆」『民俗研究』（山東大学）2016年第6期（総第130期）（2016.9）、49-54.（中国語）

■ 書評論文・書誌紹介

菅豊「村田弘編『山の神・鮭の大助譚・茂吉—東北からの民俗考』」『日本民俗学』（日本民俗学会）第292巻（2017.11）、161.

■ 一般向け記事

Yutaka, Suga. “The Challenge of Public History in Japan.” *International Public History Newsletter* (International Federation for Public History) 2, 2020.10: 14.

■ 新聞記事

菅豊「日本文化の残された断片つなぐ—赤坂憲雄・三浦佑之著『列島語り』」『公明新聞』2017年7月17日.

菅豊「集団の生き残りのために—サミュエル・ボウルズ、ハーバート・ギンタス著『協力する種』」『公明新聞』2017年5月1日.

菅豊「国家の期待を上回る戦争協力—大串潤児著『「銃後」の民衆経験』」『公明新聞』2016年8月29日.

菅豊「日本の周縁を語り、中央を射つ—吉本隆明著『全南島論』」『公明新聞』2016年6月27日.

II. 対象期間中の研究・教育活動

当該期間で、著書単著2件（中国語1件）、共著1件（中国語1件）、共編著1件、学術論文39件（翻訳・改訂転載等を含む単著26件、共著13件）を発表した。学術論文の発表言語は中国語22件、日本語13件、韓国語2件、英語1件、ドイツ語1件で、研究成果の海外への積極的な発信に努めた。そのうち『鷹将軍と鶴の味噌汁—江戸の鳥の美食学』（講談社、2021）は、『民衆史研究』第103号、『日本民俗学』第309号などの学術雑誌で書評されると共に、『日本経済新聞』『産経新聞』『公明新聞』『西日本新聞』『週刊読書人』『文藝春秋』『日刊ゲンダイ』などで紹介された。また北條勝貴との共編著『パブリック・ヒストリー入門—開かれた歴史学への挑戦』（勉誠出版、2019）は、日本の歴史学にパブリック・ヒストリーという新しい方法と視角を導入した入門書として注目され、『*International Public History*』2号や『史學雑誌』129編5号、129編8号、『九州歴史科学』第48号、および『週刊読書人』『日本経済新聞』などで書評紹介されている。

さらに中国をはじめとして日本や韓国、ドイツなどの国際シンポジウム、学会で計38件の講

演、口頭発表を積極的に行ってきた。当該期間にはまた、日本学術振興会科学研究費助成事業の基盤 B の研究代表者として 2 件採択されると共に、2 件の研究分担者として共同研究を積極的に行った。加えて、サントリー文化財団 2016～17 年度の 2 年間、地域文化活動の実践者と研究者によるグループ研究助成に採択された。この研究助成プロジェクトでは、調査地（新潟県小千谷市）の震災復興過程で地域文化（越後の牛の角突き）の運営や管理に、研究者が直接参画するという独創的な実践研究手法を採用することにより、地域住民との緊密な連携・協働に成功し、社会貢献活動としても地域において高く評価された。その結果、2020 年に小千谷市より「小千谷市褒賞」を授与されている。

松田 康博 教授

所属部門 汎アジア研究部門

研究テーマ アジア政治外交史、東アジア国際政治研究、中国および台湾の政治・対外関係・安全保障、中台関係論、日本の外交・安全保障政策。

プロフィール <https://ymatsuda.ioc.u-tokyo.ac.jp/jp/blog/>

I. 対象期間中の研究業績一覧

■ 編著

川島真、清水麗、松田康博、楊永明共（編）高村繁、黄偉修（訳編）『台日関係史（1945–2020）』
國立臺灣大學出版中心、2021.3.（中国語）

川島真、清水麗、松田康博、楊永明共（編）『日台関係史 1945–2020 増補版』東京大学出版会、
2020.10.

川島真、遠藤貢、高原明生、松田康博（編）『中国の外交戦略と世界秩序—理念・政策・現地の
視線』昭和堂、2020.1.

田上智宜、松田康博（編）『台湾政党政治黎明期関係者インタビュー集（上）（東洋学研究情報セ
ンター叢刊 28）』東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター、2019.3.（中国語）

松田康博、清水麗（編）『現代台湾の政治経済と中台関係』晃洋書房、2018.3.

家近亮子、唐亮、松田康博（編）『【新版】5 分野から読み解く現代中国—歴史・政治・経済・社
会・外交』晃洋書房、2016.6.

■ 翻訳

松田康博（監訳）、杉浦康之、手賀裕輔、福田円、吉田真吾、山口信治（訳）『中国の領土紛争—
武力行使と妥協の論理』テイラー・フレイヴェル（著）、勁草書房、2019.7.

■ 学術論文

松田康博「中国の対台湾政策と台湾総統選挙—1996 年～2020 年」『日本台湾学会報』（日本台湾
学会）第 23 号（2021.6）、53–70.

松田康博「常態化する中台関係の緊張—台湾社会の構造変化と習近平政権の戦略転換」『SSDP
安全保障・外交政策研究会』一般財団法人鹿島平和研究所、2021.6、1–6.

松田康博「習近平の軍事改革—権力集中、軍令・軍政分離、統合促進」『ROLES REPORT』（東京
大学先端科学研究センター）第 10 巻（2021.5）、1–8.

松田康博「民進党は長期政権化するか？ ポスト蔡英文を読み解く」『交流』第 964 号（2021）、1-8.

松田康博「第五章 日台関係の安定と変化的開端—1979-1987 年」「第六章 台湾の民主化と新日台関係の模索—1988-1994 年」「第九章 在穩定的兩岸關係下發展の日台關係—2008-2016 年」川島真、清水麗、松田康博、楊永明共（編）高村繁、黃偉修（訳編）『台日關係史（1945-2020）』國立臺灣大學出版中心、2021.3、135-178.（中国語）

松田康博「習近平政権における『政治安全』と国内安全保障法制」日本国際問題研究所（編）『習近平政権が直面する諸課題』公益財団法人日本国際問題研究所、2021.3、7-13.

松田康博「中国の対ラテンアメリカ政策—21 世紀の言説と現実」『イベロアメリカ研究特集号』（上智大学イベロアメリカ研究所）第 42 巻通巻 83 号（2021.2）、3-18.

松田康博「第 2 章 米中台関係の展開と蔡英文再選」佐藤幸人、小笠原欣幸、松田康博、川上桃子（編著）『蔡英文再選—2020 年台湾総統選挙と第 2 期蔡政権の課題』日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所、2020.12、49-30.

松田康博「「面对中美關係正常化的台湾内部決策—輿論控制和政治革新的停滯」、威權鬆動—解嚴前重大政治案件與政治變遷（1977-1987）」『國際學術討論會』国史館、2020.12、1-5.（中国語）

松田康博「新型コロナウイルス感染症と中国の対外関係悪化過程」『國際問題』（2020.10）、39-51.

松田康博（著）張瑞婷（訳）「如何解讀安倍政府的安全保障政策」『亞太安全與海洋研究』（2020.1）、1-14.（中国語）

松田康博「馬英九時期的日本和台湾地区關係」『中国國際戰略評論』2019（下）（2020.1）、1-14.（中国語）

松田康博「第 1 章 海洋問題をめぐる台湾の政治過程—馬英九政権を中心に」河村有教（編）『台湾の海洋安全保障と制度的展開』晃洋書房、2019.6、21-44.

松田康博「第 2 期習近平政権の対台湾政策—『新時代』の中台関係展望」一般財団法人鹿島平和研究所、2018.9、6 頁.

松田康博「第 6 章 台湾における中国国民党の社会調査—外来の独裁政権は現地社会をどう解釈したのか？」笹川裕史（編）『戦時秩序に巣食う「声」—日中戦争・国共内戦・朝鮮戦争と中国社会』創土社、2017.8、177-207.

松田康博「蔡英文政権の誕生と中台関係の転換—『失われた機会』か、『新常态の始まり』か？」『問題と研究』（日本国際問題研究所）第 46 号（2017.3）、183-228.

松田康博「第 14 章 台湾にとっての米中関係—構造変化から蔡英文政権期を展望する」『米中関係と米中をめぐる関係—国際秩序動揺期における米中の動勢と米中関係』日本国際問題研究所、2017.3、197-207.

松田康博「第1章 中国の対外行動「強硬化」の分析—四つの仮説」加茂具樹（編）『中国対外行動の源泉』慶應義塾大学出版会、2017.3、9-29.

■ 書評

松田康博「蔡英文 『新時代の台湾へ』 —リベラルなタカ派の実像」『北海道新聞』（2016.7）.

■ 一般向け記事

松田康博「ウクライナ戦争は米中新冷戦をどう変えるか—自縄自縛の習近平外交と台湾情勢への含意」『外交』（外務省）第73号（2022）、92-97.

松田康博「【解説】中国の『台湾統一シナリオ』を論理的に考えてみる」『NEWS PICKS』WEB版（2022.3）、1.

Matsuda, Yasuhiro. “Will a Taiwan Contingency Happen? Analyzing the Challenges Facing China.” *Japan Spotlight*, January/February Issue (2022.1): 1-3.

Onuorah, Darlene. “Interview with Yasuhiro Matsuda: The 2021 Defense White Paper and Japan’s Taiwan Policy.” *The National Bureau of Asian Research* (The National Bureau of Asian Research) (2021.12): 1-3.

劉彦甫「今加盟申請をしなければ台湾にチャンスはなかった」『週刊東洋経済新報 Plus』（東洋経済新報社）（2021.10）、1-2.

松田康博「松田康博：日中政治体制不同 中国独裁遭遇反制為歴史必然」『CNA』（中央通訊社）（2021.7）、1-7.（中国語）

松田康博「高官頻表態 日本対台政策『戦略明朗化』？」『德国之声』（DW.com）（2021.7）、1-3.（中国語）

松田康博「松田康博：中国最大の危機 没人講真話」『CNA』（中央通訊社）（2021.7）、1-7.（中国語）

松田康博「中国の『台湾侵攻』に日本が備えておくべき理由—『巻き込まれたくない』という話では済まない」『週刊東洋経済 Plus』（東洋経済）（2021.5）、1-5.

松田康博「台湾有事、日本がなすべきは日本防衛と米軍支援（4）—台湾有事で中国はあらゆる脅しを日本にかける」『日経ビジネス』（日本経済新聞社）（2021）、1-6.

松田康博「台湾有事、日本がなすべきは日本防衛と米軍支援（3）—「中国を『やる気』にさせない3条件」『日経ビジネス』（日本経済新聞社）（2021）、1-6.

松田康博「台湾有事、日本がなすべきは日本防衛と米軍支援（2）—中国は台湾の『平和統一』に絶望した」『日経ビジネス』（日本経済新聞社）（2021）、1-6.

松田康博「台湾有事、日本がなすべきは日本防衛と米軍支援（1）台湾武力統一は今後10年考えにくい」『日経ビジネス』（日本経済新聞社）（2021）、1-6.

- 松田康博「シンポジウム「北朝鮮の経済と貿易」—堀田報告『中国との防疫・交流』コメント」『聖学院大学総合研究所紀要』（聖学院大学総合研究所）第 67 号（2021.3）、97-98.
- 松田康博「台湾海峡の地殻変動を座視するな」『Voice』（PHP 研究所）第 517 巻（2021.1）、70-77.
- 松田康博「台美関係怎麼走>>川普讓對美關係更緊密拜登以低風險管蔡媛「2020 美国總統大選>>川拜『外交政策』大 PK——一個單挑狂、一個揪團控」『商業週周刊』（商周.COM）第 1721 期（2020.11）、75.（中国語）
- 松田康博「台湾のコロナ対策から学ぶ—中国情報のリテラシーを問う<歴史から考えるコロナ危機—危機と災害の時代 政治になにができるのか>第 2 回」『東京財団政策研究所・政治外交検証研究会記録』東京財団政策研究所、2020.10、1-3.
- Matsuda, Yasuhiro. “The Impact of the COVID-19 Crisis on Taiwan’s External Relations: Views from Japan,” *“Cross-Strait Relations”: The Future of Taiwan Studies in the Post-COVID-19 World Series*, NATSA-EATS-IJTS-JATS, 2020.10, 1.
- Matsuda, Yasuhiro, “Perfect Storm of New Normal?: Prospects for Cross-Strait Relations during President’s Second Term Tsai,” *Public Jurist* (University of Hong Kong) (2020.10): 21-24.
- 松田康博、西正典、小原凡司「中国の軍事行動から中国の強権的行動の真意を考える」『言論 NPO』（言論 NPO）（2020.8）、1-4.
- 松田康博「史上最多得票で圧勝した蔡英文の台湾はどこへ向かうか？」『日経ビジネス電子版』（日経 BP）（2020.1）.
- Matsuda, Yasuhiro. “Indo-Pacific ‘Strategies’ and Their Implication for Taiwan: A Japanese perspective.” *Global Taiwan Brief* (Global Taiwan Institute) vol. 4, no. 3 (2019.2).
- 松田康博「米中新冷戦で空前の危機」『週刊東洋経済』（東洋経済新報社）2018 年 12 月 29 日・2019 年 1 月 5 日号（2018.12）.
- 松田康博「内憂外患の台湾・蔡英文政権 再選左右する『中間選挙』の行方—堅実な政治ゆえ低迷する支持率」『WEDGE』（株式会社ウェッジ）第 30 巻 11（通巻 273 号）（2018.11）、44-46.
- 松田康博、道下徳成、金杉憲治「急展開の北朝鮮情勢—米朝対話『成功』へのハードル」『外交』（外務省）第 48 号（2018）、12-25.
- 舩友雄大、松田康博「良好に見える日台関係だが実は懸案山積だ—自由貿易協定は足踏み状態になっている」『東洋経済 ONLINE』（東洋経済 ONLINE）2018 年 1 月 14 日（2018.1）、政治・経済.
- 松田康博「『一つの中国』をめぐって—中国と台湾の曖昧な関係」『SYNODOS』（SYNODOS）2017 年 7 月 31 日（2017.7）、政治 国際.
- 钟辰芳「松田康博：台海两岸僵局是新常态」VOA Chinese（美国之音）（2017.3）、2017 年 3 月 14 日.（中国語）

■ 新聞記事

松田康博「制裁の行方 台湾問題にも影響」『朝日新聞』2022年3月10日、15.

松田康博「台湾統一を巡り「和平」文言減る」『日本経済新聞』2022年3月6日、5.

松田康博「直接的表現回避 中国の反発緩和」『日本経済新聞』2022年2月2日、4.

松田康博「五輪『政治利用』の中国史—台湾と争いボイコット断行」『産経新聞』2022年1月27日、1.

松田康博「星期専論>>林芳正外相は親中派嗎？」『自由時報』2022年1月23日、1. (中国語)

松田康博「星期専論>>岸田新政府的対華政策傾向将会是如何？」『自由時報』2021年11月18日、1. (中国語)

松田康博「中国が仕掛ける心理戦、舞台は中台の空 込める政治的メッセージとは」『朝日新聞 DIGITAL』2021年10月12日、1-3.

松田康博「国際社会 抑止シグナルを」『朝日新聞』2021年10月12日、11.

松田康博「『台湾統一』強硬崩さず 習氏、対中包囲網を批判 辛亥革命110年で演説」『日本経済新聞』2021年10月10日、3.

松田康博「Question: 武力統一、中国側にもリスク」『朝日新聞』2021年9月25日、9.

松田康博「中国の変化促す機会」『毎日新聞』2021年9月24日、3.

松田康博「日本首相三強角逐 対華強硬成為共識」『BBC NEWS 中文』2021年9月13日、1-6. (中国語)

松田康博「世界は自制促す取り組みを」『毎日新聞』2021年7月16日、2.

松田康博「助美協防台？ 日学者：戦略模糊」『聯合報』2021年4月28日、1-2、聯合報. (中国語)

松田康博「【美日協防台湾？／下】日本給習近平的邀請函 藏在美日聯合声明裡？」『聯合報（電子版）』2021年4月27日、1-2. (中国語)

松田康博「【美日協防台湾？／上】日学者：定調維持戰略模糊 日本不会給答案」『聯合報（電子版）』2021年4月27日、1-2. (中国語)

松田康博「睽違52年表態挺台 日本為何敢冒險跟美国『狼狽為奸』」『天下雜誌』2021年4月19日、1-4. (中国語)

松田康博「日米の厳しい危機感反映」『西日本新聞』2021年4月18日、3.

松田康博「共同声明、専門家の見方—中国の海洋進出『不法』言い切る」『日本経済新聞』2021年4月18日、3.

松田康博「香港選挙、審査で民主派排除 中国全人代常務委が審議」『日本経済新聞（電子版）』
2021 年 3 月 29 日、1-4.

松田康博「『台湾危機』は現実か（下）一日米の声明で異例の言及、『台湾海峡』の危機は日本にも及ぶ 必要な備えは」『The Asahi Shimbun GLOBE+』2021 年 3 月 27 日、1-4.

松田康博「『台湾危機』は現実か（上）—『中国は 6 年以内に台湾侵攻の可能性』米軍司令官証言の現実味」『The Asahi Shimbun GLOBE+』2021 年 3 月 27 日、1-4.

松田康博「米中、人権・安保で隔たり 台湾やウイグル問題 次回メド立たず」『日本経済新聞』（日本経済新聞社）2021 年 3 月 21 日、5.

松田康博「海警法 衝突リスク」『河北新報』共同通信社、2021 年 3 月 17 日、6.

松田康博「日米 2 プラス 2 共同文書、台湾海峡に言及 松田康博東京大学教授に聞く」『中央通社』2021 年 3 月 17 日、1-3.

松田康博「考論 チームで中国と相対」『朝日新聞』2021 年 3 月 17 日、2.

松田康博「2 加 2 会談落幕 松田康博：美日認為中国企図改変現状」『中央通社』2021 年 3 月 16 日、1-3.（中国語）

松田康博「香港の自由 完全に奪われる」『産経新聞』2021 年 3 月 12 日、6.

松田康博「自民、強まる台湾重視」『日本経済新聞』2021 年 3 月 5 日、4.

松田康博「米中、台湾巡り攻防激しく」『日本経済新聞』2021 年 1 月 25 日、3.

松田康博「中国共産党員 200 万人分の名簿 国際議連が各国と共有 上海の日系企業も 5000 人」『日本経済新聞』2020 年 12 月 30 日、1.

松田康博「中国『利益侵害』で軍動員も 国防法改正、米制裁意識」『日本経済新聞』2020 年 12 月 27 日、1.

松田康博「『天安門配慮』検証が必要」『讀賣新聞』2020 年 12 月 24 日、2.

松田康博「2018 年公投効力前天到期>>日食解禁 学者籲多階段鬆綁」『自由時報』2020 年 12 月 2 日、1.（中国語）

松田康博「データの世紀 割れるネット（中）『北斗』165 カ国で GPS 超え ステージは『制脳権』確保へ」『日本経済新聞』2020 年 11 月 25 日朝刊、1.

松田康博「海保・海自の増強を」『東奥日報社』（共同通信社）2020 年 11 月 22 日朝刊、2.

松田康博「強権の中国 共存の終わり① 高圧外交、身構える世界」『日本経済新聞』2020 年 10 月 13 日、1.

松田康博「習氏訪日 中国から妥協引き出せ」『産経新聞』2020年9月22日朝刊、8.

松田康博「【專訪松田康博／下】当年被迫回国的垂秀夫再駐陸 其实『北京賺到了』」『聯合報』2020年9月18日、電子版、雷光涵.(中国語)

松田康博「【專訪松田康博／上】安倍友台新高点 菅義偉上任台日關係『不会更好』」『聯合報』2020年9月18日、電子版、雷光涵.(中国語)

松田康博「奇跡の逆転大勝利」『The Daily NNA 台湾版』2020年1月14日第04972号、9.

松田康博「習氏・国民党が敵失」『毎日新聞』2020年1月13日朝刊、6.

史书华「分析：民進党勝選代表了什麼？」『FT 中文網』2020年1月12日、政経.(中国語)

松田康博「現状維持見通し 背景に米中」『朝日新聞』2020年1月12日朝刊、4.

松田康博「「台湾守れる」認識浸透」『読売新聞』2020年1月12日朝刊、8.

松田康博「オピニオン: 発言: 北大教授解放後も残る懸念」『毎日新聞』2019年11月21日朝刊、11.

林翠儀「NHK 分析台湾選情 松田康博一感覺到韓国瑜是民粹主義者」『自由時報』2019年11月20日.(中国語)

林翠儀「想靠中国発大財 松田康博打臉韓国瑜『時代不一樣』」『聯合報』2019年9月13日、綜合報導.(中国語)

林翠儀「韓国瑜想靠中国発大財? 松田康博: 時代不一樣了」『自由時報』2019年9月13日、政治.(中国語)

松田康博「総合: 台北市長の出馬が鍵」『毎日新聞』2019年7月17日朝刊、6.

松田康博「頼氏の総統選出馬『簡単ではない』」『The Daily NNA 台湾版』2019年1月14日第04729号、2.

松田康博「再選に黄信号がともった蔡総統」『The Daily NNA 台湾版』2018年11月26日、第04698号.

松田康博「今なお内戦の『延長戦』」『讀賣新聞』2018年9月22日朝刊、17 クラシ・教育.

松田康博「日学者: 美向中国示警『適可而止』」『自由時報』2018年7月10日、政治.(中国語)

松田康博「解説2: 尖閣グレーゾーン 備え不足」『讀賣新聞』2018年6月30日朝刊、7.

Matsuda, Yasuhiro. “Free Flow of Talents, Goods and Information Essential.” *China Daily* May 9 2018, opinion.

Isabel Reyolds, Emi Nobuhiro, Yasuhiro Matsuda. “Top China Envoy Makes Rare Japan Visit.” *Bloomberg*, April 15 2018.

松田康博「專訪東京大学教授松田康博 分析習近平永統一現在中国的情況很可怕」『立場新聞』
2018 年 3 月 31 日. (中国語)

松田康博「中国修憲法 松田康博：打開潘朶拉盒子」中央通訊社、2018 年 3 月 12 日. (中国語)

松田康博「『台湾省』20 年前から記載」『産経新聞』2018 年 1 月 26 日.

黄菁菁、松田康博「台日軍艦互訪 機会不大—专家学者看法一致」『中国時報』2018 年 1 月 18
日. (中国語)

黄菁菁、松田康博「美台軍艦互訪？日学者—国防授權法実現 充滿変数」『中国時報』2018 年 1
月 18 日. (中国語)

松田康博「两国へ影響限定的」『京都新聞（共同通信提供原稿）』2018 年 1 月 12 日.

松田康博「日中影響は限定的」『福井新聞（共同通信提供原稿）』2018 年 1 月 12 日.

松田康博「日米離間狙い続けた中国」『朝日新聞』2017 年 12 月 29 日.

松田康博「松田康博：兩岸無小事 台湾須沙盤因応」『PChome 新聞』2017 年 10 月 16 日. (中国語)

松田康博「若習近平確立個人集権 日学者：非常危険」『PChome 新聞』2017 年 10 月 16 日. (中
国語)

松田康博「若確立習近平個人集権 日学者：非常危険！」『自由時報』2017 年 10 月 16 日. (中国語)

松田康博「松田康博：兩岸無小事 台湾須沙盤因応」中央通訊社、2017 年 10 月 16 日. (中国語)

松田康博「習近平如確立個人集権 日本学者：非常危険」中央通訊社、2017 年 10 月 16 日. (中
国語)

松田康博「権門無法停止：日本專家指習近平與王岐山命運捆绑」『民主中国』2017 年 10 月 14
日. (中国語)

松田康博「中共十九大権門>>日本学者：王岐山去留両難 習近平過度集権将引發反彈」『風伝媒』
2017 年 10 月 14 日. (中国語)

松田康博「中共 19 大 日本学者：王岐山去留成難題」『Yahoo!奇摩新聞』2017 年 10 月 13 日. (中
国語)

松田康博「日本学者：19 大、九合一、蔡英文連任是兩岸機會之窗」『自由時報』2017 年 10 月 13
日. (中国語)

松田康博「日本学者：19 大之後是兩岸關係契機」中央通訊社、2017 年 10 月 13 日. (中国語)

松田康博「質的にも深まる日台交流」『産経新聞』2017 年 10 月 5 日.

松田康博「日学者松田：台日關係發展阻力在台湾内部」『中国評論新聞網』2017 年 6 月 8 日. (中
国語)

松田康博「年内に成果必要」『毎日新聞』2017年5月20日.

松田康博、鐘源「訪談 松田康博：蔣介石與“大陸反攻”」『澎湃』2017年4月27日. (中国語)

松田康博「将来保証なき象徴的会談」『神戸新聞 (共同通信提供原稿)』2017年4月11日.

松田康博「中共十九大 王岐山去留受瞩目」『旺報』2017年4月10日. (中国語)

松田康博「日学者：中国若武力犯台 日本不会单独協助防衛台湾」『中時電子報』2017年3月14日. (中国語)

松田康博「不安定化の幕開けか」『日本経済新聞』2016年12月6日.

松田康博「中国にリスクも」『日本経済新聞』2016年9月11日朝刊.

松田康博「蔡英文総統 民主主義の成熟—松田康博・東大教授に聞く台湾の針路」『讀賣新聞』2016年6月23日.

松田康博「挑発せず、おもねりもせず」『The Daily NNA 台湾版 (第04082号)』2016年5月24日、p.9.

松田康博「対中関係 配慮控えめ」『産経新聞』2016年5月21日、8.

松田康博「理性的かつ強気な演説」『岩手日報 (共同通信提供原稿)』2016年5月21日.

松田康博「対中関係 配慮控えめ」『産経新聞』2016年5月21日.

松田康博「松田康博：蔡英文最低限度地回应了大陸」『日経中文網』2016年5月21日.

松田康博「中国に最低限応えた」『日本経済新聞』2016年5月21日、政治.

松田康博「蔡総統演説 日学者：大陸難以応対」中央通訊社、2016年5月20日. (中国語)

松田康博「中国に強く出た印象」『時事通信』2016年5月20日.

松田康博「中国情勢どう見る 習氏に『権力集中のワナ』」『日本経済新聞』2016年5月16日、27.

■ 事典等項目

松田康博「中国の弾道ミサイル」『現代地政学事典』丸善出版、2020.1、34–35.

II. 対象期間中の活動報告

東洋文化研究所内の事業として、東京大学 FSI 事業「一流英文出版社とのパートナーシップによるアジア研究成果のオープン・アクセス出版事業」を立ち上げ、2020年には、総長裁量経費により「新アジア学教科書」を企画し、内容、執筆者などを検討の上、原稿執筆の依頼をし、読み合わせ会議も実施した。2021年には「新アジア学教科書」の英訳、校正を実施した。また、シリーズ名を『東京大学東洋文化研究所アジア研究叢書 (*The University of Tokyo Studies on Asia*)』(以

下、アジア研究叢書）と決定し、英文出版社として、Springer 社とシリーズ刊行のための契約締結を行った。東京大学本部 FSI のサイト内にアジア研究叢書のページを開設、寄附募集開始した。同時に、東京大学東洋文化研究所アジア研究叢書刊行委員会を組織し、委員長として新規出版企画を公募するための募集要項、International Advisory Board のメンバーや、選考のスキームを決定するとともに、東文研 HP 内に専用のページを開設し、シリーズのカバーデザインを決定し、2～3 冊目の出版企画を選考、決定した。

2016 年度に大学院法学政治学研究科総合法政専攻副専攻長を務め、教育、入試、審査に関わる業務を担当した。

中国・復旦大学国際問題研究院日本研究センターにて客員教授（2016 年 4 月）、中国・復旦大学文史研究院にて訪問学人（2016 年 11～12 月）、台湾・国立政治大学国際事務学院および国立台湾大学文学院にて客員教授（2017 年 2～6 月）、中国・北京大学国際関係研究院にて訪問学者（2019 年 2～8 月）、フランス・L'École des Hautes Études en Sciences Sociales (EHESS)にて Visiting Professor（2021 年 11～12 月）として国際研究交流を盛んに行った。

兼業により、海上保安庁政策アドバイザー（2017 年 4 月～25 年 3 月）、国際交流基金「日本研究基盤整備」プログラム複数年助成事業に係る外部評価員（2017 年 10 月～22 年 3 月）、Yahoo! ニュース 公式コメンテーター（2021 年 5 月～10 月）、公益財団法人日本台湾交流協会理事（2021 年 6 月～25 年 6 月）として、社会貢献活動をした。

名和 克郎 教授

所属部門 名和克郎

研究テーマ ネパールおよび南アジア、ヒマラヤ地域の人類学

プロフィール <https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/nawa.html>

I. 対象期間中の研究業績一覧

■ 編著

名和克郎（編）『体制転換期ネパールにおける「包摂」の諸相一言説政治・社会实践・生活世界』（東洋文化研究所叢刊第31輯東洋文化研究所研究報告）三元社、2017.3.

■ 学術論文

名和克郎「境界、動作、リズムービャンス及び周辺地域の「太鼓演奏」の諸相」西井凉子、箭内匡（編）『アフエクトゥスー生の外側に触れる』京都大学学術出版会、2020.12、243–274.

名和克郎「序ー「言語人類学」と「指標性」の概念をめぐる（《特集》指し示すことをめぐるダイナミクスー言語人類学と指標性）」『文化人類学』第84巻第4号（2020）、431–442.

名和克郎「〈コメント〉「東京」のことばと都市の統合的把握のために」『ことばと社会ー多言語社会研究』（三元社）第20号（2019）、73–94.

名和克郎「言語人類学」桑山敬己、綾部真雄（編）『詳説文化人類学ー基本と最新のトピックを深く学ぶ』ミネルヴァ書房、2018、17–30.

Nawa, Katsuo. “Effects of Translation on the Invisible Power Wielded by Language in the Legal Sphere: The Case of Nepal.” *Meaning and Power in the Language of Law*. Edited by Janny H. C. Leung, and Alan Durant. Cambridge: Cambridge University Press, 2018, 95–117.

名和克郎「序章 体制転換期ネパールにおける「包摂」の諸相一言説政治・社会实践・生活世界」
名和克郎（編）『体制転換期ネパールにおける「包摂」の諸相一言説政治・社会实践・生活世界』（東洋文化研究所叢刊第31輯）三元社、2017、1–34.

名和克郎「近現代ネパールにおける国家による人々の範疇化とその論理の変遷」名和克郎（編）『体制転換期ネパールにおける「包摂」の諸相一言説政治・社会实践・生活世界』（東洋文化研究所叢刊第31輯）三元社、2017、35–87.

Nawa, Katsuo. “Triangulating the Nation State through Translation: Some Reflections on ‘Nation’, ‘Ethnicity’, ‘Religion’, and ‘Language’ in Modern Japan, Germany and Nepal.” *Internationales Asienforum/ International Quarterly for Asian Studies*, 47(1+2), 2016: 11–31.

■ 書評論文・書誌紹介

名和克郎「近刊短評：Ruth Benedict Book Series（タラル・アサド『リベラル国家と宗教—世俗主義と翻訳について』、Partha Chatterjee, *I am the People: Reflections on Popular Sovereignty Today*, Joan Wallach Scott, *On the Judgment of History*）」『ことばと社会—多言語社会研究』（三元社）第23号（2021.10）、295.

名和克郎「近刊短評：言語人類学～「終わり」を巡って（Don Kulick『最期の言葉の村へ—消滅危機言語タヤップ語を話す人々との30年』、Charles L. Briggs and Clara Mantini-Briggs, *Tell Me Why My Children Died: Rabies, Indigenous Knowledge, and Communicative Justice*, Michael Silverstein “Getting & Getting Across the Message”）」『ことばと社会—多言語社会研究』（三元社）第22号（2020.10）、237–238.

名和克郎「近刊短評：一概説書等—人類学系他（井出里咲子、砂川千穂、山口征孝『言語人類学への招待—ディスコースから文化を読む』、高田明『相互行為の人類学—「心」と「文化」が出会う場所』、エマニュエル・A. シェグロフ（西坂仰訳）『会話分析の方法—行為と連鎖の組織』）」『ことばと社会—多言語社会研究』（三元社）第21号（2019.11）、230–231.

名和克郎「近刊短評：継続する経験としてのコミュニケーション—人類学周辺（箭内匡『イメージの人類学』、吉田優貴『いつも躍っている子供たち—聾・身体・ケニア』、Leung, Janny H. C. and Alan Durant (eds.) *Meaning and Power in the Language of Law*）」『ことばと社会—多言語社会研究』（三元社）第20号（2019）、211.

Nawa, Katsuo, and Niwa Mitsuru (comp.). *Academic Books Related to Nepal Written in Japanese in the 21st Century*. Kathmandu: Martin Chautari, 2018.

名和克郎「近刊短評：（言語）人類学（浅井優一『儀礼のセミオティクス—メラネシア・フィジーにおける神話/詩的テキストの言語人類学的研究』、カルロ・セヴェーリ（水野千依訳）『キマイラの原理—記憶の人類学』、Carlo Severi and William F. Hanks (eds.) *Translating Worlds: The Epistemological Space of Translation*）」『ことばと社会—多言語社会研究』（三元社）第19号（2017.10）、255–256.

名和克郎「近刊短評：「他者」との対話の痕跡（エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロ（近藤宏・里見龍樹訳）『インディオの気まぐれな魂』、窪田幸子（監修）『ワンロード 現代アボリジニ・アートの世界』、Kamal P. Malla, *From Literature to Culture: Selected Writings on Nepalese Studies, 1980–2010*）」『ことばと社会—多言語社会研究』（三元社）第18号（2016.10）、162.

名和克郎「三尾稔・杉本良男編『現代インド6 環流する文化と宗教』』『南アジア研究』第28巻（2016）、135–142.

■ その他記事

パトリック・ハインリッヒ、ましこ・ひでのり、名和克郎「まえがき（特集 東京 ことばと都市の統合的理解へ）」『ことばと社会—多言語社会研究』（三元社）第20号（2019）、4–6.

山下里香、Nishaant Choksi、吉岡乾、名和克郎「学会近況 英語テーマ別セッション II Beyond Multilingualism: New Approaches to the Study of Contemporary Linguistic Diversity in South Asian Societies」『南アジア研究』第 29 号 (2017.12)、290–293.

名和克郎「総合コメント」『体制転換の人類学 基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるミクロ-マクロ系の連関 2」公開シンポジウム』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2017、171–184.

■ 事典等項目

名和克郎「ネパールの国民・民族・言語」インド文化事典編集委員会（編）『インド文化事典』丸善出版、2018.1、155.

II. 対象期間中の研究・教育活動

ネパール・南アジア研究および人類学の双方において、研究の幅を広げる 6 年間となった。まず、長年継続している極西部ネパール、ビャンス地方出身の人々に関する研究では、ネパール、インド、アメリカで短期調査を行い、英語および日本語での学会発表を重ねたが、コロナ禍で補充調査が行えなくなったこともあり、刊行物は和文論文 1 本のみに留まった。また、2015 年ネパール大震災以降の社会再編について、ドラカ郡をフィールドとして共同調査を進めたが、これもコロナ禍のため調査が中断され業績刊行に至っていない。他方、日本ネパール協会より東洋文化研究所に寄贈された文献・資料に基づくネパール現代史関連の研究では、英語論文 2 本を刊行した。共同研究としては、従来行ってきた体制転換期ネパールにおける「包摂」を巡る共同研究について、2017 年に編著を刊行することで一つの区切りを付けた。また、丹羽充氏と共同で、21 世紀に刊行されたネパールに関する日本語の学術書の文献目録を英語で刊行するなど、日本と世界のネパール研究者の交流のための基礎作業にも携わっている。さらに文化人類学の理論面では、言語人類学に関して日本語の論考を 3 本刊行した。

教育面では、総合文化研究科超域文化科学専攻及び学際情報学府アジア情報社会コースで大学院生の指導にあたった。博士号を獲得した指導学生の一人は、2018 年に東京大学総長賞を受賞した。授業は、総合文化研究科では期間中全ての年度に文化人類学コースを中心として講義やセミナーを開講し、加えて 2021 年度には学際情報学府にて英語でのセミナーを開講した。組織面では、2018 年度及び 2019 年度に東洋文化研究所副所長を拝命した。2020 年度からは、流動教員として情報学環に所属している。

藏本 龍介 准教授 (2017 年度着任)

所属部門 汎アジア研究部門

研究テーマ 仏教の人類学

プロフィール <https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/kuramoto.html>

I. 対象期間中の研究業績一覧

■ 編著書

藏本龍介 (編)『非営利組織の経営に関する文化人類学的研究』(南山大学人類学研究所研究論集 第 6 号)、南山大学人類学研究所、2019.3.

■ 学術論文

藏本龍介「序 (特集: 社会を想像／創造する贈与—インド系宗教の現代的展開から)」『文化人類学』第 85 巻第 4 号 (2021.3)、659–671.

藏本龍介「「善行」が想像／創造する組織—ミャンマーのダバワ瞑想センターを事例として」『文化人類学』第 85 巻第 4 号 (2021.3)、730–749.

藏本龍介「仏教を結節点とした「つながり」とその変容」『転換期のミャンマーを生きる—「統制」と公共性の人類学』風響社、2020.3、141–164.

藏本龍介「出家者とカネー上座仏教徒社会ミャンマーの事例から」『お金—お金に振り回されない生き方 (サンガジャパン Vol. 34)』サンガ、2019.12、59–81.

藏本龍介「関与と逃避の狭間で—ミャンマーにおける出家者の開発実践の行方」『宗教と開発の人類学』春風社、2019.6、99–132.

Kuramoto, Ryosuke. “Monks’ Lives Shaped by Food: A Case Study in Myanmar.” *Religious Studies in Japan* 4, 2018.2: 47–64.

Kuramoto, Ryosuke. “Visualization of Buddhism in Myanmar Monastic Life and the Distribution of Monasteries in Yangon.” *Mapping Buddhist Cultures among Theravadin in Time and Space*, CIAS, Kyoto University, 2017, 127–140.

■ 書評論文・書誌紹介

藏本龍介「書評: 山本信人監修・宮原暁編著『東南アジア地域研究入門 2 社会』」『東南アジア—歴史と文化』第 47 巻 (2018.5)、87–91.

藏本龍介「書評: 矢野秀武『国家と上座仏教—タイの政教関係』」『東南アジア研究』第 55 巻第 2 号 (2018.1)、402–405.

II. 対象期間中の研究・教育活動

2017～2021 年度（2017 年度着任）は、ミャンマー仏教に関する人類学的・民族誌的な研究を基盤としつつ、「組織」や「贈与」をテーマとした理論的研究を実施した。また 2019 年 9 月～2020 年 8 月まで、シンガポールの Nanyang Technological University に Visiting Scholar として滞在した。

第一に、ミャンマー仏教研究については、フィールドワークにもとづき、現代ミャンマーにおける出家者の社会的役割を分析した。特に、社会参加仏教・政治僧・森の僧の分類を通じて、出家者が単なる「世俗を離れた存在」ではなく、多様な形で社会とかかわっていることを示した。

第二に、「組織」に関する理論的研究においては、営利・非営利の枠を超え、組織の動態や経営の試行錯誤に着目し、「組織の人類学」を提唱した。具体的には、(1) 歴史的視点、(2) アクター間の相互作用、(3) 制度的環境との関係という 3 つのアプローチから、組織の形成・変容プロセスを分析する視点を示した。

第三に、「贈与」に関する理論的研究においては、インド系宗教（ヒンドゥー教、仏教、ジャイナ教）における「贈与」の概念とその社会的影響を探った。特に、インド系宗教における非互酬的な贈与がどのような社会関係を生み出すかに注目し、「チャリティ」「フィランソロピー」「人道主義」などの新たな価値観と結びつき、現代的な意味を獲得していることを指摘した。

また競争的資金として科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）「宗教組織の経営についての比較民族誌的研究」（代表：藏本龍介、2015～2017 年度）および科学研究費補助金（基盤研究 B）「宗教組織の経営プロセスについての文化人類学的研究」（代表：藏本龍介、2018～2021 年度）を獲得し、宗教組織の経営に関する比較研究を推進した。

最後に教育に関しては、総合文化研究科（文化人類学研究室）において、学部必修授業のほか、宗教と経済、アジアの宗教と社会（2017 年度）、宗教と食（2018 年度）、組織の人類学、制度宗教の人類学（2019 年度）、宗教と開発、宗教人類学の新潮流（2021 年度）と題した大学院授業を実施した（2020 年度は在外研究のための授業なし）。

黒田 明伸 教授

所属部門 東アジア研究部門

研究テーマ 世界貨幣史

プロフィール <https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/ankuroda.html>

I. 対象期間中の研究業績一覧

■ 著書

Kuroda, Akinobu. *A Global History of Money*. London: Routledge, 2020.4.

黒田明伸『貨幣システムの世界史 岩波現代文庫』岩波書店、2020.2.

■ 学術論文

黒田明伸「撰銭以前—志海苔古銭についての一考察」『市立函館博物館研究紀要』第32巻(2022.3)、1-9.

Kuroda, Akinobu. “The Monetary System.” *Cambridge Economic History of China*. Cambridge: Cambridge University Press, 2022, 560-596.

Kuroda, Akinobu. “Another History of Money Viewed from Africa and Asia.” *Monetary Transitions. Currencies, Colonialism and African Societies*. Edited by Karin Pallaver. Cham: Palgrave Macmillan, 2021, 265-291.

黒田明伸「中国货币史上的用银转变—切片、秤重、入帳の白银」『中国経済史研究』(2020.1)、17-26. (中国語)

Kuroda, Akinobu. “Famine of Cash: Why Have Local Monies Remained Popular throughout Human History?” *Monetary Plurality in Local, Regional and Global Economies*. Edited by Georgina Gomez. Oxford: Routledge, 2018, 114-122.

Kuroda, Akinobu. “Strategic Peasant and Autonomous Local Market: Revisiting the Rural Economy in Modern China.” *International Journal of Asian Studies* 15(2), 2018.7: 195-227.

Kuroda, Akinobu. “Sivers Cut, Weighed, and Booked: Silver Usage in Chinese Monetary History 銀子切片、秤重及記録在冊—銀在中國錢幣史上的使用.” *The Silver Age: Origins and Trade of Chinese Export Silver 白銀時代—中國外銷銀器之來歷與貿易*. Hong Kong: Hong Kong Maritime Museum, 2017.12, 109-121.

黒田明伸「歐亞白銀重探—錢幣學上的新發現」『澳門研究』第87巻(2017.11)、150-160. (中国語)

Kuroda, Akinobu. “Why and How Did Silver Dominate across Eurasia Late-13th through Mid-14th Century? Historical Backgrounds of the Silver Bars Unearthed from Orheiul Vechi.” *Tyragetia* 11(26), 2017.11: 23–34.

II. 対象期間中の研究・教育活動

黒田は次の2点の史実の発見と解明に貢献した。

第一に、清代中国における銀錢二貨制の実態についての解明である。北京の国家図書館所蔵の農村市鎮の雜貨商統泰号の帳簿と経済研究所所蔵の安徽省屯溪県にて収集された宗族による祭祀帳簿に基づき、19世紀において農村市場で銅錢をもって取引される穀物などの価格の変動が銀錢比価の動きから独立していることを発見し、農民たちが日常的に売買する現地市場が地域間市場から自律的であることを実証した（著書 *A Global History of Money*、論文“Strategic Peasant and Autonomous Local Market”、「中国货币史上的用银转变」）。

第二に、モンゴル帝国体制下のユーラシア大陸における共時的な貨幣現象の発見である。13世紀後半から14世紀中葉にかけて、ロンドンなど欧州の銀貨発行額の変動と、元朝による紙幣発行額の変動、そして残存するベンガルにて発行された銀貨の年次推移などがほぼ同調していることから、モンゴル帝国体制下において紙幣も含めた諸通貨の間に銀建てでの通約性が生じたとの仮説を提示し、さらにモルドバ国立歴史博物館に収蔵されている14世紀中葉のキプチャクハン国遺構出土の銀錠に中国起源の特徴があることを確認し、投下とよばれた中国での封地から西方ハン国へ貢納としてもたらされた銀の移動がユーラシア大陸全体の貨幣現象を同調させた、と見解を補強した（著書 *A Global History of Money*、論文「歐亞白銀重探」）。

また、黒田を研究代表者とする科研費基盤B研究「貨幣の多元性についての国際共同研究—世界史における貨幣間分業とその比較」を、問題意識を共有する仏・英・独・蘭・瑞・露・伊などの研究者の協力を得て遂行し、東亜・南亜・アフリカ・欧州・ロシア・南米を比較し、その成果を2018年8月MITで開催された第18回世界経済史学会にて部会を主宰し披露した。

高見澤 磨 教授

所属部門 東アジア第一研究部門

研究テーマ 引き続き、中華人民共和国における紛争と紛争解決、中華人民共和国における法源、中国法研究の作法、清末以降中華民国に至る中国近代法史を研究した。中国における市民社会の萌芽や習近平政権下における法のあり方は今期の着目点であった。また、本研究所内の未整理資料（多くは中国近現代に関係するもの）の整理も引き続き行った。

プロフィール <https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/takamiza.html>

I. 対象期間中の研究業績一覧

■ 著書

高見澤磨、鈴木賢、宇田川幸則、坂口一成『現代中国法入門（第8版）』有斐閣、2019.12.

■ 編著

高見澤磨、鈴木賢（編）『要説 中国法』東京大学出版会、2017.9.

アジア法学会編（編集代表 孝忠延夫・高見澤磨・堀井聡江）『現代のイスラーム法』成文堂、2016.11.

■ 翻訳

高見澤磨（著）『論“近代経験”與体制転型』崔龍（訳）『法律史評論』（私選大学法学院 社会科学文献出版社）第2巻、2021.10.（中国語）

無名氏（著）、高見澤磨（訳）『中国憲法抜粋（翻訳）（中華人民共和国憲法）』岩沢雄司、植木俊哉、中谷和弘（編）『国際条約集 2021』有斐閣、2021.3.

無名氏（著）、高見澤磨（訳）『中国憲法（抜粋）（中華人民共和国憲法）』岩沢雄司、植木俊哉、中谷和弘（編）『国際条約集 2020』有斐閣、2020.3.

■ 学術論文

高見澤磨「中華人民共和国民法典の歴史と未来」『法学教室』（有斐閣）第493号（2021.10）、4-7.

高見澤磨「中国・台湾・香港の不均衡な互動的法形成」『現代中国』（日本現代中国学会）第65号（2021）、21-34.

高見澤磨「抗日英雄譚への疑義と英雄烈士保護法」『社会体制と法』（「社会体制と法」研究会）第18号（2020.6）、38-48.

高見澤磨「社会変動の中の司法改革 中国の司法制度改革」『法社会学』（日本法社会学会）第 86 号（2020）、76-86.

高見澤磨「中国の憲法改正」『現代中国ゼミナール—東大駒場連続講義』東京大学出版会、2020、189-208.

高見澤磨「いかなる意味の「法治」が形成されつつあるのか」『国際問題』第 685 号（2019.10）、26-34.

高見澤磨「中国における財界と業界」『社会体制と法』（「社会体制と法」研究会）16/17（2019.2）、2-15.

高見澤磨『『人民法院案件質量評価指数編制辦法（試行）』（「人民法院事件処理質評価指数編制辦法（試行）」及び『最高人民法院關於開展案件質量評估工作的指導意見』（「事件処理質評価任務遂行を展開することに関する最高人民法院指導意見」）試訳』加藤新太郎、太田勝造、大塚直、田高寛貴（編）『加藤雅信先生古希記念 21 世紀民事法学の挑戦 上巻』信山社、2018.3、247-265.

高見澤磨「民間借貸」の法的枠組と中小企業金融・個人向け金融『研究 中国』第 5 号（2017.10）、39-45.

高見澤磨「第 1 章 法源」高見澤磨、鈴木賢（編）『要説 中国法』東京大学出版会、2017.9、3-24.

高見澤磨「第 4 章 統治機構」高見澤磨、鈴木賢（編）『要説 中国法』東京大学出版会、2017.9、81-96.

高見澤磨「温州における商会・行業協会の聴き取り調査及び調査実習報告」『東洋法制史研究会通信』（東洋法制史研究会）第 29 号（2016.8）、9-20.

■ 書評論文・書誌紹介

高見澤磨「額定其勞著「奴隸なのか、従属民なのか—清代モンゴルにおける主従関係と人身売買」木下慎悟著「清代中国における府の初審機能—越訴の受理と審理に着目して」林政佑著「日本統治時代台湾における未成年犯罪の処遇—裁判実務に着目して」（『法制史学会七〇周年記念若手論文集 身分と経済』慈学社、二〇一九年）『法制史学会年報 法制史研究』第 70 号（2021）、347-351.

高見澤磨「寺田浩明 東京大学出版会『中国法制史』『中国研究月報』第 73 巻第 1 号（2019.1）、37-40.

II. 対象期間中の研究・教育活動

今期主たる活動は、高見澤磨、鈴木賢編『要説 中国法』（東京大学出版会、2017 年）の編者のひとりとして作業を行ったことと高見澤磨・鈴木賢・宇田川幸則・坂口一成『現代中国法入門』（第 8 版）（有斐閣、2019 年）の出版とである。前者については、「第 1 章 法源」「第 4 章 統治機構」を執筆した。初期の現代中国法研究を支えた研究者である浅井敦を記念するものである

とともに、中級の教科書（入門的教科書はすでに読んであり、中国語の学習歴もある人のための教科書）として企画したものでもある。後者の第7版は2016年の出版であり、その後の変化を取り込んだ。書名どおり入門書である。

今期は、中華人民共和国において、2017年に民法総則公布、習近平政権第二期、2018年に憲法改正、2020年に民法典公布などがあり、また、2018年は、改革開放の出発点とされる（但し、その定位の是非は論点となる）1978年の中国共産党第11期第3回中央委員会全体会議から40周年であるため、民法、「法治」、憲法、司法などについて報告・原稿の依頼があり、それらへの対応として研究・執筆を行った。

2016年度まで所長職にあり、2020、2021年度は感染症対応下での研究・教育活動であったが、執筆以外にも一定の成果があった。大学院法学政治学研究科において、5名の大学院生を指導し、うち修士号取得者1名、博士号取得者1名を得た。訪問研究員の受入も行ったが、感染症下で来日が果たせなかった人もいたのは残念である。2019年12月末に中国・重慶市の西南政法大学において招待講演を行ったが、その時点で武漢市では感染が始まっていたこと、2020年8月には北京の中国政法大学主催でオンライン招待講演を行ったこと、同年10月には日本現代中国学会共通論題報告をオンラインで行ったことなどは今期の特徴的な活動であった。

真鍋 祐子 教授

所属部門 東アジア研究部門

研究テーマ 韓国民主化運動史

プロフィール <https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/manabe.html>

I. 対象期間中の研究業績一覧

■ 編著

真鍋祐子『世界史を越境する/世界史に共振する一画家・富山妙子の作品世界(東洋文化 101 号)』
東京大学東洋文化研究所、2021.3.

真鍋祐子、趙泰燮（総括）『To Turbulent Seas of Memory: The World of Tomiyama Taeko—記憶の海
へ—富山妙子の世界—기억의 바다로—도미야마 다에코의 세계』延世大学校大学出版文化院、
2021.3. (韓国語)

真鍋祐子、小林宏道、レベッカ・ジェニスン(編)『To turbulent seas of memory—the world of Tomiyama
Taeko—기억의 바다로—도미야마 다에코의 세계—記憶の海へ— 富山妙子の世界』「富山妙
子の芸術と思想」研究会、2020.

■ 学術論文

真鍋祐子、伍嘉誠、藤野陽平「対談・儀礼としての民衆デモ—韓国・香港・台湾をめぐる」『現
代宗教 2022』国際宗教研究所、2022.1、1–32.

真鍋祐子「序にかえて 「大津波のあと」から(特集 世界史を越境する/世界史に共振する一画
家・富山妙子の作品世界)」『東洋文化』(東京大学東洋文化研究所) 第 101 号 (2021.3)、1–11.

真鍋祐子「光州をめぐる孤独と連帯—「社会的哀悼」へ向けて—歴史の眼」『歴史評論』(歴史科
学協議会) 第 851 号 (2021.3)、83–92.

真鍋祐子「월경하는 화가,도미야마 다에코의 인생과 작품세계—포스트콜로니얼리즘과
패미니즘의 교차점으로부터」『민주주의와 인권』第 21 卷第 1 号 (2021.3)、77–112. (韓国語)

真鍋祐子「富山妙子とはだれか」『5・18 民主化運動 40 周年記念学術行事 越境する画家—富山
妙子の生と芸術』5・18 民主化運動記録館、東京大学東洋文化研究所、2020.11、15–49.

真鍋祐子「キャンドル集会にみる「過去と未来の対話」—「一九八七年フレーム」に表れた歴史
意識から考える(特集 近現代韓国・朝鮮における街頭集会・示威)—(問題提起と視点)」
『韓国朝鮮の文化と社会』(韓国・朝鮮文化研究会) 第 19 号 (2020.10)、77–112.

真鍋祐子、金子毅「富山妙子の画家人生と作品世界—〈炭鉱〉を軸として、ポストコロニアリズ
ムの視点から」『2018 年度アジア歴史研究報告書』(JFE21 世紀財団) 2019.3、109–134.

真鍋祐子「韓国歴史問題を民衆史観から読み解く—光州事件からの含意（東アジアの諸相）」『世界平和研究』（世界平和教授アカデミー）第44巻第2号（2018）、32–42.

真鍋祐子「口承とシャーマニズム」日本口承文芸学会（編）『こえのことばの現在』三弥井書店、2017.5.

真鍋祐子「シャーマンを生きる—富山妙子の画業に寄せて（後編）」『あいだ』（『あいだ』の会）第233号（2017.5）、12–19.

真鍋祐子「富山妙子画伯의 作品世界속“무당”모티브—植民地主義에서의“한풀이”를 위하여」『環東海地域の 오래된 現在』図書出版해토（ソウル）、2017.5.（韓国語）

真鍋祐子「シャーマンを生きる—富山妙子の画業に寄せて（前編）」『あいだ』（『あいだ』の会）第232号（2017.4）、2–11.

真鍋祐子「韓国現代史における「記念日」の創造—「記憶の闘争」をめぐる」『学環』第92号（2017.3）.

真鍋祐子「「白頭山／長白山」（南北朝鮮／中国）をめぐる聖地ツーリズムの行方」山本敏夫記念文学部基金講座「現代社会と宗教」（編）『戦争と宗教／聖地とツーリズム』慶應義塾大学出版会、2016、50–52.

■ 翻訳

李恩政（著）、真鍋祐子（訳）「「5・18」、そして統一—ベルリン/ドイツにおける韓国民主化運動（特集 世界史を越境する/世界史に共振する—画家・富山妙子の作品世界）—（富山妙子をめぐる「場の力）」」『東洋文化—*Oriental Culture*』（東京大学東洋文化研究所）第101号（2021.3）、193–210.

■ 一般向け記事

真鍋祐子「「無念に死ぬ人がいない世の中に」の叫びが胸を打つ」『『偽りの隣人 ある諜報員の告白』（映画パンフレット解説）』アルバトロス・フィルム、2021.9.

真鍋祐子「記憶と哀悼の韓国政治」『日本・アジア学の歩みと展望—過去・現在・未来』日本・アジアに関する教育研究ネットワーク（ASNET）、2021.3、89–97.

真鍋祐子「ウニ、キム・ジヨンからチャンシルへ—近年女性監督たちが辿る〈終わりから始まる〉ロードムービー」『『チャンシルさんには福が多いね』（映画パンフレット解説）』リアリーライクフィルムズ、2020.12.

真鍋祐子「포스트 코로나와 우리 안의 아베 체제」『가톨릭평론』（리신학연구소）第28号（2020.8）、51–61.（韓国語）

真鍋祐子「“ことば”が紡いだ「想像の共同体」」『『マルモイ』（映画パンフレット解説）』インターフィルム、2020.6.

真鍋祐子「新型コロナ、韓国映画『パラサイト』が描いていた「感染症と排除」の関係—韓国映画の想像力」『現代ビジネス（WEB記事）』講談社、2020.4.

真鍋祐子「선미야,미안해」『그라지라』(光州トラウマセンター) 第7号(2018.12). (韓国語)

真鍋祐子「声なき声の実在性」『共犯者たち』／『スパイネーション／自白』東風(映画パンフレット解説)、2018.12.

真鍋祐子「韓国の民主主義はなぜ「脆弱」なのか—強権的な政権が生まれる構造—映画『1987』から考える」『現代ビジネス』講談社（WEB記事）、2018.11.

真鍋祐子「犠牲者 193 人—韓国国民が 38 年前の「虐殺事件」を振り返るワケ—映画『タクシー運転手』から考える」『現代ビジネス』（講談社）（WEB記事）、2018.8.

II. 対象期間中の研究・教育活動

2016～21 年度は、これまで行ってきた韓国民主化運動を中心とした研究を継続するとともに、研究を通じて得た知見の社会的還元に努めた期間であったといえる。

まず研究活動としては、1970～80 年代の日韓連帯を通して、社会参与としての画業によって韓国民主化を支援した富山妙子（1921～2021 年）をめぐる共同研究を主宰した。2 件の外部資金（2017～20 年度科研費：挑戦的研究（開拓）、2016～17 年 JFE21 世紀財団）を得て、日本、韓国、ドイツ、タイ、フィリピン、メキシコと富山の足跡をたどることでその思想と芸術がどのように構築され、作品世界が国境を越えることでどのように世界史を揺り動かしたかを明らかにした。美術史、社会学、歴史学、人類学、思想史等、越境横断的な共同研究の成果は延世大学博物館との国際シンポジウム共催および富山妙子回顧展（2021 年 3 月～11 月）として結実したが、特に美術史分野におけるアカデミック・インパクトの大きさが注目された。そして本研究の最大の功績は韓国民主化への富山の貢献を掘り起こした点にある。それはメディアに取り上げられることで韓国の世論と政府を動かし、2021 年 6 月の富山に対する叙勲（国民褒章授与）につながった。

次に、対象期間中にとりわけ研究の社会的還元が活発化したのは、2016 年末からの「ろうそく革命」と呼ばれる韓国政治のダイナミズム、18 年から相次いだ光州事件をはじめとする民主化運動を題材とした韓国映画の日本公開、それによる韓国民主化の歴史に対する関心の高まりであった。韓国映画に関連した講演会やトークイベント、パンフレット解説、ラジオやテレビでの解説、WEB 媒体での論考執筆等、これまで積み上げてきた研究の知見を広く社会に還元する機会を多く得た。また演劇や美術の領域においても、韓国民主化運動や民衆美術に関する講演やシンポジウムで研究成果を発表する機会を与えられた。これらの活動はアートに対する学術的貢献のあり方を示す事例として深い意義があると考ええる。

小寺 敦 教授

所属部門 東アジア第一研究部門

研究テーマ 先秦時代血縁集団の研究

プロフィール <https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/kotera.html>

I. 対象期間中の研究業績一覧

■ 編著

小寺敦（責任編集）『出土文獻と秦楚文化（Ⅱ）（東洋文化第 99 号）』東京大学東洋文化研究所、2019.3.

小寺敦（責任編集）『出土文獻と秦楚文化（Ⅰ）（東洋文化第 98 号）』東京大学東洋文化研究所、2018.3.

■ 学術論文

小寺敦「清華簡『邦家之政』譯注」『東京大學東洋文化研究所紀要』第 181 号（2022.3）、108–160.

小寺敦「清華簡『攝命』譯注」『東京大學東洋文化研究所紀要』第 180 号（2022.2）、161–290.

小寺敦「關於清華簡《趙簡子》中的晉國君主」『群書治要一第二屆《群書治要》國際學術研討會論文集』萬卷樓、2021.10、93–112.（中国語）

小寺敦「以清華簡《繫年》爲中心看楚地區的歷史觀」『青銅器與金文 第六輯』上海古籍出版社、2021.6、193–204.（中国語）

小寺敦「清華簡『越公其事』譯注」『東京大學東洋文化研究所紀要』第 178 号（2021.2）、262–364.

小寺敦「關於清華簡《鄭武夫人規孺子》中所描繪謙遜的君主形象」『楚文化与長江中游早期開發國際學術研討會論文集』武漢大學出版社、2021.2、249–273.（中国語）

小寺敦「清華簡『子犯子餘』譯注」『東京大學東洋文化研究所紀要』第 177 号（2020.3）、232–306.

小寺敦「清華簡『晉文公入於晉』譯注」『東京大學東洋文化研究所紀要』第 177 号（2020.3）、308–340.

小寺敦「楚からみた晉—清華簡『子犯子餘』を起點として」『日本秦漢史研究』第 20 号（2019.11）、1–31.

小寺敦「歴史書講読（一）（二）」宮本徹、松江崇（編）『漢文の読み方』放送大学教育振興会、2019.3、216–239.

小寺敦「清華簡『鄭武夫人規孺子』譯注」『東洋文化』第 99 号（2019.3）、123–199.

小寺敦「清華簡『鄭武夫人規孺子』に関する初歩的考察」『東洋文化』第 98 号 (2018.3)、191–211.

小寺敦「清華簡『鄭武夫人規孺子』の謙虚な君主像について」『中國出土資料の多角的研究』汲古書院、2018.3、207–237.

小寺敦「國立故宮博物院「秦・俑—秦文化與兵馬俑特展」參觀記 附：中央研究院座談會・萬卷樓訪問」『出土文獻と秦楚文化』（日本女子大学文学部谷中研究室）第 10 号 (2017.3)、69–72.

小寺敦「清華簡『繫年』譯注・解題」『東京大學東洋文化研究所紀要』第 170 号 (2016.12)、135–420.

■ 書評論文・書誌紹介

小寺敦「書評：松井嘉徳 記憶される西周史」『史学雑誌』129-11 (2020.11)、67–71.

小寺敦「書評：宮宅潔 多民族社会の軍事統治—出土史料が語る中国古代」『中國出土資料學會會報』第 66 号 (2018.7)、7.

小寺敦「書評：武漢大學簡帛研究中心 武漢大学簡帛研究中心主編『簡帛』第十六輯」『中國出土資料學會會報』第 66 号 (2018.7)、7.

小寺敦「書評：松丸道雄 甲骨文の話」『日本秦漢史研究』第 19 号 (2018.11)、126–134.

小寺敦「書評：武漢大學簡帛研究中心 簡帛・第十三輯」『中國出土資料學會會報』第 65 号 (2017.12)、10.

小寺敦「林巳奈夫 廣瀬薫雄・近藤晴香譯 郭永秉潤文殷周青銅器綜覽 第一卷 殷周時代青銅器之研究」『中國出土資料學會會報』第 65 号 (2017.12)、10.

小寺敦「書評：小林伸二 春秋時代の軍事と外交」『歴史評論』第 796 号 (2016.8)、93–97.

II. 対象期間中の研究・教育活動

対象期間中、一貫して中国先秦時代の血縁集団に関する研究を中心テーマとした。楚地域（今日の中国の湖北・湖南省を中心とする地域）の非発掘簡である清華簡諸篇を中心資料とし、基礎作業として清華簡所収の諸篇の訳注作成を行い、そこに見える楚地域の血縁集団に関わるデータを収集した。加えてこれら出土資料の多くが、正式な科学的発掘を経ない所謂「非発掘簡」であることから、現物資料を実見するなどして真偽の判断の参考とした。これら基礎作業を踏まえ、2016～2018 年度は科研費（基盤研究（B））の研究グループに参加して隣接諸分野の研究者と共同しつつ、2016・2019～2021 年度は自らの科研費（基盤研究（C））のプロジェクトに沿って国の内外の研究発表の場で活動した。また 2020 年度以降は新型コロナウイルス感染症の活動制限のため、活動の舞台が専らオンラインとなったが、変わらず研究を継続した。そして伝世文献や清華簡以外の出土資料も利用しながら、先秦時代の血縁集団に関連する応用的な研究を進めた。2016～2018 年度は、歴史記録や君主像が楚地域と中原地域の間で互いに伝播したことや、それ

らの成立問題について、論文や学会報告の場を利用して論じた。2019 年度以降においては、血縁集団に関わる事柄から見出される思想性や歴史観に焦点を当て、中原地域との間で相互に影響を及ぼし合いながら、地域間共通の歴史観や楚地域独自のそれが形成され、またその観念が現実社会にもフィードバックされた様子を論じた。このことは各地域間の諸要素が複合的に組み合わせられて後の漢字文化圏の原型が成立した可能性を意味する。他方対象期間中、本学大学院において授業 1 件、本学以外において授業 2 件を継続して担当した。また 2017～2021 年度に本学 ASNET 副機構長を担当した。社会貢献として、2016～2017 年度に中国出土資料学会会長、2018～2019 年度に同副会長、対象期間中一貫して同理事の任にあった。

大木 康 教授

所属部門 東アジア第二研究部門

研究テーマ 中国明末江南の文人と文学

プロフィール <https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/oki.html>

I. 対象期間中の研究業績一覧

■ 著書

大木康（著）、田訪（訳）『『史記』与『漢書』 中国文化的晴雨計』生活・読書・新知 三聯書店、2021.10.（中国語）

大木康『明清戯曲俗曲雑考』復旦大学出版社、2021.9.（中国語）

大木康『明清江南社会文化史研究』汲古書院、2020.9.

大木康『馮夢龍と明末俗文学』汲古書院、2018.1.

大木康『蘇州花街散歩—山塘街の物語』汲古書院、2017.7.

大木康『馮夢龍『山歌』研究』復旦大学出版社、2017.6.（中国語）

■ 編著

中国文化事典編集委員会（編）、竹田晃（編集委員長）、大木康（編集幹事）『中国文化事典』丸善出版、2017.

■ 学術論文

大木康「鹽谷温の中国戯曲小説研究」『東京学派の研究 総合シンポジウム』（ブックレット東京学派 Vol. 4）東京大学東洋文化研究所、2022.3、34-55.

大木康「明代中国における文化の大衆化」弘末雅士、吉澤誠一郎（編）『岩波講座 世界歴史 12』岩波書店、2022.3、163-179.

大木康「清初文人姜実節の生涯とその文学藝術」『東洋文化研究所紀要』第 180 号（2022.2）、1-63.

大木康「中国明末と日本十八世紀の文学・思想」『アナホリッシュ國文學』第 10 号（2021.11）、95-103.

大木康「『桐橋倚棹録』と近代蘇州の文人たち—王伯祥・顧頡剛・葉聖陶・俞平伯」石川忠久先生星寿記念論文集刊行会（編）『石川忠久先生星寿記念論文集—菊を採る東籬の下』汲古書院、2021.10、351-365.

- 大木康「中国書肆史考—近世を中心に」藤本幸夫（編）『書物・印刷・本屋—日中韓をめぐる本の文化史』勉誠出版、2021.6、700–717.
- 大木康「白話」金文京（編）『東アジア文化講座2—漢字を使った文化はどう広がっていたのか—東アジアの漢字漢文文化圏』文学通信、2021.3、245–254.
- 大木康「中国1 『遊仙窟』」「中国2 『西遊記』」村松真理子、横山安由美（編）『世界文学の古典を読む』放送大学教育振興会、2020、88–119.
- 大木康「東洋文化研究所の漢籍」『東京大学東洋文化研究所×金沢文庫 東洋学への誘い』神奈川県立金沢文庫、2019、82–83.
- 大木康「馮夢龍研究在日本」『馮夢龍研究』第4輯（2019）、11–13.（中国語）
- 大木康「蘇州閶門的文化経済」『明代生活美学論壇文集』中華文物学会、2019.5、118–129.（中国語）
- Oki, Yasushi. “The History of Bookshops in China: With a Focus on the Early Modern Period.” *Acta Asiatica* (The Toho Gakkai) 116, 2019.2: 1–19.
- 大木康「關於宋真宗<<勸学文>>」『新宋学』第7号（2018.10）、164–173.（中国語）
- 大木康「錢謙益と程嘉燾」『東方学』第136号（2018.7）、1–21.
- 大木康「中国古典小説研究の三十年」中国古典小説研究会（編）『中国古典小説研究の未来—21世紀への回顧と展望（アジア遊学218）』勉誠出版、2018.5、30–33.
- 大木康「明末清初の文人・冒襄と香—『影梅庵憶語』から」『香文化録』第3号（2018.5）、50–64.
- 大木康「漢籍の「巻」と「冊」再考—北宋版『通典』をめぐる」宮内庁書陵部蔵漢籍研究会（編）『図書寮漢籍叢考』汲古書院、2018.2、55–61.
- 大木康「尾上兼英先生を悼む」『東方学』第134輯（2017.7）、190–191.
- 大木康「漢籍善本紹介—東京大学東洋文化研究所(5)」『新しい漢字漢文教育』第64号（2017.6）、96–98.
- 大木康「日本江戸時代の「洒落本」と中国文学」『大東文化研究』第98号（2017.6）、191–217.（韓国語）
- Oki, Yasushi. “Wanton, but not Bad: Women in Feng Menglong’s Mountain Songs.” *Wanton Women in Late-Imperial Chinese Literature* (Women and Gender in China Studies, 8). Edited by Mark Stevenson, and Wu Cuncun. Leiden, Boston: Brill, 2017.
- Oki, Yasushi. “Literature in the Sixteenth and Seventeenth Century World.” *The ‘Global’ and the ‘Local’ in Early Modern and Modern East Asia*. Edited by Benjamin A. Elman, and Chao-Hui Jenny Liu. Leiden, Boston: Brill, 2017.

大木康「明清時代馮夢龍作品的讀者及評價」『曾永義先生學術成就與薪傳國際學術研討會論文集』
國立台灣大學中國文學系、2017.3、735-748. (中国語)

大木康「漢籍善本紹介—東京大学東洋文化研究所(4)」『新しい漢字漢文教育』第 63 号 (2016.11)、
79-81.

大木康「漢籍善本紹介—東京大学東洋文化研究所(3)」『新しい漢字漢文教育』第 62 号 (2016.5)、
113-115.

■ 書評

大木康「中国艶本の名ガイド『中国艶書大全』」『東方』第 459 号 (2019)、26-29.

大木康「明清江南文化史研究のすぐれた道案内 李孝悌さんの『恋恋風塵』に寄せて」『恋恋風塵 中国の都市、欲望と生活』東方書店、2018、505-524.

II. 対象期間中の活動報告

これまで中国明末の江南地方における文人と文学について、主として「明末通俗文学の旗手」とされる蘇州の文人馮夢龍を中心に検討を続けてきた。2018 年には、馮夢龍と俗文学に関する論考を集めた『馮夢龍と明末俗文学』を刊行、さらに 2020 年には、『明清江南社会文化史研究』を刊行した。この『明清江南社会文化史研究』では、馮夢龍理解のために準備した、俗文学、文人、科举、書物の四つのテーマに沿って論考を集めた。

これに先立ち、蘇州の色町であった山塘についての歴史を探った『蘇州花街散歩 山塘街の物語』を 2017 年に刊行し、南京秦淮とならぶ色街があった蘇州の色街について紹介した。蘇州の色街が、蘇州城西北の門である閶門から、西北郊にある名勝虎丘に至る山塘河とその運河に沿った山塘街にあったこと、そして山塘街は、南京の秦淮と同様、書店や、書画を扱う骨董店、レストランなどが多く集まる文化地帯であったことを明らかに示した。

2021 年には『明清戯曲俗曲雑考』(中国語)を刊行した。「明清戯曲の環境」「戯曲各論」「俗曲各論」の三部からなり、この時代の戯曲、俗曲の様相の一端を示した。論文には、「錢謙益と程嘉燾」(『東方学』 第 136 号 2018)ほかがある。

教育活動としては、大学院人文社会系研究科(中国文学)において授業を担当し、大学院生を指導した。

所内においては、2021 年に迎える本研究所 80 年を記念する 80 年史の編集作業に従った。また、本研究所と復旦大学文史研究院との交流活動の連絡役をつとめ、文史研究院のサマーセミナーにおいて何度か講義を行った。東大学内において、2018 年度、某全学委員会の副委員長をつとめた(委員長は副学長)。学外においては、日本中国学会理事、中国社会文化学会理事、東方学会評議員、斯文会評議員、理事などをつとめた。

中島 隆博 教授

所属部門 東アジア第二研究部門

研究テーマ 中国哲学史、日本哲学史、世界哲学史、比較哲学

プロフィール <https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/nakajima.html>

I. 対象期間中の研究業績一覧

■ 著書

中島隆博『中国哲学史―諸子百家から朱子学、現代の新儒家まで』中公新書、2022.2.

中島隆博『危機の時代の哲学―想像力のディスクール』東京大学出版会、2021.8.

マルクス・ガブリエル、中島隆博『全体主義の克服』集英社新書、2020.8.

中島隆博、石井剛『ことばを紡ぐための哲学―東大駒場・現代思想講義』白水社、2019.4.

小林康夫、中島隆博『日本を解き放つ』東京大学出版会、2019.1.

中島隆博『思想としての言語』岩波書店、2017.9.

■ 編著

中島隆博（編）『人の資本主義』東京大学出版会、2021.9.

伊藤邦武、山内志朗、中島隆博、納富信留（編）『世界哲学史 別巻』ちくま新書、2020.12.

中島隆博、吉見俊哉、佐藤麻貴（編）『社寺会堂から探る 江戸東京の精神文化』勁草書房、2020.10.

伊藤邦武、山内志朗、中島隆博、納富信留（編）『世界哲学史 8―現代 グローバル時代の知』ちくま新書、2020.8.

伊藤邦武、山内志朗、中島隆博、納富信留（編）『世界哲学史 7―近代Ⅱ 自由と歴史的発展』ちくま新書、2020.7.

伊藤邦武、山内志朗、中島隆博、納富信留（編）『世界哲学史 6―近代Ⅰ 啓蒙と人間感情論』ちくま新書、2020.6.

伊藤邦武、山内志朗、中島隆博、納富信留（編）『世界哲学史 5―中世Ⅲ バロックの哲学』ちくま新書、2020.5.

伊藤邦武、山内志朗、中島隆博、納富信留（編）『世界哲学史 4―中世Ⅱ 個人の覚醒』ちくま新書、2020.4.

伊藤邦武、山内志朗、中島隆博、納富信留（編）『世界哲学史 3—中世 I 超越と普遍に向けて』ちくま新書、2020.3.

伊藤邦武、山内志朗、中島隆博、納富信留（編）『世界哲学史 2—古代 II 世界哲学の成立と展開』ちくま新書、2020.2.

伊藤邦武、山内志朗、中島隆博、納富信留（編）『世界哲学史 1—古代 I 知恵から愛知へ』ちくま新書、2020.1.

中島隆博（編）『世界の語り方 2 言語と倫理』東京大学出版会、2018.9.

中島隆博（編）『世界の語り方 1 心と存在』東京大学出版会、2018.9.

■ 翻訳

許紀霖（著）中島隆博、王前（監訳）、及川淳子、徐行、藤井嘉章（訳）『第 1121 版 叢書・ユニベルシタス—普遍的価値を求める—中国現代思想の新潮流』法政大学出版局、2020.8.

■ 学術論文

中島隆博「王弼再考—否定神学を超えて」渡邊義浩（編）『中国文化の統一性と多様性』汲古書院、2022.3、325–344.

中島隆博「哲学の希望—世界哲学から」國分功一郎、清水光明（編）『地球的思考 グローバル・スタディーズの課題』水声社、2022.3、195–215.

中島隆博「桑木厳翼と中国哲学」廖欽彬、伊東貴之、河合一樹、山村奨（編著）『東アジアにおける哲学の生成と発展—間文化の視点から』法政大学出版局、2022.2、632–651.

中島隆博「地上的普遍性—鈴木大拙、近角常観、宮沢賢治」末本文美士（編）『死者と霊性—近代を問い直す』岩波新書、2021.8、209–230.

中島隆博「世界哲学と東アジア」東京大学東アジア藝文書院（編）『私たちはどのような世界を想像すべきか—東京大学 教養のフロンティア講義』トランスビュー、2021.5、69–97.

中島隆博「わたしたちの共生—パーソナルなものをめぐって」『世界思想 特集：共生』（世界思想社）第 48 号（2021.4）、94–97.

中島隆博、王前译「以“制作”取代“自然” 论丸山真男“近世日本政治思想史中的‘自然’与‘制作’”」许纪霖、刘擎（編）知识分子论丛 第 16 辑『《丸山真男：在普遍与特殊之间的现代性》』江苏人民出版社、2021.4、3–18.（中国語）

Nakajima, Takahiro. “Takeuchi Yoshimi and Civilization.” *Frontiers of Literary Studies in China* (Higher Education Press, Beijing) 15(1), 2021.3: 32–47.

中島隆博「『老子』読解の近代—日本とヨーロッパの中国学の交差」『思想』（岩波書店）第 1161 号（2021.1）、8–37.

- 中島隆博「はじめに」伊藤邦武、山内志朗、中島隆博、納富信留（編）『世界哲学史 別巻』ちくま新書、2020.12、11-13.
- 中島隆博「これからの哲学に向けて」伊藤邦武、山内志朗、中島隆博、納富信留（編）『世界哲学史 別巻』ちくま新書、2020.12、17-130.
- 中島隆博「世界哲学としての日本哲学」伊藤邦武、山内志朗、中島隆博、納富信留（編）『世界哲学史 別巻』ちくま新書、2020.12、157-188.
- 中島隆博「あとがき」伊藤邦武、山内志朗、中島隆博、納富信留（編）『世界哲学史 別巻』ちくま新書、2020.12、379-381.
- 中島隆博「神に先立つ道—鈴木大拙と『老子』」『現代思想 総特集 鈴木大拙—一生誕一五〇年 禅から Zen へ』（青土社）臨時増刊（2020.11）、74-83.
- 中島隆博「世界哲学としての中国哲学・日本哲学」『人文論叢』（二松學舎大学人文学会）第105号（2020.10）、1-25.
- 中島隆博「序論「精神文化の水脈」」中島隆博、吉見俊哉、佐藤麻貴（編）『社寺会堂から探る 江戸東京の精神文化』勁草書房、2020.10、1-7.
- 中島隆博「インタビュー—（湯島聖堂）」中島隆博、吉見俊哉、佐藤麻貴（編）『社寺会堂から探る 江戸東京の精神文化』勁草書房、2020.10、23-37.
- 中島隆博「インタビュー—（東京復活大聖堂）」中島隆博、吉見俊哉、佐藤麻貴（編）『社寺会堂から探る 江戸東京の精神文化』勁草書房、2020.10、38-50.
- 中島隆博「インタビュー—（湯島天満宮）」中島隆博、吉見俊哉、佐藤麻貴（編）『社寺会堂から探る 江戸東京の精神文化』勁草書房、2020.10、51-62.
- 中島隆博「インタビュー—（アッサラム・ファンデーション）」中島隆博、吉見俊哉、佐藤麻貴（編）『社寺会堂から探る 江戸東京の精神文化』勁草書房、2020.10、63-75.
- 中島隆博「日本の儒教」中島隆博、吉見俊哉、佐藤麻貴（編）『社寺会堂から探る 江戸東京の精神文化』勁草書房、2020.10、132-145.
- 中島隆博「座談会—宗教性と変容」中島隆博、吉見俊哉、佐藤麻貴（編）『社寺会堂から探る 江戸東京の精神文化』勁草書房、2020.10、146-190.
- 中島隆博「鼎談—新しい精神文化を求めて」中島隆博、吉見俊哉、佐藤麻貴（編）『社寺会堂から探る 江戸東京の精神文化』勁草書房、2020.10、191-224.
- 中島隆博「パンデミック・デモクラシー」『コロナ後の世界 いま、この地点から考える』筑摩書房、2020.9、273-295.
- 中島隆博「はじめに」伊藤邦武、山内志朗、中島隆博、納富信留（編）『世界哲学史 8—現代 グローバル時代の知』ちくま新書、2020.8、13-15.

中島隆博「あとがき」伊藤邦武、山内志朗、中島隆博、納富信留（編）『世界哲学史 8—現代 グローバル時代の知』ちくま新書、2020.8、295–297.

Nakajima, Takahiro. “Confucian Modernity in Japan: Religion and the State.” *The Journal of Japanese Philosophy* (State University of New York Press), 6, 2020.6: 45–62.

中島隆博「明時代の中国哲学」伊藤邦武、山内志朗、中島隆博、納富信留（編）『世界哲学史 5—中世III バロックの哲学』ちくま新書、2020.5、251–276.

中島隆博「仏教と儒教の論争」伊藤邦武、山内志朗、中島隆博、納富信留（編）『世界哲学史 2—古代II 世界哲学の成立と展開』ちくま新書、2020.2、137–162.

中島隆博「中国の諸子百家における世界と魂」伊藤邦武、山内志朗、中島隆博、納富信留（編）『世界哲学史 1—古代I 知恵から愛知へ』ちくま新書、2020.1、105–132.

Nakajima, Takahiro. “Constitutionalism and Sovereignty: On Constitutional Problems in Japan.” *Telos* (Telos Press Publishing), 189, 2019.12: 156–168.

中島隆博、大澤真幸「資本主義と普遍」堀内勉、小泉英明（編）『生存科学叢書—資本主義はどこに向かうのか—資本主義と人間の未来』日本評論社、2019.7、2–47.

Nakajima, Takahiro. “Seeking a Place for Earthly Universality in Modern Japan: Suzuki Daisetz, Chikazumi Jōkan, and Miyazawa Kenji.” *Philosophies of Place: An Intercultural Conversation*. Edited by Peter D. Herschok and Roger T. Ames. Honolulu: University of Hawaii Press, 2019, 216–227.

中島隆博「宗教的交通の豊かさ」山下範久（編）『教養としての世界史の学び方』東洋経済新報社、2019.4、415–437.

中島隆博「『莊子』の身心変容技法」鎌田東二（編）『身心変容技法シリーズ—身心変容のワザ—技法と伝承—身体と心の状態を変容させる技法と伝承の諸相』サンガ、2018.3、312–325.

中島隆博「デリダにおける中国／中国におけるデリダ」池田喬、合田正人、志野好伸（編）『異教の現象学—〈現象学の異境的展開〉の軌跡 2015–2017』〈現象学の異境的展開〉プロジェクト、2018.3、189–208.

中島隆博「白永瑞訪談録」『思想』（台北：聯經出版公司）第 34 期（2017.12）、249–286.（中国語）

中島隆博「循環し、競合する概念—プラセンジット・デュアラの「対話的超越」と鈴木大拙の「日本的靈性」をめぐって」『日本哲学史研究第 14 号《京都学派の知の新解釈と継承》』（京都大学大学院文学研究科日本哲学史研究室）第 14 号（2017.12）、45–62.

ロバート・ベラー「近代に向き合う」中島隆博（訳）『思想』（岩波書店）（2017.11）、28–54.

Nakajima, Takahiro. “Confucianism in Modern Japan.” *The Bloomsbury Research Handbook of Contemporary Japanese Philosophy*. Edited by Michicho Yusa. London: London, Oxford, New York, New Delhi, and Sydney: Bloomsbury, 2017, 43–63.

Nakajima, Takahiro. “Japanese Nationalism in the Age of Globalization: Toward an Earthly Universalism.” *Reimagining Nation and Nationalism in Multicultural East Asia*. Edited by Sungmoon Kim, and Hsin-wen Lee. London and New York: Routledge, 2017, 178–196.

Nakajima, Takahiro. “Civil Spirituality and Confucian Piety Today: The Activities of Confucian Temples in Qufu, Taipei, and Changchun.” *The Varieties of Confucian Experience: Documenting a Grassroots Revival of Tradition*. Edited by Sébastien Billioud. Leiden and Boston: Brill, 2017, 153–175.

中島隆博「マイケル・ピュエットー中国哲学の現在地」『中国社会と文化』（中国社会文化学会）（2017.7）、86–100.

中島隆博「中國式普世與話語權」『思想』（台北：聯經出版公司）第 33 期（2017.6）、67–83.（中国語）

中島隆博「启蒙与宗教——胡适与福泽谕吉」『现代哲学』（广州：现代哲学杂志社）第三期（2017.5）、124–131.（中国語）

中島隆博「現代中国の儒教復興」『日本儒教学会報』（日本儒教学会）第 1 号（2017.3）、59–67.

Nakajima, Takahiro. “Conditional Universality and World History in Modern Philosophy in East Asia.” *The ‘Global’ and the ‘Local’ in Early Modern and Modern East Asia*. Edited by Benjamin A. Elman, and Chao-Hui Jenny Liu. Leiden and Boston: Brill, 2017, 39–51.

中島隆博「中華の復興—中国的な普遍をめぐるディスコース」大澤真幸等（編）『岩波講座 現代 宗教とこころの新時代』岩波書店、2016.5、67–90.

中島隆博「老子—ハイデガーと中国道家思想」秋富克哉、安部浩、古荘真敬、森一郎（編）『続・ハイデガー読本』法政大学出版局、2016.4、55–57.

■ 書評論文・書誌紹介

中島隆博「書評（184）始まりを始めること—納富信留『ギリシア哲学史』」『UP』（東京大学出版会）第 588 号（2021.10）、46–51.

中島隆博「書評（179）新しい公共空間を開く—田尾陽一『飯館村からの挑戦—自然との共生をめざして』」『UP』（東京大学出版会）第 582 号（2021.4）、48–53.

中島隆博「書評—和久希著『六朝言語思想史研究』（汲古書院、二〇一七年、三八九頁）」『六朝学術学会報』（六朝学術学会）（2021.3）、69–76.

中島隆博「書評（174）夏が好きだと言いなさい—広井良典『人口減少社会のデザイン』」『UP』（東京大学出版会）第 574 号（2020.10）、4–5.

中島隆博「書評（169）思考の殻が砕かれる—市川裕『ユダヤ人とユダヤ教』」『UP』（東京大学出版会）第 568 号（2020.4）、4–5.

中島隆博「書評（164）それは花ぞね—山内志朗『湯殿山の哲学—修験と花と存在と』」『UP』（東京大学出版会）第 562 号（2019.10）、48–53.

中島隆博「書評（158）一族の物語—平野啓一郎『ある男』」『UP』（東京大学出版会）第 558 号（2019.4）、54–59.

中島隆博「推薦序—鈴木大拙 著『禪與日本文化—探索日本技藝内在形式的源頭』」遠足文化事業股份有限公司、2018.10、2–11.（中国語）

中島隆博「書評（153）言語に無理強いして世界哲学を開く—池田喬、垣内景子、合田正人、坂本邦暢、志野好伸『いま、哲学が始まる。明大文学部からの挑戦』」『UP』（東京大学出版会）第 552 号（2018.10）、50–55.

中島隆博「書評（148）人の資本主義—小野塚知二『経済史—いまを知り、未来を生きるために』、梅津順一・小野塚知二編著『大塚久雄から資本主義と共同体を考える—コモンウィール・結社・ネーション』」『UP』（東京大学出版会）第 546 号（2018.4）、50–55.

中島隆博「書評（143）煩悶青年たちが読む親鸞—中島岳志『親鸞と日本主義』」『UP』（東京大学出版会）第 540 号（2017.10）、53–59.

Nakajima, Takahiro. “Dialogical Transcendence and Hope: Book Review on Prasenjit Duara, *The Crisis of Global Modernity: Asian Traditions and a Sustainable Future*.” *International Journal of Asian Studies*, 14(2), 2017.7: 197–206.

中島隆博「書評（132）〈かのように〉の礼—マイケル・ピュエット、クリスティーン・グロス＝ロー『ハーバードの人生が変わる東洋哲学』」『UP』（東京大学出版会）第 528 号（2016.10）、48–53.

中島隆博「書評（126）究極的な理由がないこの世界を言祝ぐ—カンタン・メイヤー『有限性の後で—偶然性の必然性についての試論』」『UP』（東京大学出版会）第 522 号（2016.4）、48–53.

■ 一般向け記事

中島隆博「未来哲学研究所シンポジウム「言語を問う地平—語りえぬものへ」—「はじめに」」『未来哲学』（未来哲学研究所）第 3 号（2021.12）、1–3.

中島隆博「水曜哲学会 事始め」『未来哲学』（未来哲学研究所）第 3 号（2021.12）、108–109.

中島隆博「「莊子」「老子」石井千湖『名著のツボ 賢人たちが推す！ 最強ブックガイド』」『文藝春秋』（文藝春秋）（2021.8）、276–281.

安藤礼二、中島隆博「対談—井筒俊彦を読み直す 新しい東洋哲学のために」『ゲンロン』（株式会社ゲンロン）（2020.9）、210–225.

中島隆博、納富信留「対談—ロゴスと道—世界哲学のために」『思想』（岩波書店）（2020.6）、6–28.

中島隆博「(後編) 今、問い直される倫理と他者との関係性」『日立評論』(日立製作所) 第 101 巻第 5 号 (2019.9)、4-5.

中島隆博「(前編) Human Co-becoming—超スマート社会を支える人間観の再定義」『日立評論』(日立製作所) 第 101 巻第 4 号 (2019.7)、4-5.

中島隆博「インタビュー—あなたを苦しめる「わたし」の正体」『ハーバード・ビジネス・レビュー』(ダイヤモンド社) (2019.5)、74-85.

中島隆博「鈴木大拙と日本的霊性」『図書』(岩波書店) 第 811 号 (2016.9)、2-6.

II. 対象期間中の研究・教育活動

研究に関しては、次の 3 つの柱を中心に行った。

(1) 世界哲学の推進と世界哲学史の刊行

西洋中心または独占的な哲学観から離れ、世界における概念循環や下からの水平的な普遍化に貢献するために、世界哲学を推進し、2020 年には『世界哲学史』全 8 巻+別巻を、責任編集者の一人として出版した。現在韓国語訳が刊行され、中国語訳も進行中である。

(2) 東京学派の研究

科学研究費補助金基盤研究 (B) 「東京学派の研究」(2018 年度から 4 年間) を得て、京都学派とは異なる東京学派について研究した。その成果は、2023 年度に英文雑誌の特集と書籍という形で現れることになる。

(3) 東アジア藝文書院

ダイキン工業からのご支援をいただき、東アジア藝文書院を 2019 年度に立ち上げ、2020 年度からはその院長を務めた。東アジア発の新しいリベラル・アーツを、北京大学と共同で発信する事業である。その成果はブックレット、書籍、電子媒体等で見ることができる。<https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/publications/>を参照のこと。

この期間には、単著 3 冊、編共著 16 冊、共著 17 冊、論文 18 本を公表した。講演等は多数につき省略。

教育に関しては、大学院では総合文化研究科表象文化論と人文社会系研究科中国思想文化と、学部後期では表象文化論と現代思想を担当した。学位論文審査では、副査として 9 人を担当した。国際的な教育連携としては、北京大学との夏期・冬期の共同授業を毎年行い、北京大学・オーストラリア国立大学・ニューヨーク大学とは Winter Institute を年に一回行った。プリンストン大学では 2015 年度冬学期に講義を行った。

組織運営では、本部では GEIL の責任者を務め (2017 年 9 月から 2018 年 7 月まで)、またアジア研究図書館設置に関して、U-PARL 兼務教員 (2016 年度) とアジア研究図書館部会部会

長（2017 年度）を務め、2018 年度からのアジア研究図書館開設を実現した。総長の式辞を担当する委員も総長就任後この間継続している。また 2017 年からはヒューマニティーズ・センターの立ち上げにも関わり、運営委員として支えた（2019 年まで）。東アジア藝文書院は上述のとおりである。

所内では、副所長を 2016 年度と 2017 年度の 2 年間務めた。主に評価に関する業務を行い、評価委員長として外部評価（2017 年 2 月）を執り行った。また 2018 年 4 月からは英文ジャーナル IJAS の Editor in Chief を務めた。

社会貢献では、社会人プログラム EMP の委員として、2008 年の設立時から携わっている。

板倉 聖哲 教授

所属部門 東アジア第二研究部門

研究テーマ 東アジア絵画史の再構築、中国絵画の流通・コレクションの成立・展開、宋元文人の絵画表象

プロフィール <https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/itakura.html>

I. 対象期間中の研究業績一覧

■ 著書

土屋貴裕、三戸信恵、板倉聖哲（著）『もっと知りたい鳥獣戯画（アート・ビギナーズ・コレクション）』東京美術、2020.8.

林原美術館（板倉聖哲など著）『中国絵画名品図録 林原美術館所蔵品総目録 中国絵画篇』林原美術館、2017.7.

■ 編著

板倉聖哲、塚本麿充（編）『コレクションとアーカイヴー東アジア美術研究の可能性』勉誠出版、2022.3.

板倉聖哲、塚本麿充（編）『アジア仏教美術論集—東アジア3（五代・北宋・遼・西夏）』中央公論美術出版、2021.3.

板倉聖哲、高岸 輝（編）『日本美術のつくられ方—佐藤康宏先生の退職によせて』羽鳥書店、2020.12.

板倉聖哲（編）『アジア仏教美術論集—東アジア4（南宋・大理・金）』中央公論美術出版、2020.12.

板倉聖哲、小川裕充（編）『中国絵画総合図録三編—第6巻 総索引 中国絵画総合図録三編』東京大学出版会、2020.3.

板倉聖哲（編）『李公麟「五馬図」』鳥書店、2019.3.

板倉聖哲、小川裕充（編）『中国絵画総合図録三編—第5巻 日本編』東京大学出版会、2019.3.

神奈川県立金沢文庫（板倉聖哲）（編）『「西湖憧憬—西湖梅をめぐる禅僧の交流と15世紀の東国文化」展図録』神奈川県立金沢文庫、2018.9.

板倉聖哲、実方葉子、野地耕一郎（編）『典雅と奇想—明末清初の中国名画』東京美術、2017.11.

板倉聖哲、小川裕充（編）『中国絵画総合図録三編—第4巻 アジア・オセアニア編』東京大学出版会、2016.9.

■ 学術論文

板倉聖哲「南宋時代螺鈿に見る工芸と絵画の関係―「人物螺鈿八角合子」をめぐって」『根津美術館紀要 此君』（根津美術館）（2022.3）.

板倉聖哲「元・用田筆 松栗鼠図」『國華』（朝日新聞出版）第 1516 号（2022.2）、34–35、37–38.

板倉聖哲「藤田美術館所蔵の中国絵画」『名画の殿堂 藤田美術館展―藤田傳三郎のまなざし 図録』奈良国立博物館、2021.11.

板倉聖哲「Kinesis―間島秀徳の画く山水画の「今」」篠原聰（編）『フュージョン―Fusion―間島秀徳 kinesis/水の宇宙&大倉コレクション―特別展』松前記念館、2021.8.

板倉聖哲「明・張保振筆 武陵桃源図 解説」『國華』（國華社）第 1510 号（2021.8）、7、33–36.

板倉聖哲「絵画研究における「写真」の利用―宋時代絵画の事例に注目して」『ものの記憶―読み解き 伝え 遺す』東京文化財研究所、2021.6.

板倉聖哲「『鳥獸戯画』甲・乙巻の前提―中国絵画の視点から」『ユリイカ「特集 鳥獸戯画の世界」』（青土社）（2021.3）、104–114.

板倉聖哲「伝銭選「百鳥図」（宮内庁三の丸尚蔵館）をめぐって」『三の丸尚蔵館年報・紀要』（宮内庁）第 26 号（2021.3）.

板倉聖哲「朝鮮王朝前期 山水図 解説」『國華』（國華社）第 1503 号（2021.1）、31、33–35.

板倉聖哲「近世・近代の関東南画の史的位置―東アジアの視点から」『栃木における南画の潮流―文晁から魯牛まで』展図録』栃木県立美術館、2021.1.

板倉聖哲「伝黙庵筆「布袋図」をめぐって」『國華』（國華社）第 1500 号（2020.10）、21、64–67.

板倉聖哲「“蘇州片”与《倭寇図巻》《抗倭図巻》」『陳履生主編『《抗倭図巻》考』』孔学堂書局、2020.9.

板倉聖哲「言葉から生み出された「名画」―趙孟頫「謝幼輿丘壑図巻」をめぐって」『國華』（國華社）第 1499 号（2020.9）、25、27、29–37.

板倉聖哲「『模写』と『複製』―十七世紀中国の場合」『第 48 回 美術講演会講演録』鹿島美術財団、2020.9.

板倉聖哲「高麗時代の絵画と中国」『浅草寺仏教文化座講座』（浅草寺）第 64 号（2020.8）、42–64.

板倉聖哲「池上本門寺所在の木挽町狩野家筆塚銘をめぐる小考」『法華文化研究』（立正大学法華経文化研究所）第 46 号（2020.3）.

板倉聖哲「東アジア絵画への眼差し―近代「日本画」成立以前」北澤憲昭、古田亮（編）『日本画の所在―東アジアの視点から』勉誠出版、2020.3、105–133.

- 板倉聖哲「“東山表具”の成立をめぐる小考」岩崎奈緒子、中野慎之、森道彦、横内裕人（編）『日本の表装と修理』勉誠出版、2020.3、92-100.
- 板倉聖哲「明・夏景筆 丹崖晴翠図」『國華』（國華社）第 1488 号（2019.10）、33、35-37.
- 板倉聖哲「江戸時代細川家の「唐絵」収集—『古画御掛物之帳』を起点として」『季刊永青文庫』（永青文庫）第 108 号（2019.10）、14-21.
- 板倉聖哲「芸州浅野家の中国絵画コレクション—近世後期・近代の視点から」『入城 400 年記念 広島浅野家の至宝』展図録』広島県立美術館、2019.9、160-173.
- 板倉聖哲「汪肇と「竹川詩画（竹林山水図）巻」—「狂態邪学」派の多様性」『國華』（國華社）第 1487 号（2019.9）、3、5、7-19.
- 板倉聖哲「桃花源をめぐる図像の展開—中国絵画を中心に」『桃源郷展—蕪村・呉春が夢見たもの』図録』大倉集古館、2019.9.
- 板倉聖哲「朝鮮王朝前期（伝 蔣嵩筆） 無尽溪山図」『國華』（國華社）第 1485 号（2019.7）、39、41-43.
- 板倉聖哲「北宋絵画としての「清明上河図」」『決定版 清明上河図』国書刊行会、2019.7.
- 板倉聖哲「文人画圏内的「浙派」画家」『明代生活美学論壇文集 中華文物學會四十周年紀念』2019.5.（中国語）
- 板倉聖哲「明・王誥筆 春景山水図」『國華』（國華社）第 1482 号（2019.4）、33、35-37.
- 板倉聖哲「李巖、像（イメージ）の形成と展開—東アジア絵画史の可能性」『國華「特輯 日本民藝館の中国・朝鮮絵画」』（國華社）第 1481 号（2019.3）、5、7、34-43.
- 板倉聖哲「日本における（伝）蘇軾「木石（枯木怪石）図巻」の伝来と評価」『美術史論叢』（東京大学文学部美術史研究室）第 35 号（2019.3）.
- 板倉聖哲「聡聞極筆 墨梅図」『國華「特輯 日本民藝館の中国・朝鮮絵画」』（國華社）第 1481 号（2019.3）、13、49-51.
- 板倉聖哲「暁斎にとっての中国絵画—『暁斎画談内篇』を中心に」『河鍋暁斎 その手に描けぬものなし』展図録』サントリー美術館、2019.2.
- 板倉聖哲「図版 明（旧伝 趙雍筆） 太宗出獵・明皇觀鷄図」『國華』（國華社）第 1477 号（2018.11）、39-42.
- 板倉聖哲「趙浙「清明上河図巻」をめぐる諸問題—東アジアの視点から」『國華』（國華社）第 1474 巻第 1 号（2018.8）、15-28.
- 板倉聖哲「南宋（伝 徽宗筆） 白梅小禽図団扇」『國華』（國華社）第 1472 号（2018.7）、36-37、39-41.

- 板倉聖哲「《清明上河圖》在東亞的傳播—以趙浙畫（林原美術館藏）為中心」『偽好物—十六到十八世紀蘇州片及其影響』台北故宮博物院、2018.7.（中国語）
- 板倉聖哲「十五世紀東アジア絵画における「古典」意識」『美術史論叢』（東京大学文学部美術史研究室）第34号（2018.3）.
- 板倉聖哲「高麗・朝鮮王朝前期の山水画與宮廷収蔵」『國立台湾大学美術史研究集刊』（國立台湾大学藝術史研究所）44期（2018.3）、35–82.（中国語）
- 板倉聖哲「南宋～元（伝 王淵筆） 蓮池水禽図」『國華』（國華社）第1467号（2018.2）、35–37、33.
- 板倉聖哲「近現代日本における中国絵画の扱われ方—「美術全集」と展覧会に注目して」『中国21』（東方書店）第47号（2018.1）、51–60.
- 板倉聖哲「朝鮮王朝前期（伝 張徳麟筆） 洞庭秋月図」『國華』（國華社）第1466号（2017.12）、33–35、31.
- 板倉聖哲「元（伝 徽宗筆） 牡丹図」『國華』（國華社）第1464号（2017.10）、34–35、37–38.
- 板倉聖哲「正信と元信、初期狩野派の中国絵画理解」『『狩野派の確立者 狩野元信とその時代』展図録』サントリー美術館、2017.9.
- 板倉聖哲「朝鮮王朝中期・十長生図」『國華』（國華社）第1462号（2017.8）、29–32、27.
- 板倉聖哲（共著）「林原美術館の中国絵画」『中国絵画名品図録 林原美術館所蔵品総目録 中國絵画篇』林原美術館、2017.7.
- 板倉聖哲「朝鮮王朝中期（伝 馬遠筆）山水図」『國華「特輯 ナウマン・コレクション」』（國華社）第1461号（2017.7）、37–38、11.
- 板倉聖哲「朝鮮王朝前期（伝 如雪筆）山市晴嵐・江天暮雪図」『國華』（國華社）第1460号（2017.6）、41–43.
- 板倉聖哲「中国絵画写真アーカイヴからデジタル・アーカイヴへ—東京大学東洋文化研究所東アジア美術研究部門の歩み」『美術フォーラム21』（美術フォーラム21）第35号（2017.5）、70–74.
- 板倉聖哲「明・（伝）南宋 陳容筆 龍図」『國華』（國華社）第1458号（2017.4）、49–53.
- 板倉聖哲「「出山釈迦」と「草座釈迦」—釈迦図像をめぐる二三の問題」『法華文化研究』（立正大学法華經文化研究所）第43号（2017.3）、69–85.
- 板倉聖哲「朝鮮王朝前期・「文清」印 山水図」『國華』（國華社）第1456号（2017.2）、38–39.
- 板倉聖哲「作為古典的「東山御物」—梁楷与顔輝」『故宮文物月刊』（台北国立故宮博物院）第406号（2017.1）、22–30.（中国語）

板倉聖哲「南宋・簡翁居敬賛・伝門無関筆 須菩提図」『國華』（國華社）第 1454 号（2016.12）、35–40.

板倉聖哲「円山応挙と中国絵画―「写生雜録帖」から窺えるもの」『円山応挙―「写生」を超えて』展図録』根津美術館、2016.11、143–147.

板倉聖哲「交錯する「唐」―平安時代前期の美」『雅 貞観彫刻と上代の書』瀬津雅陶堂、2016.10.

板倉聖哲「夏永筆 岳陽楼図」『國華』（國華社）第 1452 号（2016.10）、33–39.

板倉聖哲「梁彭孫筆 山水図」『國華』（國華社）第 1450 号（2016.8）、33–38.

板倉聖哲「伝呂健筆 杏花鴛鴦図」『國華』（國華社）第 1449 号（2016.7）、36–37, 39–40.

板倉聖哲「『蘇州片と『倭寇図巻』『抗倭図巻』（再録）『倭寇図巻』『抗倭図巻』をよむ』勉強出版、第二部、2016.4.

■ 一般向け記事

板倉聖哲「日展詣で」『日展ニュース』（日展）第 179 号（2021.9）.

板倉聖哲「『中国絵画総合図録三編』完結」『東方』（東方書店）第 479 号（2021.2）.

板倉聖哲「『春江水暖』 風景の転生／古典の再生」『芸術新潮』（新潮社）（2021.2）.

板倉聖哲、「画猫の系譜」東京大学広報室（編）『猫と東大。猫を愛し、猫に学ぶ』ミネルヴァ書房、2020.11.

板倉聖哲「ある米国人美術史家の頌した彭城百川 インタビュー」『芸術新潮』（新潮社）（2020.2）.

板倉聖哲「永青文庫的中国名画 来自『細川家・江戸唐絵』展的邀約」『藝術時尚 典藏 古美術』（2019.11）.

板倉聖哲「在広島与宋元名画相遇 来自“広島浅野家的至宝―復興大名文化”展的邀約」『藝術時尚 典藏 古美術』（2019.10）.（中国語）

板倉聖哲「ORIENT 東洋パビリオン 正統派の隠し球ともう一つのゆるかわ大国」『芸術新潮』「特集 ゆるかわアート万博」』（新潮社）（2019.8）.

板倉聖哲「唐物研究最前線 中国絵画―東山御物と中国絵画、研究の潮流」『淡交別冊 唐物―茶の美を創った舶来品』淡交社、2019.5.

板倉聖哲「大観が所蔵した中国絵画」『史跡・名勝 大観邸 画業と暮らしと交流 横山大観記念館』求龍堂、2019.3.

板倉聖哲「画猫の系譜」『淡青』（東京大学）第 37 号（2018.9）、16–17.

板倉聖哲「日本所蔵の明清絵画、二つの視点から」『東方』第 442 号（2017.12）.

板倉聖哲「趙浙筆『清明上河図』の数奇な旅」『國華清和会会報』（國華社）（2017.5）、15-19.

板倉聖哲、山下裕二「対談 速水御舟にとっての中国絵画」山種美術館学芸部（編）『「速水御舟の全貌－日本画の破壊と創造」展図録』山種美術館、2016.10、28-36.

板倉聖哲「鑑賞の勘どころ（十八）南宋絵画はなぜ日本人に親しまれたか」『國華清和会会報』（國華社）第27号（2016.5）.

板倉聖哲「イメージソースとなった中国・朝鮮絵画と徹底比較！ 若冲は何を見ていたのか？」『BT』（美術出版社）第1036号（2016.5）、82-91.

■ その他記事

板倉聖哲「図版解説」『『名画の殿堂 藤田美術館展－藤田傳三郎のまなざし』展図録』奈良国立博物館、2021.11.

板倉聖哲「図版解説」『『美のまなざし』展図録』東京美術倶楽部、2021.10.

板倉聖哲「図版解説」『『桃源郷展－蕪村・呉春が夢みたもの』図録』大倉集古館、2019.9.

板倉聖哲「図版解説」『『入城400年記念 広島浅野家の至宝』展図録』広島県立美術館、2019.9.

板倉聖哲「図版解説」『『特別展 東洋学への誘い』図録』神奈川県立金沢文庫、2019.7.

板倉聖哲「芸州浅野家の至宝（十四・十五）」『和風』第38号（2019）.

板倉聖哲「図版解説」『『河鍋暁斎 その手に描けぬものなし』展図録』サントリー美術館、2019.2.

板倉聖哲「図版解説」『『西湖憧憬－西湖梅をめぐる禅僧の交流と15世紀の東国文化』展図録』神奈川県立金沢文庫、2018.9.

板倉聖哲「図版解説」『『お釈迦さんワールド－ブッダになったひと』展図録』龍谷大学龍谷ミュージアム、2018.4.

板倉聖哲「図版解説」『『名作誕生－つながる日本美術』展図録』東京国立博物館、2018.4.

■ 新聞記事

板倉聖哲「驚きの名品 憧れの私立館」『毎日新聞』2022年11月21日夕刊.

■ 事典等項目

板倉聖哲「アジアの中の日本美術－日本文化は独創的か」美学会編『美学の事典』丸善出版、2020.12.

II. 対象期間中の研究・教育活動

東アジア美術史研究室として東アジア絵画デジタル・アーカイヴ・プロジェクトを継続的に進めており、半世紀に亘っての調査の成果として、2020年には『中国絵画総合図録 三編』全6巻（東京大学出版会）を完結した。この出版は美術史学界においては世界的に注目されており、コロナ禍中ながら、完結を機に国際シンポジウムをオンラインで開催、国内外の研究者による発表は充実しており、国内外から多くの参加者を得た。さらにそれらの議論を進めた形で、今後の研究の方向性を示した『コレクションとアーカイヴー東アジア美術研究の可能性』（勉誠社）として刊行した。

個人の研究業績としては、国際シンポジウムにおける研究発表も複数回あり、論文も複数執筆した。一般も含めて影響力のあるものとしては、まず約90年ぶりに再発見された李公麟「五馬図」の紹介である。この発見は中国・台湾で大きく取り上げられ、一般公開された2019年に刊行した原寸大図版の『李公麟「五馬図」』（羽鳥書店）は国内外で高い評価を得た。

この間、展覧会企画にも積極的に参加することで、一方で調査研究を進めつつ、一方で研究成果の普及にも努めた。以下に参加した展覧会を列挙する。2017年 泉屋博古館東京・静嘉堂美術館『典雅と奇想—明末清初の中国名画』展、2018年 台北・國立故宮博物院『偽好物—十六到十八世紀蘇州片及其影響』、2018年 神奈川県立金沢文庫「西湖憧憬—西湖梅をめぐる禅僧の交流と15世紀の東国文化」展、2019年 大倉集古館『桃源郷展—蕪村・呉春が夢みたもの』展、2021年 奈良国立博物館『名画の殿堂 藤田美術館展—藤田傳三郎のまなざし』展など。

教育面では、現在、文学部及び大学院の授業を担当、指導教員として3名の博士課程、2名の修士課程（内、3名は留学生）の指導に当たっている。訪問研究員は、ほぼ毎年、台湾・米国などから優れた研究者を受け入れ、共同調査など意見交換・交流の機会を頻繁に設けている。

塚本 磨充 教授

所属部門 東アジア第二研究部門

研究テーマ 中国美術史（または、作品伝来地域の文化史）。作品の様式研究を基礎におきながら、それを社会のなかで生起するものととらえ、どのように作用して東アジア社会を形成していったのかを、具体的な様相から考察することを目標としている。

- ①東アジアにおける造形作品の様式史的研究。
- ②「美術」作品をめぐる価値評価、およびその社会的変遷についての研究。
- ③東アジア社会と“中国美術”の相互作用についての研究。中国美術コレクションと地域社会の総合的研究（「モノ」と地域社会の文化史）。
- ④東アジア美術史における分断の具体的形成と、修復的（回復的）歴史観に関する研究。

プロフィール <https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/m-tsukamoto.html>

I. 対象期間中の研究業績一覧

■ 著書

塚本磨充『北宋絵画史の成立』中央公論美術出版、2016.

■ 編著

板倉聖哲、塚本磨充（編）『コレクションとアーカイヴー東アジア美術研究の可能性』勉誠出版、2021.

板倉聖哲、塚本磨充（編）『アジア佛教美術論集—東アジアⅢ 北宋・遼・西夏』中央公論美術出版、2021.

■ 学術論文

塚本磨充「世界のなかの関西中国書画コレクション—そのグローバル・コンテキストとローカル・ネットワーク」『関西中国書画コレクション研究会設立 10 周年記念 国際シンポジウム 報告書 中国書画の時空』関西中国書画コレクション研究会、2022.3、9–31.

塚本磨充「中国近代と仏教絵画—金石から人物表現、アジア認識へ」板倉聖哲、塚本磨充（編）『コレクションとアーカイヴー東アジア美術研究の可能性』勉誠出版、2021.12.

塚本磨充「貫休「羅漢図」の時空—禅月大師「応夢羅漢図」と伝播する聖地」野村俊一・空間史学研究会（編）『空間史学叢書第 4 号 「聖と俗の界面」』岩田書院、2021.11、149–191.

塚本磨充「皇帝の身体と聖心イメージ—佛教と中国の身体観の変容」蜷川順子（編）『ハート形のイメージ世界 見えるものと見えないもの』晃洋書房、2021.10、82–99.

塚本麿充「千年宝蔵、多元历史—東京国立博物館的中国书画收藏和其故事」『书与画』第 347 号 (2021.8)、16–29. (中国語)

塚本麿充「総論—北宋社会と仏教の美術—皇帝、士大夫と地域文化の躍動」『アジア佛教美術論集—東アジアⅢ 北宋・遼・西夏』中央公論美術出版、2021.2、3–64.

塚本麿充「無準師範と弟子たちの文物ネットワーク—墨蹟・頂相・拓本の流通」『アジア佛教美術論集—東アジアⅣ 南宋・金・大理』中央公論美術出版、2020.12、475–513.

塚本麿充 (著)、周敏 (訳)「日本看中国的誤解譜系」『南京艺术学院学报—美术与设计』2020 年第 4 号 (2020.8)、56–59. (中国語)

塚本麿充「中国・宮廷コレクションと東アジア文化の生成—南宋復興秘閣の成立と江南佛教世界の変容」『東西中世のさまざまな地平—フランスと日本の交差するまなざし』知泉書館、2020.6、29–59.

塚本麿充「日本の風景を画いた清朝画家—沈桂「亀鶴勘詩画冊」(野崎家塩業歴史館)と島津重豪」『中国文史論叢』第 15 号 (2020.4)、1–20.

塚本麿充「市河米庵と董其昌—江戸時代後期における明清文人文化と正統派受容の諸相」『美術史論叢』第 36 号 (2020.3)、1–31.

塚本麿充「「環境」としての中国絵画コレクション—「夏秋冬山水図」(金地院、久遠寺)におけるテキストの不在と自然観の相互作用」『アジア遊学』第 246 号 (2020.3)、31–36.

塚本麿充「金原省吾と中国美術史学—美術批評と美術史学のあいだで」『帝国美術学校の誕生—金原省吾とその同志たち』武蔵野美術大学美術館・図書館、2019.9、169–191.

塚本麿充「徽宗朝における宮廷文物の収蔵・展覧活動と「清明上河図」の淡彩表現」東京国立博物館・北京故宮博物院 (編)『決定版 清明上河図』国書刊行会、2019.7、152–172.

塚本麿充「江戸時代の中国絵画コレクション—近代・中国美術史学への懸け橋」『SGRA レポート』(第 11 回 SGRA チャイナ・フォーラム 東アジアからみた中国美術史学) 84 号 (2019.5)、6–25.

塚本麿充「作品解説「伝張思恭筆 阿弥陀如来像」、伝宣宗筆「狗図」」『國華「特輯 日本民藝館の中国・朝鮮絵画」』第 1481 号 (2019.3)、1–31.

塚本麿充「「任仁発」から「任月山」へ—「琴棋書画図」(東京国立博物館蔵)を中心とした任仁発イメージの変容」『美術史論叢』35 号 (2019.3)、1–31.

塚本麿充「近代・「中国」絵画研究精神史のなかの大徳寺五百羅漢図」『徹底討論 大徳寺五百羅漢図の作品誌』九州大学大学院人文科学研究院発行、汲古書院印刷、2019.3、303–324.

塚本麿充「徐揚「京師生春詩意図」と重華宮—清朝宮廷絵画の表現、場所と鑑賞者」『國華「特輯 描かれた都 明清近世篇」』(國華社) 1474 号 (2018.8)、29–44.

塚本麿充（著）、宋剛（訳）「国界与国籍—“美術”作品与社会的対話」『东北亚外语研究』2017 年第 7 期（2017.7）、21–30.（中国語）

塚本麿充「道宣律師像・元照律師像の絵画表現とその制作集団」『國華 「特輯 泉涌寺の美術」』（國華社）1458 号（2017.4）、27–36.

塚本麿充「境界と国籍—美術作品をめぐる社会との対話」『AFC アジアの未来へ—私の提案』（公益財団法人 渥美国際交流財団 関口グローバル研究会）第 3 卷（2017.4）、12–24.

塚本麿充「『本草品彙精要』と明代宮廷画院」『杏雨』19 号（2016.6）、87–132.

塚本麿充「中国の書画」朴亨國（監修）『東洋美術史』武蔵野美術大学出版局、2016.4、177–207.

■ 書評論文・書誌紹介

塚本麿充「中国絵画史の情報をしらべる」漢字文献情報処理研究会（編）『デジタル時代の中国学リファレンスマニュアル』好文出版、2021、452–462.

塚本麿充「読書案内—中国の皇帝と美術品—読んで知り、見て感じるための読書案内」『歴史と地理—世界史の研究』第 728 卷（2019.11）、40–43.

塚本麿充「書評—宇佐美文理著 中國藝術理論史研究」『東洋史研究』第 76 卷第 3 号（2017.12）、476–489.

■ 一般向け記事

塚本麿充「東大教師が新入生にすすめる本」『UP』（東京大学出版会）第 582 卷（2021.4）.

■ その他記事

塚本麿充「（東大図書館所蔵）江戸の書画家たちの蔵書とその行方」『東京大学アジア研究図書館ニューズレター』（東京大学アジア研究図書館）第 4 号（2021.7）、8–10.

塚本麿充「藝術家が語り始める時—『林泉高致集』—画家の親子の物語」『淡青「特集 東大のアート、アートの東大」』（東京大学）第 38 号（2019.3）、22.

■ 事典等項目

塚本麿充「徐渭、龔賢、楊文驄ほか、10 作品」『典雅と奇想—明末清初の中国名画』東京美術、2017. 11.

塚本麿充「王冕「孔子像」、陳範「麻姑仙図」、陳汝礪「夏冬景山水図」ほか、11 作品」『中国絵画名品図録 林原美術館所蔵品総目録 中国絵画篇』林原美術館、2017. 7.

塚本麿充「「芸術」「美術」と「書画」、何が違うのか」「欧米に収蔵される中国美術はいつ収蔵されたのか」「真贋のはざま」など5項目『中国文化史事典』丸善出版、2017. 4.

II. 対象期間中の活動報告

『北宋絵画史の成立』（2016年4月）を出版し、「第7回 三島海雲学術賞」（2018年7月）を受賞した。また当該期間に、『アジア佛教美術論集 東アジアⅢ 五代・北宋・遼・西夏』（2021年3月）を共編、出版した。日本語・中国語・英語での学会発表・講演等を25回、学術論文・解説・書評・翻訳・講演録などをふくめ23篇を刊行した。特に2020年度以降はコロナ禍のため海外での作品調査の機会が激減し、一方でオンラインでの発表が多くなった。後半は作品の調査を第一と考える美術史研究の今後のありかたをめぐって、試行錯誤する期間ともなった。

また、東アジア美術研究室が1982年以来刊行を続けてきた『中国絵画総合図録』三編が完結し、記念の国際シンポジウムがオンラインで多数の参加者を得て開催された（2021年3月20日）。この論文集として、『コレクションとアーカイヴ 東アジア美術研究の可能性』（2021年12月、共編）を刊行することができた。将来的には新たな研究費獲得を目指し、四篇の調査が開始される予定である。

そのほか、東洋文化研究所公開講座（2016年）、出光美術館（2019年）、京都国立博物館（2020年）など一般向けの講演活動もおこなった。科研費での調査活動もふくめ、今後の研究に大きな進展があり、新たな方向性をつかむことができた。

本学人文社会系研究科で授業を担当したほか、東京藝術大学大学院文化財保存学で非常勤講師をつとめ（2013年度～）、愛知県立芸術大学（2014年度～）などでも博士審査、指導にかかわり、制作の現場にかかわることで多くの学びを得た。総長補佐（2019年度）、そのほか学内・所内各委員をつとめた。

田中 有紀 准教授 (2020 年度着任)

所属部門 東アジア第二研究部門

研究テーマ 中国の音楽と科学に関する思想

プロフィール <https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/yuki.html>

I. 対象期間中の研究業績一覧

■ 編著

田中有紀（編）『朱子学的过去与未来』東京大学東アジア藝文書院、2021.2.

田中有紀（編）『東アジア音楽思想における「和」』東京大学東アジア藝文書院、2020.11.

■ 学術論文

田中有紀「工人の記録としての『周礼』考工記—江永の楽律と車制の考証をめぐって」『中国—社会と文化』第36巻（2021.7）、128–145.

田中有紀「从理学向考据学的转变？—江永的律吕学与周礼学」『EAA ブックレット 朱子学的过去与未来』東京大学東アジア藝文書院、2021.2、59–71.

田中有紀「中国における古琴文化と「和」」『EAA ブックレット 東アジア音楽思想における「和」』東京大学東アジア藝文書院、2020.11、71–89.

田中有紀「聖人はすべてを豫見できるか—江永の天文学における八線表（三角關數表）と西學中源説」『東洋史研究』第79巻第1号（2020.6）、75–107.

■ 翻訳・訳注

李晨陽（著）、田中有紀（訳）「世界哲学としての中国哲学」『中国—社会と文化』第35号（2020.7）、6–19.

田中有紀『朱子語類』卷九二「楽」篇訳注（三）41～65条『中国哲学研究』第31号（2021.4）、96–120.

II. 対象期間中の研究・教育活動

前近代中国、特に宋代から清代初期（10～18世紀）の朱子学の時代における音楽や科学技術の歴史を哲学的視点で研究した。科学技術、とりわけ音律学や数学、天文暦法といった学術に取り組んだ、儒教的な教養を身に着けた知識人たちの文献を分析し、以下の成果を達成した。

第一に、知識人たちが、科学技術を経学・礼学として論じたことを明らかにし、彼らの学術が、

明末清初に流入する西洋の科学技術と融合する中で、朱子学から考証学へと変化する中国思想史における大きな転換期に、どのような影響を与えているかについて基礎的な研究を行った（論文「聖人はすべてを豫見できるか—江永の天文學における八線表（三角關數表）と西學中源說」「从理学向考据学的转变? —江永的律吕学与周礼学」）。

第二に、知識人たちが、技術が生み出す「物」をどう見るかを通じて、前近代東アジアにおける人間と自然との関係に関する思考を描き出した（論文「中国における古琴文化と「和」」、報告「儒学における「鐘」をめぐる数の思想」など）。

第三に、コロナ禍という非常事態において、中国という領域にとどまらず、芸術やその芸術をとりまく空間に目を向けた報告を行った（「朱熹与书院—朱门弟子的学术活动」「墨子の非楽思想と非常事態」「森本厚吉の住宅論—「実行」と「信仰」の偉人リビングストーンと文化アパートメント構想」）。

また、研究代表者である科研費若手研究「中国における「科学」と「技術」の哲学—江永の「自然」と「人間」をめぐる思想」を獲得し、分担研究者としては挑戦的研究（開拓）「機械学習を用いた東アジア数理調和思想の実証的研究と共生倫理の検討」、基盤研究（B）「グローバル化する中国の現代思想と伝統に関する研究」に参加した。シンポジウム「コロナ禍における藝術の理論と実践」やEAA研究会「部屋と空間プロジェクト」を開催し、分野を超えた幅広いメンバーと研究交流を行った。

高橋 昭雄 教授

所属部門 南アジア研究部門

研究テーマ 東南アジア農村社会経済論

プロフィール <https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/takahashi.html>

I. 対象期間中の研究業績一覧

■ 著書

高橋昭雄『ミャンマーの体制転換と農村の社会経済史—1986–2019 年』東京大学出版会、2021.

高橋昭雄『蒼生のミャンマー—農村の暮らしからみた、変貌する国』明石書店、2018.

■ 学術論文

高橋昭雄「体制転換とミャンマー農村社会の社会経済変容」永井浩、田辺寿夫、根本敬（編）『「アウンサンスーチー政権」のミャンマー—民主化の行方と新たな発展モデル』明石書店、2016.10、111–150.

高橋昭雄「日本の村、ミャンマーの村—共同体とコミュニティー」阿曾村邦昭、奥平龍二（編）『ミャンマー—国家と民族』古今書院、2016.4、521–535.

■ 新聞記事

高橋昭雄「私の視点—騒乱続くミャンマー—反クーデター農村からも」『朝日新聞』2021 年 3 月 13 日朝刊、13 面.

高橋昭雄「都市と農村が連動、抗議拡大」『産経新聞』2021 年 3 月 1 日朝刊、3 面.

高橋昭雄「飛び立つミャンマー—葉巻の町と葉タバコの村（下）（高橋昭雄東大教授の農村見聞録（53））」『東京ビジネスアイ』産経新聞社、2017 年 11 月 2 日朝刊、24 面.

高橋昭雄「飛び立つミャンマー—葉巻の町と葉タバコの村（上）（高橋昭雄東大教授の農村見聞録（52））」『東京ビジネスアイ』産経新聞社、2017 年 11 月 1 日朝刊、23 面.

高橋昭雄「飛び立つミャンマー—農地接収問題と NGO（高橋昭雄東大教授の農村見聞録（51））」『東京ビジネスアイ』産経新聞社、2017 年 10 月 27 日朝刊、21 面.

高橋昭雄「飛び立つミャンマー—23 年ぶりの半乾燥地調査（下）（高橋昭雄東大教授の農村見聞録（50））」『東京ビジネスアイ』産経新聞社、2017 年 10 月 20 日朝刊、21 面.

高橋昭雄「飛び立つミャンマー—23 年ぶりの半乾燥地調査（上）（高橋昭雄東大教授の農村見聞録（49））」『東京ビジネスアイ』産経新聞社、2017 年 10 月 13 日朝刊、21 面.

高橋昭雄「飛び立つミャンマー—村は生活のコミュニティ（高橋昭雄東大教授の農村見聞録（48）」『東京ビジネスアイ』産経新聞社、2017年8月4日朝刊、21面。

高橋昭雄「飛び立つミャンマー—日本人は共同体を見たがる（高橋昭雄東大教授の農村見聞録（47）」『東京ビジネスアイ』産経新聞社、2017年7月28日朝刊、21面。

高橋昭雄「飛び立つミャンマー—雪山の麓の村々を訪ねて（高橋昭雄東大教授の農村見聞録（46）」『東京ビジネスアイ』産経新聞社、2017年7月14日朝刊、21面。

高橋昭雄「飛び立つミャンマー—人口・世帯調査にみる31年の変化（高橋昭雄東大教授の農村見聞録（45）」『東京ビジネスアイ』産経新聞社、2017年6月16日朝刊、21面。

高橋昭雄「飛び立つミャンマー—チン州からの土地所有史論再考（高橋昭雄東大教授の農村見聞録（44）」『東京ビジネスアイ』産経新聞社、2017年5月26日朝刊、29面。

高橋昭雄「飛び立つミャンマー—チン州の焼畑農民、マレーシアへ（高橋昭雄東大教授の農村見聞録（43）」『東京ビジネスアイ』産経新聞社、2017年5月19日朝刊、21面。

高橋昭雄「飛び立つミャンマー—コーカン内戦に巻き込まれて（下）（高橋昭雄東大教授の農村見聞録（42）」『東京ビジネスアイ』産経新聞社、2017年3月17日朝刊、25面。

高橋昭雄「飛び立つミャンマー—コーカン内戦に巻き込まれて（上）（高橋昭雄東大教授の農村見聞録（41）」『東京ビジネスアイ』20 産経新聞社、2017年3月10日朝刊、25面。

高橋昭雄「飛び立つミャンマー—農業水利からみたカンボジアとミャンマー（高橋昭雄東大教授の農村見聞録（40）」『東京ビジネスアイ』産経新聞社、2017年2月10日朝刊、19面。

高橋昭雄「飛び立つミャンマー—シャン州のディアスポラと「新しい村」（高橋昭雄東大教授の農村見聞録（39）」『東京ビジネスアイ』産経新聞社、2016年12月23日朝刊、19面。

高橋昭雄「飛び立つミャンマー—農業・農村100日計画は盛り込み過ぎ？（高橋昭雄東大教授の農村見聞録（38）」『東京ビジネスアイ』産経新聞社、2016年6月24日朝刊、25面。

高橋昭雄「飛び立つミャンマー—人口・世帯センサスにみる農村の就業構造（高橋昭雄東大教授の農村見聞録（37）」『東京ビジネスアイ』産経新聞社、2016年5月20日朝刊17面。

高橋昭雄「飛び立つミャンマー—春雨工場の近傍に酪農家あり（高橋昭雄東大教授の農村見聞録（36）」『東京ビジネスアイ』産経新聞社、2016年4月15日朝刊、21面。

II. 対象期間中の研究・教育活動

高橋は、ミャンマー農村の変容を様々な視角から研究するとともに、東南アジアの農業農村研究に関する新たなパラダイムを提起した。

前者については、21世紀のミャンマー農村の政治的、経済的、社会的変化を動力化、電化、情報化、民主化といった視点から村人の Everyday life を詳細に調査研究し、『蒼生のミャンマー

『農村の暮らしからみた、変貌する国』（明石書店、2018）にまとめた。

後者については、ミャンマー農村の長期にわたる調査をもとに、脱農化論と村落共同体不在論を、『ミャンマーの体制転換と農村の社会経済史—1986–2019 年』（東京大学出版会、2021）で展開した。本書の前半では従来の脱農化論を大幅に拡張して再定義し、これを社会経済変容の叙述に適用した。後半では日本とミャンマーの農村社会構造を比較分析することによって、ミャンマーには日本の村落共同体が不在であることを明らかにした。この二つの論は、ミャンマー農村だけに留まらず、東南アジアの農業農村研究にも資するものとする。

社会貢献活動としては、国際協力機構（JICA）の短期専門家として、カンボジアの「流域水資源利用プロジェクト」およびミャンマーの「イエズン農業大学能力向上プロジェクト」に派遣され、日本の技術・経済協力に貢献した。また、日本ミャンマー協会の特別研究員およびブリッジ・エーシア・ジャパン（BAJ）の理事を務め、日本の対ミャンマー民間経済協力にも貢献した。

国際的活動としては JICA、国際交流基金、みずほアジア人材育成基金等からの依頼で、ミャンマーのイエズン農業大学、ヤンゴン大学、ヤンゴン経済大学、マンダレー大学、モンユワ経済大学等で講演や集中講義を行った。また中国側からの招待で、中国社会科学院や上海の東華大学でも講演した。

2020 年度から 22 年度まで東文研所長を務めた。

青山 和佳 教授

所属部門 南アジア研究部門

研究テーマ フィリピンの海サマの都市移住と宗教的変容に関する民族誌的研究、フィールドワークの倫理と実践、ダバオ市の有機農業と地域社会の再生

プロフィール <https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/waka.html>

I. 対象期間中の研究業績一覧

■ 著書

Waka, Aoyama. *An Intimate Journey: Finding Myself Amongst the Sama-Bajau*. Kyoto and Balwyn North: Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2020.3.

青山和佳、受田宏之、小林誉明、初鹿野直美、東方孝之、宮地隆廣『開発援助がつくる社会生活—現場からのプロジェクト診断（第二版）』大学教育出版、2017.12.

■ 編著

青山和佳（編）『場所を共に耕す, Kuyog Pag-amuma og Lugar, Cultivating a Place Together』東京大学ヒューマニティーズ・センター、第18巻（2022.10）.

青山和佳（編）『開かれていく人文知—もう一つの世界につながるために2（東洋文化102号）』、東京大学東洋文化研究所、2022.3.

青山和佳（編）『開かれていく人文知—もう一つの世界につながるために（東洋文化100号）』東京大学東洋文化研究所、2020.3.

■ 翻訳

アンソニー・リード（著）太田淳、長田紀之（監訳）青山和佳、今村真央、蓮田隆志（訳）『世界史のなかの東南アジア—歴史を変える交差点（上巻・下巻）』名古屋大学出版会、2021.11.

■ 学術論文

青山和佳「長い旅の終わりに—インティメットなリフレクション」『開かれていく人文知—もう一つの世界につながるために（東洋文化100号）』東京大学東洋文化研究所、2020.3、227–245.

青山和佳、中島隆博「エピローグ—往復書簡」『開かれていく人文知—もう一つの世界につながるために（東洋文化100号）』東京大学東洋文化研究所、2020.3、247–254.

青山和佳「人間回復と地域社会の再生のための開発実践考—フィリピン・ダバオ市の有機農園を対象とした予備的考察（初年度報告）」『IPCR』京都大学東南アジア地域研究研究所、2020.3、25.

Aoyama, Waka. “Living in the City as Sama Bajau: The Case of Magsahaya’s Family.” *Harvard-Yenching Working Paper Series*, 2018.3.

青山和佳「共感の土台を求めて—平取町とダバオ市で生活世界に招き入れてもらう」『学際』（統計研究会）第4号（2017.11）、105–112.

Aoyama, Waka. “Living in the City as Sama Bajau: The Case of Kaluman’s Family.” *Harvard-Yenching Working Paper Series*, 2017.5.

Aoyama, Waka. “Living a New Life as ‘Christian Bajau’?” *Harvard-Yenching Institute Working Paper Series*, 2017.4.

青山和佳「火災と教会—The Case of Kaluman’s Family. ダバオ市の海サマ人の生活空間の変容と持続」『アジア文化研究所研究年報』（東洋大学）第51号（2017.2）、281–288.

青山和佳「交易と現地社会の再編—スルー王国における民族間階層の構築と現代を生きる海サマ人」『中国—社会と文化』（中国社会文化学会）第31巻（2016.7）、60–78.

Aoyama, Waka. “Living in the City as Sama Bajau: The Case of Papa Melcito’s Family.” *Harvard-Yenching Working Paper Series*, 2016.5.

■ 書評論文・書誌紹介

青山和佳「書評 ケアはつらいよ—語ること、語り続けることの意味—速水洋子編『東南アジアのケアの潜在力—一生のつながりの実践』京都大学学術出版会、2019」『開かれていく人文知—もう一つの世界につながるために2（東洋文化102号）』、東京大学東洋文化研究所、2022.3、133–146.

■ 事典等項目

青山和佳「物乞い」『東南アジア文化事典』丸善出版、(2019.10)、298–299.

II. 対象期間中の研究・教育活動

2016年4月から2022年3月までの6年間、フィリピンにおけるサマ・バジャウ（Sama Bajau）の人びとの都市移住と宗教的変容、有機農業と地域社会の再生をめぐる研究を展開し、関連する教育活動を行ってきた。民族誌的フィールドワークを基盤とし、サマ・バジャウの人びとの都市適応やキリスト教改宗の過程を詳細に分析し、社会・文化的背景を踏まえた考察を行った。また、ダバオ市の有機農業が人間回復や地域社会の再生に果たす役割について研究を進め、これらの成果を論文・書籍として発表した。さらに、フィリピンの漁村社会や交易ネットワークの変容についても調査を行い、歴史的視点を交えた分析を試みた。学術的な発信としては、単著や編著、共訳書の出版を行い、フィリピン社会をめぐる学際的な議論に貢献した。とくに、サマ・バジャウの人びとの長年の関わりを綴った単著 *An Intimate Journey*（2020）は、民族誌としての意義を持つとともに、フィールドワークの倫理や方法論についても議論を深める機会となった。さら

に、『世界史のなかの東南アジア』の共訳を通じ、東南アジア研究の基盤を広げる試みもおこなった。研究成果の発信にくわえ、国内外の研究会や国際学会での口頭発表を通じて、他分野の研究者との交流を図り、学際的な視点の深化をめざした。また、学内外での講義・ゼミを担当し、大学院教育にも積極的に関与した。ほかに、開発研究の教科書的な性格をもつ共編書『開発援助がつくる社会生活』が好評につき第二版が刊行された。さらに、日本型フィールドワークの特性についても考察を行い、長期的関与を前提とした調査手法の意義を検討した。この実践を通じ、調査対象者との倫理的な関係構築や共感のあり方について新たな視点を提示し、学問と社会の接点を模索した。こうした研究と教育活動を通じ、フィリピンの社会変動に関する理解を深めるとともに、学際的な研究の発展に貢献できるよう努めた。

馬場 紀寿 教授

所属部門 南アジア研究部門

研究テーマ 初期仏教と上座部仏教の研究

プロフィール <https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/norihisa.html>

I. 対象期間中の研究業績一覧

■ 著書

馬場紀寿『仏教の正統と異端—パーリ・コスモポリスの成立』東京大学出版会、2022.2.

馬場紀寿『初期仏教—ブッタの思想をたどる』岩波書店、2018.8.

■ 学術論文

馬場紀寿「『転法輪経』とアショーカ王」『東方学』第146輯（2023.）、67–49.

Baba, Norihisa. “Buddhaghosa.” *Oxford Research Encyclopedia of Religion*. Oxford: Oxford University Press, 2022.10. (doi: <https://doi.org/10.1093/acrefore/9780199340378.013.557>)

Baba, Norihisa. “The Fifth Element of the *Sūtrapīṭaka*: Rethinking the Canons of Indian Buddhist Monastic Orders.” *Evolution of Scriptures, Formation of Canons*. Edited by Olna Almogi. *Evolution of Scriptures, Formation of Canons: The Buddhist Case*. Hamburg: Department of Indian and Tibetan Studies, Universität Hamburg, 2022, 231–272.

馬場紀寿「サンスクリット語とパーリ語のコスモポリス」『岩波講座 世界歴史 04 南アジアと東南アジア ～一五世紀』岩波書店、2022、123–145.

馬場紀寿「ブッダー〈所有〉と〈再生産〉の社会に現れた覚者」『アジア人物史 1 [神話～6世紀] 神話世界と古代帝国』集英社、2022.1、259–274.

馬場紀寿「上座部仏教の形成」『アジア人物史 1 [2～7世紀] 世界宗教圏の誕生と割拠する東アジア』集英社、2022.2、23–54.

Baba, Norihisa. “Greatness or Heresy? Pāli Discourse on Vetulla/Vetulya as the Mahāvihāra Response to the Mahāyāna.” *Transactions of the International Conference of Eastern Studies* (一般財団法人東方學會) 第65号 (2021.12)、28–42.

馬場紀寿「ブッダゴーサの正法存続論」『東洋文化研究所紀要』（東京大学東洋文化研究所）第179冊（2021.3）、27–48.

Baba, Norihisa. “The Birth of ‘Mahāyāna Buddhism’: How Shaku Shōen Changed Modern Buddhist Studies.” *Birds as Ornithologists: Scholarship between Faith and Reason*. Edited by Orna Almogi. Hamburg: Department of Indian and Tibetan Studies, 2020, 325–348.

馬場紀寿「仏教における「正統と異端」」『東京女子大学比較文化研究所附置丸山眞男記念比較思想研究センター報告』第15号（2020.3）、52–61.

馬場紀寿「『大乘仏教』と『上座部仏教』の誕生—釈宗演が近代仏教学へ与えた影響」『釈宗演と近代日本—若き禅僧、世界を駆ける』臨済宗大本山円覚寺、2018.6、152–160.

Baba, Norihisa. “From Sri Lanka to East Asia: A Short History of a Buddhist Scripture.” *The “Global” and the “Local” in Early Modern and Modern East Asia*. Edited by Benjamin A. Elman, and Chao-Hui Jenny Liu. Leiden/Boston: Brill, 2017, 121–145.

馬場紀寿「小部の成立を再考する—説一切有部との比較研究」『東洋文化研究所紀要』（東京大学東洋文化研究所）第171冊（2017.3）、129–173.

馬場紀寿「スリランカにおける史書の誕生」『東方学』（東方學會）第133巻（2017.1）、1–14.

■ 一般向け記事

馬場紀寿「ソーシャルと仏教—構造主義の起源？」『UP』第567号（2022.7）、7–11.

馬場紀寿「東京帝国大学の「原始仏教」研究—印哲がたどった道とたどらなかった道」『ブックレット東京学派 No. 4 東京学派の研究—シンポジウム』2022.3、119–133.

馬場紀寿「釈宗演のセイロン留学—こうして「大乘仏教」は生まれた」『図書』第818号（2017.4）、2–5.

II. 対象期間中の活動報告

馬場は、初期仏教（紀元前の仏教）と上座部仏教について以下の研究成果を挙げた。

第一に、初期仏教の研究に関しては、岩波新書『初期仏教 ブッダの思想をたどる』を出版した（2018.8）。諸部派の仏典に共通するものは前3世紀以前に由来するという想定に立った従来の研究に対して、本書は、インドの諸部派の仏典に共通し、かつ、紀元前に存在したことが確実な仏教思想を特定して、それを古代インド史の文脈で読み解くという手法により「初期仏教」を実証的に論じたものである。この新たな方法により、これまでの「初期仏教」の定義を刷新して、インドの諸概念をどのように仏教が転倒したのかを明らかにした。

第二に、上座部仏教の研究に関しては、4世紀頃のスリランカにおいて史書が誕生したことを、最初の史書である『島史』の構造分析により解明した（論文「スリランカにおける史書の誕生」）。これは、『島史』が①インドの仏教、②スリランカの王統、③スリランカの仏教という三つの主題を論じながら、スリランカの都アヌラダプラにあった大寺（Mahāvihāra）という僧院を仏教世界の中心（正統）に位置づけていることを明らかにしたものである（本論文により東方学会賞を受賞）。

第三に、上座部仏教の研究に関連して、19 世紀後半にスリランカでパーリ語を学んだ釈宗演という日本人僧侶が「大乘仏教」という概念を創造し、その弟子となった鈴木大拙が英語で“Mahayana Buddhism”という概念を広めた経緯を解明した。スリランカの仏教の聖典語であるパーリ語の近代における位置を調査する過程で、「大乘仏教」という近代仏教学の重要概念が成立する背景が明らかになったのは大きな成果だった。

古井 龍介 教授

所属部門 南アジア研究部門

研究テーマ 南アジア古代・中世初期史、ベンガル社会経済史

プロフィール <https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/furui.html>

I. 対象期間中の研究業績一覧

■ 著書

Furui, Ryosuke. *Land and Society in Early South Asia: Eastern India 400–1250 AD*. London and New York: Routledge, 2020.

■ 学術論文

Furui, Ryosuke, and Arlo Griffiths. “A New Copperplate Inscription: Grant of the Village Kumudavillikā during the Reign of Śaśāṅka, Year 8.” *Pratna Samiksha: A Journal of Archaeology*, New Series 11, 2020.12: 99–113.

Furui, Ryosuke. “Sujanagar Stone Inscription of the Time of Bhojavarman, Year 7.” *Pratna Samiksha: A Journal of Archaeology*, New Series 10, 2019.12: 115–122.

Furui, Ryosuke. “Bangladesh National Museum Metal Vase Inscription of the Time of Devātideva and its Implications for the Early History of Harikela.” *Puravritta* 2, 2019.7: 45–52.

Furui, Ryosuke. “Agrarian Expansion and Rural Commercialization in Early Medieval North Bengal.” *Early Indian History and Beyond: Essays in Honour of B.D. Chattopadhyaya*. Edited by Osmund Bopearachchi, and Suchandra Ghosh. Delhi: Primus Books, 2019: 155–174.

Furui, Ryosuke. “Social Life: Issues of Varṇa-Jāti System.” *History of Bangladesh: Early Bengal in Regional Perspectives (up to c. 1200 CE)*, Vol. 2, *Society, Economy, Culture*. Edited by Abdul Momin Chowdhury, and Ranabir Chakravarti. Dhaka: Asiatic Society of Bangladesh, 2018, 43–70.

古井龍介「チャンドラグプタ二世」上田信（編）『悪の歴史 東アジア編下・南・東南アジア編』清水書院、2018.8、422–430.

Furui, Ryosuke. “Agrarian Society and Social Groups in Early Medieval Bengal from a Study of Inscriptions.” *Inscriptions and Agrarian Issues in Indian History: Essays in Memory of D. C. Sircar*. Edited by Suchandra Ghosh B. D. Chattopadhyaya, and Bishnupriya Basak. Kolkata: The Asiatic Society, 2017, 168–188.

Furui, Ryosuke. “Subordinate Rulers under the Pālas: Their Diverse Origins and Shifting Power Relation with the King.” *The Indian Economic and Social History Review* 54(3), 2017.7: 339–359.

Furui, Ryosuke. “Variegated Adaptations: State Formation in Bengal from the Fifth to the Seventh Century (rev.)” *State Formation and Social Integration in Pre-modern South and Southeast Asia: A Comparative Study of Asian Society*. Edited by Karashima Noboru, and Hirosue Masashi. Tokyo: The Toyo Bunko, 2017, 73–87.

Furui, Ryosuke. “Brāhmaṇas in Early Medieval Bengal: Data of Inscriptional References.” 太田信宏（編）『前近代南アジア社会におけるまとまりとつながり』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2017.2、181–215.

Furui, Ryosuke. “Ājīvikas, Maṇibhadra and Early History of Eastern Bengal: A New Copperplate Inscription of Vainyagupta and its Implications.” *Journal of the Royal Asiatic Society* 26(4), 2016.10: 391–412.

古井龍介「銅板文書に読む中世初期ベンガルの権力関係」『歴史と地理』第 694 号（2016.5）、1–15.

■ 書評論文・書誌紹介

Furui, Ryosuke. “Review of: *Into the Twilight of Sanskrit Court Poetry: The Sena Salon of Bengal and Beyond*, by Jesse Ross Knutson.” *The International Journal of Asian Studies* 13(2), 2016.7: 243–245.

■ 一般向け記事

古井龍介「碑文を「あつめる」—中世初期ベンガル碑文調査の方法」『フィールドプラス』（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）第 20 号（2018.7）、18–19.

■ 事典等項目

古井龍介「インド封建制論—インド史に封建制はあったのか」吉澤誠一郎（監修）石川博樹、太田淳、太田信宏、小笠原弘幸、宮家潔、四日市康博（編）『論点・東洋史学—アジア・アフリカへの問い 158』ミネルヴァ書房、2022.1、100–101.

古井龍介「文字媒体」『インド文化大事典』丸善出版、2018.1、278.

古井龍介「北インドの国家と帝国」『インド文化大事典』丸善出版、2018.1、244–245.

II. 対象期間中の研究・教育活動

サンスクリット語碑文を主要史料として、古代・中世初期南アジア史、特に中世初期ベンガルの社会経済史についての研究を進めた。碑文史料については、6世紀初頭の東ベンガルにおけるアーjeeヴィカ教徒の活動を証明する銅板文書および12世紀半ばのムスリム商人の活動を記録する石碑を含む3点の碑文を校訂し、論文として公表した。加えて2019年以降は欧州研究評議会プロジェクト *The Domestication of “Hindu” Asceticism and the Religious Making of South and Southeast Asia* (DHARMA, ERC 809994) に研究協力者として参画し、ベンガルの銅板文書および長文石碑の担当者として、既出碑文史料の再校訂と電子化も進めた。碑文史料の校訂・再校訂に

加え、グプタ朝による在地支配の様相、パーラ朝王権と従属支配者との関係や、農村での農耕発展と貨幣経済の浸透、ベンガルにおけるジャーティ制度発展の過程などの諸側面についての論考を論文として公表し、それらの成果も踏まえて、5世紀から13世紀にいたるベンガルにおける社会経済史的变化を、地域王権とそれに従属する支配者層で構成される政治体制、農耕の拡大に伴う土地関係の階層化と農村への貨幣経済の浸透、およびブラーフマナらのネットワーク形成と権威確立に伴う、世襲職業集団のジャーティ秩序としての再編の過程として論じる単著を刊行した。研究の国際的展開については、前述の DHARMA プロジェクトへの参画に加え、科研費基盤研究（A）「グプタ朝以降のインド仏教の僧院に関する総合的研究」の研究協力者兼碑文資料研究班責任者として2019年5月27～28日に南・東南アジアの仏教僧院の社会経済的基盤についての国際ワークショップを開催し、欧米・東南アジアの研究者を交えて活発な議論を行った。教育については、本学人文社会系研究科アジア文化研究専攻の演習を担当するとともに、2021年度には国際仏教学大学院大学で非常勤講師として授業を担当した。

小川 道大 准教授 (2021 年度着任)

所属部門 南アジア研究部門

研究テーマ インド社会経済史。インド西部を対象に、18～19 世紀のイギリスによる植民地化が、インドの社会経済に与えた影響を研究している。植民地化の分析に際しては、英語史料と現地語史料（中世字体（モディイ体）マラーティー語）を組み合わせる手法を取っている。さらに 17～18 世紀にインド西部を支配したマラーター勢力の社会経済史を、現地語史料を用いて研究しており、中長期的な歴史変動の中に植民地化を位置づけることを目指している。

プロフィール <https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/michi.ogw.html>

I. 対象期間中の研究業績一覧

■ 編著

Matsuo, Mizuho, and Michihiro Ogawa, eds. *The Caste Formation in Maharashtra* (MINDAS Working Papers, 4), MINDAS, Centre for South Asian Studies at the National Museum of Ethnology, 2022.1.

■ 学術論文

Ogawa, Michihiro. “Changes in State Rule and Rural Society in 18th-Century Western India: With a Focus on the Land Revenue System under Maratha Rule.” *Acta Asiatica: Bulletin of the Institute of Eastern Culture* 122, 2022.2: 55–74.

Michihiro Ogawa. “Reconsidering the Caste Construction in Early Modern Maharashtra.” *The Caste Formation in Maharashtra* (MINDAS Working Papers, 4). Edited by Mizuho Matsuo, and Michihiro Ogawa., MINDAS, Centre for South Asian Studies at the National Museum of Ethnology, 2022, 27–35.

■ 事典等項目

小川道大「インド在地社会論—インド農村社会はどのように変化したのか」吉澤誠一郎（監修）石川博樹、太田淳、太田信宏、小笠原弘幸、宮宅潔、四日市康博（編）『論点・東洋史 アジア・アフリカへの問い 158』ミネルヴァ書房、2022.1、172–173.

II. 対象期間中の活動報告

小川は、18 世紀にマラーター勢力が支配したインド西部に注目し、同勢力下で作成された現地語（マラーティー語）の村の地税記録と、1818 年の英領化以降に作成された英語の村の地税記録を比較・照合し、前植民地期末期から植民地初期にかけての社会経済変動を連続的に考察した。2021 年に日本南アジア学会の学会賞を受賞した『帝国後のインド 近世的な発展のなかの植民地化』の中で行った郡の分析を、対象期間中にさらに精緻化して村の分析を行った。さら

に植民地期初期である 19 世紀前半に作成された英語の徴税記録と、同時代に現地人役人によって作成された現地語記録との比較を行った。その成果として、両記録の形式・内容の違い、および現地人優位の情報の非対称の状況をアメリカのアジア研究協会（Association for Asian Studies）で示した。他に中国史を専門とする田口宏二郎と、中国とインドの土地制度や地稅徴収方法の変遷について史的比較を行い、水文学を専門とするセマンタ・バガバティが作成したシミュレーションを用いて、19 世紀後半にインド西部に甚大な被害をもたらしたインド大飢饉を天候と疫病の観点から再考した。対象期間に小川は、異なる分野の研究者と協力して研究を進め、その視野を広げた。

さらに東京大学大学院人文社会系研究科の「南アジア近世・近現代史演習」において、イギリス議会文書など東インド会社に関する史料を購読し、史料読解に必要な文献や知識を示した。所内活動では、東洋文化研究所が発行する *International Journal of Asian Studies* の編集に携わり、アジア研究叢書刊行委員会の委員を務めて、本研究所の研究成果の発信に貢献した。合わせて、日本南アジア学会が発行する和文雑誌『南アジア研究』およびインド西部を対象とするマハーラーシュトラ研究会の機関誌『マハーラーシュトラ』の編集委員を務め、南アジア研究の成果を社会に広めることに尽力した。

桒屋 友子 教授

所属部門 西アジア研究部門

研究テーマ イスラーム美術史

プロフィール <https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/masuya.html>

I. 対象期間中の研究業績一覧

■ 著書

真道洋子（著）桒屋友子（監修）『イスラーム・ガラス』名古屋大学出版会、2020.9.

■ 編著

鈴木董、近藤二郎、赤堀雅幸（編集代表）岡田保良、鎌田繁、長沢栄治、永田雄三、西尾哲夫、深見奈緒子、保坂修司、桒屋友子、水野信男、森本一夫（編）『中東・オリエント文化事典』丸善出版株式会社、2020.11

■ 学術論文

桒屋友子「海のシルクロードー青と白の陶磁器を求めて」*The Art of Silk Road: New Research Trends and Perspective*. Seoul: National Research Institute of Cultural Heritage, 2021.11, 172–209.

桒屋友子「宗教が生み出した美の世界」『文明と哲学』第13巻（2021.3）、64–82.

桒屋友子「越境したイスラーム地域製工芸品」鶴岡賀雄、林淳、深澤英隆、細田あや子、渡辺和子、久保田浩（編）『宗教史学論叢 26 下—越境する宗教史』第6部 ものと神の越境」リトン、2020.12、463–492.

Masuya, Tomoko. “Images of Iranian Kingship on Secular Ilkhanid Tiles.” *Iran after the Mongols*. (The Idea of Iran, vol. 8). Edited by Sussan Babaie. London: I.B. Tauris, 2019, 95–113.

Masuya, T. “Portraits of Chinese Emperors in the *Jāmi‘ al-tavārīkh* by Ilkhanid and Timurid Painters.” 『美術史研究集刊 (Taida Journal of Art History)』第45巻（2018.11）、109–158.

Masuya, Tomoko. “Chapter 25. Chinese and Turko-Mongol Elements in Ilkhanid and Timurid Arts. Part 2: Timurids, Central Asia, and Ming China (1380–1507).” In *A Companion to Islamic Art and Architecture*, Vol. 2. Edited by Finbarr Barry Flood and Gülru Necipoğlu. Hoboken: Wiley-Blackwell, 2017, 652–667.

Masuya, Tomoko. “Visualization of Texts: Scenes of Mourning in the Great Mongol Shāhnāma.” *Orient* 52, 2017.3: 5–20.

Masuya, Tomoko. “Iranian Tiles from the Ilkhanid Period at Shangri La.” *Orientations* 47(8), 2016.11: 76–83.

■ 一般向け記事

榊屋友子（学術監修）「「異国の磁器や金属器を手本に、進化した陶器」「金属やガラスなど、多彩な工芸の魅力を解説」「アラブの美と出会える、世界のミュージアムへ」『Pen Books アラブは、美しい』CCC メディアハウス、2020.12、68–77, 88–93.

榊屋友子「イスラーム・タイル研究の現在」『中東協力センターニュース』（一般財団法人中東協力センター）（2020.5）、39–43.

榊屋友子「東京大学東洋文化研究所 80 年のあゆみ」『東洋学への誘い』神奈川県立金沢文庫、2019.7、5–10.

榊屋友子（学術監修）「アラブは、美しい」『Pen』（CCC メディアハウス）第 444 巻（2018.2）、63–69、82–85.

榊屋友子（インタビュー）「連続するタイルの魅力ーイスラームを源流として」『INAX ライブミュージアム News Letter』（INAX ライブミュージアム）第 39 巻（2016.4）、2–5.

■ 新聞記事

榊屋友子「鑑賞術ーイスラム建築を彩る美（4 回連載）」『日本経済新聞』2021 年 8 月 4 日夕刊、14.

■ 事典等項目

榊屋友子「偶像崇拜禁止と造形芸術」「ヨーロッパ美術の影響と伝統美術の終焉」「建築装飾」鈴木董、近藤二郎、赤堀雅幸（編集代表）岡田保良、鎌田繁、長沢栄治、永田雄三、西尾哲夫、深見奈緒子、保坂修司、榊屋友子、水野信男、森本一夫（編）『中東・オリент文化事典』丸善出版株式会社、2020.11、516–517、534–535、570–571.

II. 対象期間中の活動報告

研究業績としては、英語では、イル・ハーン朝、ティムール朝美術に関する論文 5 本（イスラーム美術史の国際的概説書 1 本、日本、台湾の査読付き学術雑誌 2 本、英国国際会議の論文集所収 1 本を含む）、日本語では、故真道洋子氏の初稿を監修して『イスラームのガラス』の学術出版にこぎつけたほか、『中東・オリент文化事典』、『越境する宗教史』、韓国国立文化財研究所のシルクロード美術論文集（韓国語訳あり）所収の学術論文と一般向け記事を執筆した。口頭発表は日本オリент学会公開講演会、台湾中央研究院ワークショップ、Aix Marseille 大学ラウンド・テーブルにて招待講演を行い、Victoria & Albert 美術館でのイスラーム陶器国際シンポジウムでモデレーターを務め、一般向け講演も多数行った。共同研究として、班研究「イスラーム美術の諸相」では、コプト・イスラーム物質文化研究会（共催）3 回、海外研究者を招いての研究会 5 回、国内研究者による研究会 1 回を開催し、科研費研究会にて発表を行うとともに、海外調査を行なった。また、フランス国立美術史研究所・セーヴル国立陶器美術館の Medieval Kashi Project の学術委員を務め、私

学研修員 1 名を受け入れた。教育では本学人文社会系研究科での講義のほか、教養学部前期課程「本郷文系研究所フロンティア講義」の東文研担当、上智大学の非常勤講師を務めた。博士・修士課程学生各 1 名を指導し、前者の博士論文主査、仏国大学博士論文の審査委員長を務め、国際学術誌の論文査読を行なった。2017 年度より 3 年間東洋文化研究所長を拝命し、2018 年度名誉教授選考委員長を含む科所長分担の委員、2019 年度国立大学附置研究所・センター会議第 3 部会長、2017～2019 年度京都大学人文科学研究所共同利用・共同研究拠点運営委員、2020 年度同研究所外部評価委員などを務めた。また、期間を通して日本オリエント学会理事または監事、2021 年度より東洋文庫理事も務めた。

森本 一夫 教授

所属部門 西アジア研究部門

研究テーマ ムスリム諸社会の宗教社会史、インテレクチュアル・ヒストリー

プロフィール <https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/morikazu.html>

I. 対象期間中の研究業績一覧

■ 編著

鈴木董、近藤二郎、赤堀雅幸（編集代表）岡田保良、鎌田繁、長沢栄治、永田雄三、西尾哲夫、深見奈緒子、保坂修司、榊屋友子、水野信男、森本一夫（編集委員）『中東・オリエント文化事典』丸善出版株式会社、2020.11.

Morimoto, Kazuo, ed. “Kingship and Political Legitimacy in the Persianate World,” Symposium, *Journal of Persianate Studies*, 12(2), Leiden: Brill, 2020.1.

池田嘉郎、上野慎也、村上衛、森本一夫（編）『名著で読む世界史 120』山川出版社、2016.12.

■ 学術論文

Morimoto, Kazuo. “Sayyid-ness beyond the Borders of South Asia.” *Journal of the Royal Asiatic Society*, 30(3), 2020.8, 505–511.

Morimoto, Kazuo. “Introduction: Kingship and Political Legitimacy in the Persianate World.” *Journal of Persianate Studies* 12(2), 2020.1, 175–180.

Morimoto, Kazuo. “Sayyido-Sharifology: Personal and Collective Endeavors to Define a New Research Field.” *Islamic Studies and the Study of Sufism in Academia: Rethinking Methodologies*. Edited by Yasushi Tonaga, and Chiaki Fujii: Kyoto: Kenan Rifai Center for Sufi Studies, Kyoto University, 2019, 47–54.

森本一夫「12 世紀エジプトのターリブ裔系譜学者シャリーフッディーン・ジャウワーニー」『西南アジア研究』（2019.1）、1–19.

Morimoto, Kazuo. “A Mid-Fifteenth-Century Attestation of the Muhammad Shahi Isma‘ilis: Between Khudawand Muhammad and Shah Tahir Dakani.” *Orient: Journal of the Society of Near Eastern Studies in Japan*, 53, 2018.9, 95–107.

森本一夫「高校世界史とイスラーム史」長谷川修一、小澤実（編）『歴史学者と読む高校世界史—教科書記述の舞台裏』勁草書房、2018.6、87–104.

ハーシェム・ラジャブザーデ（著）水上遼（訳）森本一夫（編）「ペルシャ文庫蔵ガージャール朝期ペルシャ語文書コレクションについて」『明日の東洋学』第 39 巻（2018.3）、2–6.

Morimoto, Kazuo. “Sayyid Ibn ‘Abd al-Ḥamīd: An Iraqi Shi‘i Genealogist at the Court of Özbek Khan.” *JESHO (Journal of the Economic and Social History of the Orient)*, 59(5), 2016.11, 661–694.

Morimoto, Kazuo. “An Enigmatic Genealogical Chart of the Timurids: A Testimony to the Dynasty’s Claim to Yasavi-‘Alid Legitimacy?” *Oriens*, 44(1/2), 2016.6, 145–178.

■ 書評論文・書誌紹介

Morimoto, Kazuo. “Book Review: İlker Evrim Binbaş, *Intellectual Networks in Timurid Iran: Sharaf al-Dīn ‘Alī Yazdī and the Islamic Republic of Letters*, Cambridge: Cambridge University Press, 2016, Pp. 362.” *International Journal of Middle East Studies* 49(3), 2017.7, 563–564.

■ 一般向け記事

森本一夫 「「イスラーム世界」という言葉—使うか、使わないか」 吉澤誠一郎（監修）石川博樹ほか（編）『論点・東洋史学—アジア・アフリカへの問い 158』ミネルヴァ書房、2021.12、72–73.

森本一夫 「大英図書館所蔵手稿本 Or. 1306 と私」『東京大学アジア研究図書館ニュースレター』（東京大学アジア研究図書館）第3巻（2021.4）、12–14.

森本一夫 「イスラーム期（前近代）の図書館」鈴木董、近藤二郎、赤堀雅幸（編集代表）岡田保良、鎌田繁、長沢栄治、永田雄三、西尾哲夫、深見奈緒子、保坂修司、榎屋友子、水野信男、森本一夫（編集委員）『中東・オリент文化事典』丸善出版株式会社、2020.11、640–641.

森本一夫 「ペルシア語とイラン人」鈴木董、近藤二郎、赤堀雅幸（編集代表）岡田保良、鎌田繁、長沢栄治、永田雄三、西尾哲夫、深見奈緒子、保坂修司、榎屋友子、水野信男、森本一夫（編集委員）『中東・オリент文化事典』丸善出版株式会社、2020.11、114–117.

森本一夫 「預言者一族の血統」鈴木董、近藤二郎、赤堀雅幸（編集代表）岡田保良、鎌田繁、長沢栄治、永田雄三、西尾哲夫、深見奈緒子、保坂修司、榎屋友子、水野信男、森本一夫（編集委員）『中東・オリент文化事典』丸善出版株式会社、2020.11、194–195.

森本一夫 「「5-1 ザウザニー著『動名詞の書』」「5-2 アキーキー著『アリーの子孫のうちで後裔を遺した者の書』」「5-3 マウラーナーザーダ著『アブハリー《哲学の導き》注解』」「5-4 ファフルッディーン・ラーズイー著『神秘の鍵』」「5-5 ジュルジャーニー著『諸学用語定義集』」「5-6 アブー・アッ＝ライス・サマルカンディ著『クルアーン注解』」「5-7 キャーティプ・チェレビ『世界観望の書』」「5-8 イブラヒム・ミュテフェツリカ著『諸共同体の体制に関する根本的な叡智』」「5-9 ジャズーリー著『善美の徴表と光明の煌めき』」神奈川県立金沢文庫（編）『特別展 東京大学東洋文化研究所×金沢文庫 東洋学への誘い』神奈川県立金沢文庫、2019.7、114–116.

森本一夫 「「第4章 イスラーム世界の形成と発展」および「第7章 アジア諸地域の繁栄」のうち「③トルコ・イラン世界の展開」中の「サファヴィー朝の興隆」 木村靖二、岸本美緒、小松久男（編）『詳説世界史研究』山川出版社、2017.12、129–150.

森本一夫「ルバーイヤート」池田嘉郎、上野慎也、村上衛、森本一夫（編）『名著で読む世界史 120』山川出版社、2016.12、150–152.

■ その他の記事

Mūrīmūtū, Kāzū'ū. “Muqaddama.” *Du'āgūyān wa dīwāniyān: Qarya-yi Mirmūt wa Īl-i 'Abdolmalekī-yi Māzandarān dar asnād-i dawra-yi Qājār*. Edited by Hashim Rajab-zāda, and Kīnjī E'ūrā. Tokyo: Markaz-i Pazhūhish wa Ittīlā'-rasānī dar Muṭālī'āt-i Āsiyāyī, Mu'assisa-yi Muṭālī'āt-i Pīshrafta-yi Āsiyā, Dānishgāh-i Tūkyū, 2022, 5–6. (ペルシア語)

森本一夫「序」ハーシェム・ラジャブザーデ（編著）、江浦公治（協力）、森本一夫（序文）『文書史料にみるカージャール朝期のマーザンダラーンとアブドルマレキー部族』東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター、2022.1、1–2.

Mūrīmūtū, Kāzū'ū. “Muqaddama.” *Bāzār wa dukkān wa kārwānsarā dar asnād-i dawra-yi Qājār*. Edited by Hāshim Rajab-zāda and Kīnjī E'ūrā. Tokyo: Markaz-i Pazhūhish wa Ittīlā'-rasānī dar Muṭālī'āt-i Āsiyāyī, Mu'assisa-yi Muṭālī'āt-i Pīshrafta-yi Āsiyā, Dānishgāh-i Tūkyū, 2021, 5. (ペルシア語)

森本一夫「序」ハーシェム・ラジャブザーデ（編著）江浦公治（協力）、森本一夫（序文）『カージャール朝期イランの市場・店舗・隊商宿関連文書』東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター、2021.11、1.

Mūrīmūtū, Kāzū'ū. “Muqaddama.” *Dawāzda faṣl-i bāgh wa būstān wa dirakht dar asnād-i dawra-yi Qājār*. Edited by Hāshim Rajab-zāda and Kīnjī E'ūrā. Tokyo: Markaz-i Pazhūhish wa Ittīlā'-rasānī dar Muṭālī'āt-i Āsiyāyī, Mu'assisa-yi Muṭālī'āt-i Pīshrafta-yi Āsiyā, Dānishgāh-i Tūkyū, 2020, 5. (ペルシア語)

森本一夫「序」ハーシェム・ラジャブザーデ（編著）、江浦公治（協力）、森本一夫（序文）『カージャール朝期イランの樹園地・果樹園・樹木関連文書』東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター、2020.6、1.

Mūrīmūtū, Kāzū'ū. “Muqaddama.” *88 sanad-i āb-i kishāwarzī-yi dawra-yi Qājār*. Edited by Hāshim Rajab-zāda and Kīnjī E'ūrā. Tokyo: Markaz-i Pazhūhish wa Ittīlā'-rasānī dar Muṭālī'āt-i Āsiyāyī, Mu'assisa-yi Muṭālī'āt-i Pīshrafta-yi Āsiyā, Dānishgāh-i Tūkyū, 2019, 5. (ペルシア語)

森本一夫「序」ハーシェム・ラジャブザーデ（編著）江浦公治（協力）、森本一夫（序文）『カージャール朝期イランの農業用水関連文書』東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター、2019.6、1.

Mūrīmūtū, Kāzū'ū. “Muqaddama.” *Asnād-i Ijtimā'ī wa qaḍā'ī-yi dawra-yi Qājār*. Edited by Hāshim Rajab-zāda and Kīnjī E'ūrā. Tokyo: Markaz-i Pazhūhish wa Ittīlā'-rasānī dar Muṭālī'āt-i Āsiyāyī, Mu'assisa-yi Muṭālī'āt-i Pīshrafta-yi Āsiyā, Dānishgāh-i Tūkyū, 2018, 7. (ペルシア語)

森本一夫「序」ハーシェム・ラジャブザーデ（編著）、江浦公治（協力）、森本一夫（序文）『カー
ジャーナル朝期イランの社会関連・司法関連文書』東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究
情報センター、2018.6、1.

Mūrīmūtū, Kāzū'ū. "Muqaddama." *Asnād-i huqūqī wa qaḍā'ī wa asnād-i 'ibādī wa ā'īnī-yi dawra-i Qājār*.
Edited by Hāshim Rajab-zāda and Kīnjī E'ūrā. Tokyo: Markaz-i Pazhūhish wa Ittīlā'-rasānī dar
Muṭālī'āt-i Āsiyāyī, Mu'assisa-yi Muṭālī'āt-i Pishrafta-yi Āsiyā, Dānishgāh-i Tūkyū, 2017, 7-8. (ペル
シア語)

森本一夫「序」ハーシェム・ラジャブザーデ（編著）、江浦公治（協力）、森本一夫（序文）『カー
ジャーナル朝期イランの法的権利関連・司法関連文書および宗教生活関連文書』東京大学東
洋文化研究所附属東洋学研究情報センター、2017.6、1.

森本一夫「序」ハーシェム・ラジャブザーデ（編著）江浦公治（協力）、森本一夫（序文）『カー
ジャーナル朝期イランの宗教・司法関連文書（ペルシア語文書集成、3）』東京大学東洋文化研
究所附属東洋学研究情報センター、2016.6、1-3.

■ 事典等項目

Morimoto, Kazuo. "al-Jawwānī." *The Encyclopaedia of Islam Three*, Vol. 2019-1. Edited by Kate Fleet et
al. Leiden: Brill, 2019, 101-102.

Morimoto, Kazuo. "Ketāb al-naqẓ." *Encyclopaedia Iranica*, Vol. 16-4. Edited by Ehsan Yarshater. Leiden:
Brill, 2018.12, 356-358.

Morimoto, Kazuo. "Tadwin, al-." *Encyclopaedia Iranica*, Vol. 16-4. Edited by Ehsan Yarshater. Leiden:
Brill, 2018.12, 259-361.

Morimoto, Kazuo. "Ibn 'Inaba." *The Encyclopaedia of Islam Three*, Vol. 2017-4. Edited by Kate Fleet, et
al. Leiden: Brill, 2017.6, 135-137.

II. 対象期間中の活動報告

預言者ムハンマドの一族を称する人々を切り口としたイスラーム史研究、なかでも彼らの系
譜を専門とする学者たちの活動に関する社会史的、歴史記述論的研究を継続した。その一環とし
て、2019 年度後半は訪問研究教授としてボン大学で研究に従事した。以前より専門的な研究成
果は英語で刊行することを心がけているが、（遅まきながら、）論文執筆などに当たっての言葉の
壁も大分低くなったと感じるようになってきた。*Journal of the Royal Asiatic Society* の特集号に全
体を総括する文章の寄稿を依頼されたこと、National Endowment for the Humanities（米国）の共
同研究において諮問委員を務めたことなど、地味とはいえ、自分の仕事も世界的にそれなりに認
知され、人の役に立っていると感じることができるようになってきた。また、（これも遅まきな
がら）自らの関心を軸として国内の研究者と共同研究を行うことも考えるようになり、2019 年
度からは科研費基盤（B）を得て「ムハンマド一族をめぐる諸言説に関する研究—イスラーム史

研究の革新をめざして」と題するプロジェクトを実施した（期間４年間）。

人文社会系研究科のアジア史専門分野での教育活動も継続した。1～2 コマの大学院演習を開講し、長く伴走した指導学生の英語による学位請求論文を期間中に完成にいたらせることができた。また、2020～21 年度には教養学部前期課程で初年次ゼミナールを担当した。

Association for the Study of Persianate Societies で副会長、会長代行を、日本オリエント学会と日本中東学会で理事をはじめとする役職を務めた。*Iranian Studies*、*Journal of Persianate Studies* などの国際誌、外国誌、国際的な単行本シリーズの編集委員なども務めた。学内においてはアジア研究図書館の設立と運営に深く関わり、所内においては図書委員長を務めた。

秋葉 淳 教授 (2018 年度着任)

所属部門 西アジア研究部門

研究テーマ オスマン帝国史

プロフィール <https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/j-akiba.html>

I. 対象期間中の研究業績一覧

■ 学術論文

大河原知樹、秋葉淳、藤波伸嘉 (訳)「〔全訳〕オスマン帝国憲法」『東洋文庫リポジトリ』(2022.3)、
<https://doi.org/10.24739/00007560>.

Akiba, Jun. “Muallimhane-i Nüvvab’dan Mekteb-i Kuzat’a: Osmanlı Kadı Okulunun Yarım Yüzyıllık Serüveni.” *Sahn-ı Semân’dan Dârülfünûn’a: XIX. Yüzyıl Osmanlı’da İlim ve Fikir Dünyası: Âlimler, Müesseseler ve Fikrî Eserler, XIX. Yüzyıl*. Edited by Ahmet Hamdi Furat. Zeytinburnu Belediyesi Kültür Yayınları, 2021, 13–29. (トルコ語)

秋葉淳「女子教育と女性教師の伝統—オスマン帝国の場合」服部美奈、小林寧子 (編)『イスラーム・ジェンダー・スタディーズ 3—教育とエンパワーメント』明石書店、2020.12、31–34.

Akiba, Jun. “‘Girls Are Also People of the Holy Qur’an’: Girls’ Schools and Female Teachers in Pre-Tanzimat Istanbul.” *Hawwa: Journal of Women of the Middle East and the Islamic World*, 17(1), 2019.4: 21–54.

Akiba, Jun. “Sharia Judges in the Ottoman Nizamiye Courts, 1864–1908.” *Osmanlı Araştırmaları*, 51, 2018.5: 209–237.

■ 一般向け記事

Akiba, Jun. “[Podcast] Muslim Girls’ Education in Ottoman Istanbul.” *On the Relevance of the Humanities* (Brill) (2019.9): 1.

■ 事典等項目

秋葉淳「オスマン帝国近代の改革—近代化＝西欧化＝世俗化か」吉澤誠一郎 (監修) 石川博樹、太田淳、太田信宏、小笠原弘幸、宮家潔、四日市康博 (編)『論点・東洋史学—アジア・アフリカへの問い 158』ミネルヴァ書房、2022. 1、222–223.

II. 対象期間中の研究・教育活動

2018 年 4 月に東京大学東洋文化研究所に赴任してから 2021 年度までの研究・教育活動の概要は以下の通りである。

第一に、オスマン帝国のシャリーア法廷とその裁判官組織に関する研究を行った。19 世紀以降の司法制度の改革によって生じた変化について、シャリーア法廷と新しい制定法裁判所の裁判官についての英語論文と、シャリーア法廷裁判官の教育改革に関するトルコ語の論考を刊行した。また、研究対象を 18 世紀まで遡り、改革以前の状況の研究も進めている。これに関連して、「オスマン帝国における腐敗」に関する国際共同研究に加わりワークショップに参加したほか、18 世紀の司法行政についてトルコで講演を行った。

第二に、オスマン帝国の女子教育に関する研究により、女性教師が教える女子の初等学校が近代的教育改革以前のイスタンブルで普及していたことを明らかにし、英語論文として国際学術誌に発表した（“Girls Are Also People of the Holy Qur'an”）。

第三に、科研費基盤（B）「オスマン帝国における社会階層とジェンダーに関する国際共同研究」が 2020 年度より採択され、米国やトルコの研究者と連携しつつ、研究を展開した。この研究の一環として、研究セミナーを 3 回開催した。

第四に、オスマン帝国におけるエゴ・ドキュメント（自己語り資料）・自己表象についての研究を進め、米国やトルコの研究者らとともに国際学会でパネルを組織し、報告を行った。

教育活動としては、大学院総合文化研究科地域文化研究専攻で授業を担当し、オスマン帝国史の専門的な教育を行ったほか、学部 1、2 年生向けの「全学自由研究ゼミナール」を 1 セメスター担当した。また、博士論文の主査及び副査をそれぞれ 1 名担当した。

研究所内の役職として、国際学術誌 *International Journal of Asian Studies* の編集に加わった。

渡邊 祥子 准教授 (2021 年度着任)

所属部門 西アジア研究部門

研究テーマ マグリブ近現代史

プロフィール <https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/masuya.html>

I. 対象期間中の研究業績一覧

■ 学術論文

Watanabe, Shoko. “Essai introductif.” *Annals of Japan Association for Middle East Studies* 37(2), 2022.3: 97–100.

Watanabe, Shoko. “La dichotomie ulémas/marabouts en question: la sociologie française de l’islam et le réformisme musulman en Algérie.” *Annals of Japan Association for Middle East Studies* 37(2), 2022.3: 101–129.

Watanabe, Shoko. “Making an Arab-Muslim Elite in Paris: The Pan-Maghrib Student Movement of the 1930s.” *International Journal of Middle East Studies* 53(3), 2021.8: 439–454.

Watanabe, Shoko. “Les écoles coraniques entre 1947 et 1954: Une analyse quantitative.” *Iles d’Imesli* 13(1), 2021.6: 97–116. (フランス語)

II. 対象期間中の研究・教育活動

2021 年度は以下の研究成果を得た。マグリブでは、フランス植民地主義に対抗するナショナリストやイスラーム改革主義者がアラビア語とイスラームを文化的アイデンティティの要とし、アラビア語学校建設を行ったとされてきた。しかし、実際には両大戦間期以降フランス語による学校教育がムスリムに普及し、アラビア語教育はフランス語教育の影響を駆逐したというより、両言語の読み書き能力があるバイリンガル層増加に貢献したことを、アルジェリアの事例から示した（論文“Les écoles coraniques”）。また、ナショナリストもエリート教育や技術教育を担うフランス語教育、大衆・女子教育や宗教教育を担うアラビア語教育の間の社会的分業関係を前提に将来の国家建設を構想した（論文“Making an Arab-Muslim Elite”）。

北アフリカのイスラーム実践については、イスラーム改革のような原典回帰的な宗教解釈と、スーフィー教団や聖者（マラブー）崇拝といった慣行を、相容れない立場と考える見方が植民地期以来存在してきた。これに関し、『日本中東学会年報』に特集号「植民地時代におけるアルジェリア・ムスリム知識人—植民地期の経済的・政治的近代性のなかのイスラーム」を企画し、渡邊を含む国内外の 4 人の研究者が二項対立的なイスラーム理解を再検討する論文を出版した。渡邊は前書きと論文（“La dichotomie ulémas/marabouts”）を担当し、「マラブー」と「ウラマー」を対立させるカテゴリー化は植民地官僚の統治技法として形成されマグリブ人に内面化されたこと、社会勢力としてのイスラーム改革主義者とスーフィー教団の対立は政治権力との関係性

で説明できるもので、イスラーム改革主義運動の現場では協力関係も見られたことを示した。

上記のような成果は、2021 年 11 月 18 日の第 3 回定例研究会（着任研究会）の口頭発表「植民地期マグリブにおける宗教、言語とナショナリズム」でも報告した。アルジェリアのマスカラ大学との研究交流など、国際交流にも力を入れている。

園田 茂人 教授

所属部門 新世代アジア研究部門

研究テーマ 「動くアジア」の比較社会学

プロフィール <https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/shigetosonoda.html>

I. 対象期間中の研究業績一覧

■ 単著

園田茂人『アジアの国民感情—データが明かす人々の対外認識』中央公論新社、2020.9.

■ 編著

園田茂人編『はじめて出会う中国 [改訂版]』有斐閣、2022.3.

園田茂人、謝宇（編）『世界の対中認識—各国の世論調査から読み解く』東京大学出版会、2021.12.

園田茂人、David S. G. Goodman（編）『チャイナ・インパクト—近隣から見た「台頭」と「脅威」』東京大学出版会、2018.2.

■ 報告書

園田茂人「現代中国における日本研究—研究機関と研究者集団にみる成長の諸特徴」国際交流基金日本研究・知的交流部アジア・大洋州チーム『中国の日本研究調査（2018）』2021.3、1–15.
https://www.jpf.go.jp/j/project/intel/study/survey/asia_oceania/dl/japan_analysis_report_jp.pdf

園田茂人『2021 年度『アジアの共通課題と相互交流—学びあいから共感へ』選後評』トヨタ財団、2021.9.

園田茂人『2020 年度『アジアの共通課題と相互交流—学びあいから共感へ』選後評』トヨタ財団、2020.9.

園田茂人『2019 年度『アジアの共通課題と相互交流—学びあいから共感へ』選後評』トヨタ財団、2019.9.

■ 学術論文

園田茂人「アジア大洋州における日本研究—歴史・関心・課題」『2021 年度 アジア・大洋州の日本研究事情』独立行政法人国際交流基金日本研究・知的交流部、2022.3、1–6.

園田茂人「実証主義社会学の萌芽と隆盛—『東京学派』の社会学に見る構造変容」『ブックレット東京学派 Vol. 4 東京学派の研究—総合シンポジウム』2022.3、56–66.

- Sonoda, Shigeto. “Extraordinary Nature of Lecture Series on Cancer Studies at the University of Tokyo.” *Japanese Journal of Clinical Oncology* 51(1), 2021: i52.
- Sato, Jin, and Shigeto Sonoda. “Asian Studies ‘Inside-Out’: A Research Agenda for the Development of Global Asian Studies.” *International Journal of Asian Studies* 18(2), 2021: 207–216.
- Sonoda, Shigeto. “Asian Views of China in the Age of China’s Rise: Interpreting the Results of Pew Survey and Asian Student Survey in Chronological and Comparative Perspectives, 2002–2019.” *Journal of Contemporary East Asian Studies* 10 (2), 2021: 262–279.
- 園田茂人「国際日本研究の『挑戦』と『機会』『環太平洋から「日本研究」を考える』国際日本文化研究センター、2021.3、87–94.
- Dadavaev, Timur, Jasur Soipov, and Shigeto Sonoda. “A Guest for a Day? An Analysis of Uzbek ‘Language Migration’ into the Japanese Educational and Labour Market.” *Central Asian Survey* 40(3), 2021: 438–466.
- Sonoda, Shigeto. “Exploring Philippine Views of China: Revisiting Prof. Baviera’s Observations in 2018.” *Chinese Studies Journal* 15, 2021: 133–148.
- 園田茂人「現代中国的日本研究—以研究机构与研究人员变迁为基础的发展特征分析」『南開日本研究』第 20 卷（2020）、344–365。（中国語）
- Villota, Alleson D. II, and Shigeto Sonoda. “Republic of Korea’s New Southbound Policy and the Significance of Korean Pop Culture in Advancing its Objectives towards a Community of People, Prosperity, and Peace.” *ASEAN Insight* 3(1), 2020: 16–17.
- Sonoda, Shigeto. “Declining National Boundaries of Food Preference in Southeast Asia? An Analysis of Asian Student Survey Data, 2008–2018.” *Culturology: Journal of Culture and Art Studies* 2(5), 2020: 28–43.
- 園田茂人「アジアのエリート学生への調査から読み解く 2040 年、中国は覇権を握っているか」『中央公論』5 月号、2020.4、112–123.
- 園田茂人「中国的『関係主義』再論—日本人の対中ビジネス・インターフェイスを中心に」『中国 21 “人際” の関係（グアンシー）学』第 52 号（2020.3）、47–70.
- 園田茂人「中国台頭の国際心理—アジア域内の温度差をめぐって」『社会学評論』第 70 巻第 3 号（2019.12）、264–283.
- 園田茂人「中国政府が一带一路に専念できるのはなぜか—中国市民の党・政府への高信頼の背後にあるもの」『運輸と経済』第 78 巻第 12 号（2018.12）、188–193.
- 園田茂人「研究動向—データのアーカイブ化とアジア研究」『アジア研究』第 64 巻第 2 号（2018.3）、39–46.

園田茂人「社会学的想像力と地域研究」『学術の動向』第23巻第4号（2018.4）、50–55.

園田茂人「注目される『動く中国人』の役割」広井良典、大井浩一（編）『2100年へのパラダイム・シフト—日本の代表的知性50人が、世界／日本の大変動を見通す』作品社、2017.3、53–55.

園田茂人「東アジア型ハイブリッド・モダニティ？—在中国日韓台企業の比較が示唆する現実」今田高俊・佐藤嘉倫・遠藤薫（編）『社会システム論と再帰的自己組織性—社会理論の再興』ミネルヴァ書房、2016.12、135–157.

園田茂人「社会調査でここまでわかった 中国の最新結婚事情」『文藝春秋 SPECIAL』、2016.5、194–202.

■ 書評論文・書誌紹介

Sonoda, Shigeto. “Ezra Vogel, China and Japan: Facing History.” *Japanese Studies* 41(1), 2021: 137–138.

Sonoda, Shigeto. “Albert Tzeng, William L. Richter and Ekaterina Koldunova, eds., Framing Asian Studies: Geopolitics and Institutions,” *International Journal of Asian Studies* 16(2), 2019: 145–147.

園田茂人「鐘家新『社会凝集力の日中比較社会学—祖国・伝統・言語・権威』」『社会学評論』第67巻第2号（2019.9）、255–256.

■ 一般向け記事（随筆、字典項目、コメントなど）

園田茂人（編）『Intellectual Giants in UTokyo: A History of China/Taiwan Studies』ブックレット GJS vol. 4、2022.3. http://gjs.ioc.u-tokyo.ac.jp/ja/essays/post/20220317_GJS-04/

園田茂人、Misook Lee、藍弘岳、Nalanda Robson、Patricia G. Steinhoff『グローバル時代の日本学研究—GJS 講演会／セミナーの成果』ブックレット GJS vol. 3、2022.1. http://gjs.ioc.u-tokyo.ac.jp/ja/essays/post/20220128_GJS-03/

園田茂人、中野嘉子（編）『HKU-UTokyo Joint Summer Program: Teaching Global Japan Studies in Hong Kong』ブックレット GJS vol. 2、2021.11. http://gjs.ioc.u-tokyo.ac.jp/ja/essays/post/20211115_GJS-02/

園田茂人、鍾以江、内田力、板橋暁子（編）『国際総合日本学ネットワーク10年の歩み』ブックレット GJS vol. 1、2021.7. http://gjs.ioc.u-tokyo.ac.jp/ja/essays/post/20210720_GJS-01/

園田茂人「解説：精緻な分析を通じた渾身の台湾回収工作の暴露」呉介民、川上桃子（編）『中国（チャイナ）ファクターの政治社会学—台湾への影響力の浸透』白水社、2021.6、265–270.

園田茂人「東京学派の中の「社会学アジア・コネクション」—その歴史的回顧と教訓」『社会学の中の東京学派』（ブックレット東京学派第2号）、2021.2、67–86.

園田茂人「『アジアの国民感情』／園田茂人インタビュー」Web 中公新書、2021.1. <https://www.chuko.co.jp/shinsho/portal/116637.html>.

園田茂人「アジア学生調査第三波調査から見てきたこと」『UP』11月号（2019.11）、18-24.

園田茂人「巻頭言 続・日本研究がアジア研究の一部になる日」『アジア政経学会ニューズレター』No.49（2018.3）、1-2.

園田茂人「華僑・華人ビジネスを支える価値」華僑華人の事典編集委員会（編）『華僑華人の事典』丸善出版、2017.12、85-86.

園田茂人「日本的集団主義」日本社会学会理論応用事典刊行委員会（編）『社会学理論応用事典』丸善出版、2017.7、392-393.

園田茂人「近代化論」日本社会学会理論応用事典刊行委員会（編）『社会学理論応用事典』丸善出版、2017.7、526-527.

園田茂人「アジア諸国から見た日本」『ゼットキューブ』Vol.2（2017.7）、8-11.

園田茂人「地域研究—歴史的変遷と新たな地平」『コミュニティ事典』春風社、2017.6、16-17.

園田茂人「近代化」友枝敏雄、浜日出夫、山田真茂留（編）『社会学の力—最重要概念・命題集』有斐閣、2017.6、222-225.

園田茂人「学生の意識変化にみるアジアの近未来—アジア学生調査統合データ分析プロジェクト」『明日の東洋学』36号（2017.2）、2-4.

園田茂人「中国の台頭を世界はどう受け止めているか」『UP』5月号（2017.5）、5-11.

II. 対象期間中の研究・教育活動

1. 研究活動の評価 この6年の間に、単著1点、編著3点、論文20点（うち共著3点、英文7点）、報告書4点、書評3点、随筆・事典項目など17点を公開し、国内外の学会などでの研究報告は63回を数えた。また科研費4件（うち申請者2件）、民間からの寄附で、合計2,390万円の研究費を獲得した。コロナ禍の影響もあり、この間受け入れた訪問研究員は8名に留まった。

2. 教育活動の評価 学際情報学府アジア情報社会コースを拠点に、人文社会系研究科社会学研究室、総合文化研究科「多文化共生統合人間学（IHS）」プログラム、教養学部 PEAK プログラム、全学学部プログラム GLP（Global Leadership Program）などで授業を展開した。また国際本部の活動の一環として、ソウル大学や台湾大学、香港大学との合同サマープログラムの設計・実施に携わった。また、東文研国際総合日本学プログラムでも海外の学生を対象に、サマープログラムを実施している。この間、博士号取得に繋がった大学院生は3名で、いずれも英語論文で博士号を取得している。早稲田大学や北海道大学、京都大学、ジャワハルラル・ネルー大学で非常勤講師を務め、学生の指導に当たった。

3. 所内外でのその他の活動 2016年度と2017年度は、国際本部関係の仕事を多く担当し、2016年度は総長特任補佐、17年度は副学長として働いた。2018年度からは国際交流基金による委嘱で北京日本学研究中心の日本側主任教授となり、基金とはそれ以外にも、日本研究振興関連

の仕事を行ってきた。日本学術会議連携会員、人事院国家公務員採用試験・審査・調整担当試験専門委員も、この間継続している。トヨタ財団では選考委員長、住友財団では選考委員を務め、科学研究費関係も含め多くの申請書の査読にあたった。2019 年には警察大学校から、長年にわたる講義に対し感謝状が贈られている。

安富 歩 教授

所属部門 新世代アジア研究部門

研究テーマ 学術・芸術・宗教・生活の実践的再統合

プロフィール <https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/yasutomi.html>

I. 対象期間中の研究業績一覧

■ 著書

安富歩『Tao 老子の教え—あるがままに生きる』ディスカヴァー・トゥエンティワン、2017.6.

安富歩『超訳論語—革命の言葉 エッセンシャル版』ディスカヴァー・トゥエンティワン、2016.9.

安富歩『あなたが生きづらいのは「自己嫌悪」のせいである。他人に支配されず、自由に生きる技術』大和出版、2016.8.

安富歩『マイケル・ジャクソンの思想』アルテスパブリッシング、2016.4.

■ 学術論文

安富歩「ダブルバインド理論を超えて—「みせかけの相互性」の衝撃」『精神療法』金剛出版、2018.12、812-817.

安富歩「「異常」とは何か—児童虐待と性的傾向抑圧の観点から」原田誠一（編）『「メンタルクリニックのこれからを考える」メンタルクリニックの果たすべき役割』（外来精神科診療シリーズ Part III）中山書店、2018.7、271-280.

安富歩「女性装を通じた考察」服藤早苗、新實五穂（編）『歴史のなかの異性装』勉誠出版、2017.6、86-97.

安富歩「フィードバックと学習の原理（講演録）」『ドラッカー学会』（2016.11）、296-312.

■ 書評論文・書誌紹介

余傑（著）劉燕子（編）「劉曉波伝」『河北新報、その他（岐阜新聞、山梨日日新聞）』（2018）.

香田芳樹「魂深き人々—西欧中世からの反骨精神」『kotoba 季刊誌』（株式会社集英社）2017 年夏号（2017.6）、241.

安富歩「勝俣鎮夫「中世社会の基層をさぐる」」『京都新聞』（2016.9）.

■ 一般向け記事

安富歩、遠藤徹「雅楽はすごい。魂の音楽・雅楽 対談 安富歩 遠藤徹（東京学芸大学教授）」『雅楽だより』（雅楽協議会）（2019）、1-3.

安富歩「東大生も不登校生も悩みの根は同じ」全国不登校新聞社『学校に行きたくない君へ』ポプラ社、2018.8、221-230.

安富歩「満州泰阜村分村史についての教科書を！」『星火方正 会報』(方正友好交流の会) 26号 (2018.5)、1-4.

安富歩「「太陽の塔」とは誰か」『月刊みんぱく』(国立民族博物館) 5月号 (2018.5)、1.

富田きよむ「人と人、人と馬のコミュニケーションの回復をめざして—なぜ安富歩教授は馬を愛するのか」『週刊金曜日』(株式会社金曜日) 第26巻第24号 (2018)、41-43.

安富歩 対談 福島みずほ「「暴走」を止められるか」『月刊社会民主』(社会民主党全国連合機関紙宣伝局) (2018.2)、7-13.

安富歩「男装をやめた東大教授がぶちまける真意」『週刊女性』(主婦と生活社) (2017.9)、154-155.

安富歩「女性装×たたかう」『東大2018—特集たたかう東大』東京大学出版会、2017.8、205-210.

安富歩「2017 いまどき美人の境界線 私は考える「美人の境界線」」『女性自身』(光文社) 8月15日号 (2017.8)、64.

安富歩「巻頭インタビュー 学校はすべての暴力から子どもたちを守る基地に変身せよ」『総合教育技術』(小学館) (2017.7)、3-6.

森達也、大澤絢子、安富歩「親鸞に驚く！ 鼎談 これからの社会を一変させるかもしれない「他力」の思想の衝撃力」『同朋』(真宗大谷派宗務所) 第69巻第7号 (2017.7)、2-15.

安富歩「ありのままの私を生きる一男のフリをやめた東大教授からのメッセージ」『しえいくはんず2017 記録集』調布市男女共参画推進フォーラムしえいくはんず2017実行委員会、2017.6、6-8.

安富歩「数学の嫌いな文系学生が数理科学の論文を書くようになったのはなぜか？」大竹 真一(編)『どうして高校生が数学を学ばなければならないの？』大阪大学出版会、2017.6、170-200.

安富歩「「ありのままの私を生きる一男のフリをやめた東大教授からのメッセージ」」『サンフォルテだより』、富山県民共生センター) (2017.4)、4.

安富歩「自分の人生を生きるために大切なこと」『PHP スペシャル 「好きなことだけ」で生きていこう！ 4月号』(PHP 研究所) (2017.4)、38-43.

安富歩「満洲における近代空間形成についての社会生態史学の試み」『善隣』(一般社団法人国際善隣協会) No. 473 (2016.11)、2-10.

安富歩「フィードバックと学習の原理」『文明とマネジメント 新しい社会についての理念』ドラッカー学会編集委員会、2016.11、296-312.

安富歩「ありのままに生きる一人間社会の根源的暴力性からの離脱」『うえの』（上野のれん会）（2016.11）、48-50.

小山内美江子、小島慶子、安富歩「座談会 なぜ息子を育てるのはこんなに難しいのか」『婦人公論』（中央公論新社）第 101 巻第 19 号（2016.10）、54-58.

安富歩「人権文化を拓く 『人権概念』を考える」『であい』（公益社団法人全国人権教育研究協議会）（2016.9）、14-15.

安富歩「総力取材 高畑裕太 強姦致傷逮捕② 『親の責任』私はこう考える」『女性自身』（光文社）第 59 巻第 32 号（2016.9）、40.

安富歩「不安の時代を生き抜く勇気の持ち方」『女性自身』（光文社）第 59 巻第 19 号（2016.6）、162-163.

海原純子×安富歩「対談 日本の男はなぜ生きづらいのか」『潮』（株式会社潮出版社）6 月号（2016.6）、187-193.

安富歩「Sexual Fluidity（セクシャル・フルイディティ）こそが世界を大改革するワケ」『Frau フラウ』（講談社）第 26 巻第 7 号（2016.5）、157.

安富歩「王様は裸だ 最終回」『ZAITEN』（株式会社 財界展望新社）第 60 巻第 5 号（2016.4）、94-95.

■ 新聞記事

安富歩「自分自身であるとは」『民主青年新聞』2018 年 10 月 8 日、4 面.

安富歩「耕論 いまって「昭和 93 年」？ 立場を守るのは時代遅れ」『朝日新聞』2018 年 7 月 25 日朝刊、11 面.

安富歩「付度をぶっ飛ばせ 風通しの良い社会へ 話を聞き、投げ返そう」『千葉日報、その他（山口新聞、宮崎日日新聞、琉球新報）』2018 年 1 月 4 日、10 面.

安富歩「メディア時評 安全処理装置から脱せよ」『毎日新聞』2017 年 3 月 18 日、10 面.

安富歩「オピニオン メディア時評 安全処理装置から脱せよ」『毎日新聞』2017 年 3 月 18 日、10 面.

安富歩「識者評論 大阪万博再誘致 迷信と類似の経済政策構造」共同通信社配信『山陰中央新聞等』2016 年 10 月 30 日、22 面.

佐藤 仁 教授

所属部門 新世代アジア研究部門

研究テーマ 国際開発論

プロフィール <https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/satoj.html>

I. 対象期間中の研究業績一覧

■ 著書

佐藤仁『開発協力のつくられ方—自立と依存の生態史』東京大学出版会、2021.5.

佐藤仁『反転する環境国家—「持続可能性」の罠をこえて』名古屋大学出版会、2019.6.

佐藤仁『教えてみた「米国トップ校」』角川新書、2017.9.

佐藤仁『野蛮から生存の開発論—越境する援助のデザイン』ミネルヴァ書房、2016.6.

■ 編著

松本悟、佐藤仁（編）『国際協力と想像力—イメージと「現場」のせめぎ合い』日本評論社、2021.3.

佐藤仁（編）『開発と援助の未来学（東洋文化 97 号）』東京大学東洋文化研究所、2017.3.

■ 学術論文

Sato, Jin. “Pivotal Moments in Japanese ODA: Circa 1950-2010.” *International Development Cooperation of Japan and South Korea: New Strategies for an Uncertain World*. Edited by Huck-ju Kwon, et al. Singapore: Palgrave Macmillan, 2022, 45–72.

Sato, Jin, and Sonoda, Shigeto. “Asian Studies ‘Inside-Out’: A Research Agenda for the Development of Global Asian Studies.” *International Journal of Asian Studies* 18(2), 2021.6: 207–216.

佐藤仁「特集に寄せて—多様性を生かす開発研究のために」『国際開発研究』第 30 巻第 1 号 (2021.6)、1–3.

佐藤仁「アジアの環境権威主義—依存関係からみた環境政策と反転」寺尾忠能（編）『「初期」資源環境政策の形成過程—「後発の公共政策」としての始動』アジア経済研究所、2021.4、75–96.

佐藤仁「バナナ売りのおばあさんは何を考えているか—国際協力の相手を想う」松本悟、佐藤仁（編）『国際協力と想像力—イメージと「現場」のせめぎ合い』日本評論社、2021.3、2–22.

Sato, Jin. “Compulsion to Maintain: Water and State Power in Southeast Asia.” *Origins and Evolution of Environmental Policies: State, Time and Regional Experiences*. Edited by T. Terao, and T. Funatsu. Cheltenham: Edward Elgar Publishing, 2021, 105–123.

Sato, Jin. “Research at a Distance: Area Studies in the Post-Pandemic Era.” *International Journal of Asian Studies* 17(2), 2020.7: 105–108.

佐藤仁「中間集団の今日的意義—東南アジアに学ぶ国家の「反転」」八木信行（編）『水産改革と魚食の未来』恒星社厚生閣、2020.7、51–62.

佐藤仁「深い統治—東南アジアの灌漑と国家権力の浸透」寺尾忠能（編）『資源環境政策の形成過程—「初期」の制度と組織を中心に』アジア経済研究所、2019.3、147–171.

Sato, Jin, and Awidya Santikajaya. “Variety of Middle-Income Donors: Comparing Foreign Aid Approaches by Thailand and Indonesia.” *JICA-RI Working Paper* (JICA Research Institute), no. 180, 2019.

Sato, Jin. “The Domestic Infrastructure of Economic Cooperation.” *Engineering Asia: Technology, Colonial Development and the Cold War Order*. Edited by Hiromi Mizuno, Aaron S. Moore, and John DiMoia. New York: Bloomsbury Publishing, 2018, 43–58.

Sato, Jin. “Triangular Cooperation in East Asia: Challenges and Opportunities for Japanese Official Development Assistance.” *IDS Bulletin* 49(3), 2018.7: 111–128.

佐藤仁「動きとしての開発—競争から依存へのパラダイムシフト」『経済志林』第 85 巻第 4 号 (2018.3)、647–668.

佐藤仁「分かちあうアジア—開発協力と相互依存」遠藤環、伊藤亜聖、大泉啓一郎、後藤健太（編）『現代アジア経済論—「アジアの世紀」を学ぶ』有斐閣ブックス、2018.3、273–293.

佐藤仁「競争史観から依存史観へ」『開発と援助の未来学（東洋文化 97 号）』東京大学東洋文化研究所、2017.3、197–218.

Sato, Jin. “Internationalization from Within: 140 Years of Internationalization at the University of Tokyo.” *The “Global” and the “Local” in Early Modern and Modern East Asia*. Edited by Benjamin A. Elman, and Chao-Hui Jenny Liu. Leiden: Brill, 2017, 81–94.

佐藤仁「「くくり」と「出入り」の脱国家論—京都学派とゾミア論の越境対話」井上真（編）『東南アジア地域研究入門 1 環境』慶應義塾大学出版、2017.2、155–175.

■ 書評論文・書誌紹介

佐藤仁「生方史数（編）『森のつくられかた—移りゆく人間と自然のハイブリッド』共立出版、2021、xiii+234p.」『東南アジア研究』（京都大学東南アジア地域研究研究所）第 59 巻第 1 号 (2021)、220–224.

佐藤仁 “Give a Man a Fish By James Ferguson” 『アジア経済』第 58 巻第 4 号 (2017.12)、81–85.

■ 一般向け記事

佐藤仁「開発協力のズレに学ぶ—二項対立のはざまに広がる可能性」『UP』（東京大学出版会）第 585 号 (2021.7)、21–26.

佐藤仁「中国への対抗心にとらわれず「日本型援助」の強みを見出せ」『Wedge』（株式会社ウェッジ）4月号（2021.3）、53-55.

佐藤仁「“憶える学問”を忘れない」『小日本』（坂の上の雲ミュージアム通信）第32号（2018.3）、16-18.

■ 事典等項目

佐藤仁「“持続可能な開発”論の歴史的系譜」国際開発学会（編）『国際開発学事典』丸善出版、2018.11、20-21.

II. 対象期間中の研究・教育活動

この期は、国際開発と途上国における環境政策に関するまとまった著書を刊行することができた。また米国トップ校の教育実態についての一般書『教えてみた「米国トップ校」』（角川新書、2017）を刊行し、モンゴル語、中国語にも翻訳された。開発と環境に関する主要な研究業績は下記の2冊の単著である。『反転する環境国家―「持続可能性」の罫をこえて』（名古屋大学出版会、2019）、『野蛮から生存の開発論―越境する援助のデザイン』（ミネルヴァ書房、2016）。特に『野蛮から生存の開発論』は、第21回国際開発研究大来賞を受賞した。加えて編著として『東洋文化』（97号）に特集「アジアの開発学」を寄稿し、編者としてとりまとめた。さらに一般書として『国際協力と想像力―イメージと「現場」のせめぎあい』（日本評論社、2021）を出版した。その他の英文の業績としては、“Research at a Distance,” *International Journal of Asian Studies* 17-2: 105-123 および“Triangular Cooperation in East Asia,” *IDS Bulletin* 49-3: 111-128 などを出版した。全体としては、それまでの研究蓄積をまとめて出版できた時期であった。

教育面においては新領域創成科学研究科国際協力学専攻の大学院生10名に対して主査として修士論文および博士論文の指導を行い、公共政策大学院・総合文化研究科と合併で講義「開発研究」を開講した。また外部では2017年2月から2020年6月にかけてプリンストン大学 Global Scholar（客員教授）として毎年春学期に The Environment: Science and Policy および Mainstreaming Environment in Asia (task force)を開講した。なお、この期間、総長特任補佐として東京大学 Global Advisory Board の支援や各種国際まわりの本部業務を担当した。

上原 究一 准教授

所属部門 新世代アジア研究部門

研究テーマ 中国明清時代の出版文化と通俗文学。元・明・清代の白話文による通俗文学と、その興隆をもたらした商業出版の伸張について研究を進めている。

プロフィール <https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/uehara91.html>

I. 対象期間中の研究業績一覧

■ 学術論文

上原究一「明末清初の坊刻における江西の位置付けについて」藤本幸夫（編）『書物・印刷・本屋一日中韓をめぐる本の文化史』勉誠出版、2021.6、768-785.

上原究一「論明末商業出版界中異姓書坊間的跨地域合作關係之存在」『國際漢學研究通訊』第19・20期（2020.7）、35-56.（中国語）

上原究一「【内外東方学界消息】平成二十九年度東京古典会古典籍展観大入札会出品の章回小説稀観本三種について」『東方学』第138号（2019.7）、59-71.

上原究一「黄蓋の武器と生死に見る『三国志演義』の形成・発展史」『ユリイカ（2019年6月号特集「三国志」の世界）』第51巻第9号（2019.6）、126-135.

Uehara, Kyūichi. "On the Position of Chiang-hsi in Commercial Publishing in the Late Ming and Early Ch'ing" *Acta Asiatica* (The Tōhō Gakkai) 116, 2019.2: 21-41.

上原究一「孫悟空穿什麼顏色的衣服？—小説文本和肖像造型之間」『流動與對焦—東亞圖像與影像論』國立中興大學出版中心、2019.1、55-85.（中国語）

上原究一、荒木達雄「石渠閣補刻本『忠義水滸傳』の補刻の様相について」『中国文学報』（京都大学文学部中国語学中国文学研究室内中国文学会）第91号（2018.10）、58-111.

上原究一「明末における「章回」小説の定着と商業出版（大会シンポジウム 中国近世の出版と社会）」『中国—社会と文化』（中国社会文化学会）第33号（2018.7）、22-43.

上原究一「虎林容与堂の小説・戯曲刊本とその覆刻本について」『アジア遊学』（勉誠出版）第218号（2018.5）、96-107.

■ 書評論文・書誌紹介

齋藤希史、田口一郎、谷口洋、上原究一、大木康、鈴木将久「学界展望（文学）」『日本中国学会報』第73号（2021.10）、58-62. 「五、元・明・清（1）戯曲・小説」を分担執筆.

■ 一般向け記事

上原究一「高崎藩大河内松平家・神山閨次旧蔵本『忠義水滸全書』（奇書・好著―“書痴学”の勧め 第1回）」『東京大学アジア研究図書館ニューズレター』第1号（2020.10）、8-11.

■ 事典等項目

上原究一「『三国演義』、『水滸伝』、『西遊記』、『通俗小説に作者はいるの？』、『終わらせたくない病―後・続・新の小説』」武田雅哉、加部勇一郎、田村容子（編）『中国文学をつまみ食い―『詩経』から『三体』まで』ミネルヴァ書房、2022.2、54-59.

上原究一「浅野文庫の『西遊記』二種について」ほか作品解説2篇『図録 入城400年記念広島浅野家の至宝』広島県立美術館、2019.9、174-177、216.

上原究一「コラム「明清の小説刊本における挿絵の変遷」ほか作品解説16篇」『図録 特別展 東京大学東洋文化研究所×金沢文庫 東洋学への誘い』神奈川県立金沢文庫、2019.7、84-85、99-108.

II. 対象期間中の研究・教育活動

着任前から続く科研費若手研究（B）「明末清初の商業出版における同族書坊の広域的経営の実態の研究」と、2019年度からの若手研究「明末清初における官刻・家刻・坊刻それぞれの実態の研究」を中心に研究を進めた。前者では順調に複数の論文をまとめることが出来たが、後者は2019年度末からのコロナ禍により計画していた出張調査が殆ど行えなかったため、予定を変更して新たな出張調査を要さない研究や既発表論文の翻訳紹介に注力した。また、研究課題「明代における通俗文学の発展と商業出版の伸長との相互作用の研究」で令和元年度東京大学卓越研究員に採用された。2021年10月に古書入札会に出品された漢籍資料『新刻彙正十八國閩寶傳』巻中（17世紀前半刊）が従来作品の存在自体が知られていなかった新発見の通俗小説の明刊本であることに気付いたため、その研究費でこの資料を落札した。納品が年度末となったためその詳細な研究は次期に持ち越しとなったが、この貴重な資料を本所図書室に納めたことこそ対象期間における最大の貢献である。

教育面では修士課程生1名の指導にあたったほか、博士論文の副査を4本担当した。

組織運営の面では、対象期間全体を通して附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門（U-PARL）の兼務教員・副部門長を務め、2020年10月のアジア研究図書館開架フロア開館をはじめ、アジア研究図書館の構築と運営に尽力した。

社会貢献としては、本研究所主催の漢籍整理長期研修の時間割作成と一部日程の講師を毎年担当した。但し、コロナ禍により2020年度は開催を見送り、2021年度は実習1日を除きオンラインで開催した。また、2019年の7～9月に金沢文庫で開催された展覧会「東洋文化研究所×金沢文庫 東洋学への誘い」において出展資料の選定補助や図録解題の執筆や連続講座のうち1回の講師を務めたうえ、私蔵の明刊本2点を出品もした。

柳 幹康 准教授 (2021 年度着任)

所属部門 国際学術交流室

研究テーマ 中国仏教思想史

プロフィール <https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/yanagi.html>

I. 対象期間中の研究業績一覧

■ 学術論文

柳幹康「永明延寿「官銭放生」説の成立と変遷」『禅学研究』第 100 巻 (2022.3)、43–74.

柳幹康「白隠の実践体系とその背景」『国際禅研究』第 9 巻 (2022.2)、277–332.

柳幹康「『宗鏡録』の流布とその背景」『国際禅研究』第 8 巻 (2022.1)、65–79.

館隆志、吉村誠、師茂樹、山口弘江、柳幹康「達磨宗・仏地房覚晏『心根決疑章』訓註（上）」『駒澤大学仏教学部論集』第 52 号 (2021.10)、127–156.

柳幹康「《宗鏡録》于鎌倉時期臨済宗之受容」王芳（訳）『禅的形成及其在世界的展開』宗教文化出版社、2021、276–287.（中国語）

■ 一般向け記事

柳幹康「続 白隠の言葉を読む 第 12 回 無尽灯」『花園』第 72 巻 3 号 (2022.3)、11–13.

柳幹康「続 白隠の言葉を読む 第 11 回 四種の立場」『花園』第 72 巻 2 号 (2022.2)、11–13.

柳幹康「続 白隠の言葉を読む 第 10 回 二種の説法」『花園』第 72 巻 1 号 (2022.1)、11–13.

柳幹康「続 白隠の言葉を読む 第 9 回 看経の眼」『花園』第 71 巻 12 号 (2021.12)、11–13.

柳幹康「続 白隠の言葉を読む 第 8 回 自利と利他」『花園』第 71 巻 11 号 (2021.11)、11–13.

柳幹康「続 白隠の言葉を読む 第 7 回 勇猛と懈怠」『花園』第 71 巻 10 号 (2021.10)、11–13.

柳幹康「続 白隠の言葉を読む 第 6 回 正念工夫」『花園』第 71 巻 9 号 (2021.9)、11–13.

柳幹康「続 白隠の言葉を読む 第 5 回 静中の工夫と動中の工夫」『花園』第 71 巻 8 号 (2021.8)、11–13.

柳幹康「日本禅宗における『宗鏡録』の受容」『中世禅の知』臨川書店、2021.7、189–194.

柳幹康「続 白隠の言葉を読む 第 4 回 見性と坐禅」『花園』第 71 巻 7 号 (2021.7)、11–13.

柳幹康「続 白隠の言葉を読む 第 3 回 悟りの世界と迷いの世界」『花園』第 71 巻 6 号 (2021.6)、11–13.

柳幹康「続 白隠の言葉を読む 第2回 一心」『花園』第71巻5号（2021.5）、11-13.

柳幹康「続 白隠の言葉を読む 第1回 輪廻」『花園』第71巻4号（2021.4）、11-13.

柳幹康「「居士」とは何か」『禅文化』第260号（2021.4）21-28.

II. 対象期間中の研究・教育活動

柳は2021年4月の着任後、1年の間に以下4種の研究を行なった。

第一、延寿像の変遷とその主著『宗鏡録』の受容を分析した。延寿は後に中国史上最も重要な導師と称される人物であり、その有名な逸話に「官錢放生」（捉えられた生き物を救うために公金を流用したため死罪に問われたが、その泰然自若とした姿に感動した王により赦された）話がある。この話が彼の没後に次第に形成され、後には小説・演劇の題材となり人口に膾炙した流れを明らかにした。また『宗鏡録』は元来、禅宗の立場から仏教全体を統合した書物であったのに対し、後に中国では「教と禅」「禅と浄土」など特定の対立を解消する書として、朝鮮では禅宗を純化する書として、日本では新来の禅宗の立ち位置を示す書として、それぞれ用いられたことを解明した（論文「永明延寿「官錢放生」説の成立と変遷」「『宗鏡録』の流布とその背景」）。

第二に、白隠の実践体系を解明した。白隠は江戸期の禅僧であり、日本臨済禅中興の祖として尊ばれているものの、彼が構築した実践体系は長らく不明であった。そこで彼の著作を網羅的に調査・整理し、その体系が開悟・自利・利他という三つの要素から成ること、この三つがそれぞれ、彼が生涯で得た三度の大きな悟りと対応することを明らかにした（論文「白隠の実践体系とその背景」）。

第三に、近年発見された日本禅宗黎明期の重要な典籍について、その訳注研究を共同で進めた（訳注（共著）「達磨宗・仏地房覚晏『心根決疑章』訓註（上）」）。

第四、「『宗鏡録』の一心思の研究」が科研費基盤研究（C）に採択され（21K00060、2021.4～2026.3）、初年度の2021年度は『宗鏡録』の「一心」に関する引用文の出典調査を進めた。

教育では「インド哲学仏教学特殊講義」「世界哲学と東アジア」「中国禅宗思想史」の授業を担当した。

田中 明彦 教授 (2016 年度退職)

所属部門 汎アジア研究部門

研究テーマ 東アジアをめぐる主要国間の国際政治

プロフィール <https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/tanaka.html>

I. 対象期間中の研究業績一覧

■ 学術論文

田中明彦「思想・歴史部門 受賞者・熊谷英人『フランス革命という鏡—十九世紀ドイツ歴史主義の時代』(白水社)」『第 38 回サントリー学芸賞 選評』公益財団法人サントリー文化財団、2016.12、27–28.

田中明彦「猪木正道論」『平和と防衛』(日本防衛学会猪木正道賞基金『平和と防衛』刊行委員会) 第 3 号 (2016.11)、7–19.

田中明彦「『第 28 回アジア・太平洋賞』受賞作の講評」『アジア時報』(アジア調査会) 11 月号 (2016.11)、9–10.

Tanaka, Akihiko. “The Spheres in International Politics and Summit Diplomacy.” *Discuss Japan*, (Discuss Japan) Diplomacy, No 35, 2016.

田中明彦「日本の国際協力とアジア外交」『日本貿易会 月報』(日本貿易会) 第 750 号 (2016.9)、30–34.

田中明彦「国際政治の「圏域」分化とサミット外交」『外交』(都市出版) 第 38 号 (2016.7)、84–88.

Tanaka, Akihiko. “Visions of Peace.” *Nikkei Asian Review*. (Nikkei Inc.), 130, 2016: 34.

田中明彦「サミットと日本」『国際問題』(日本国際問題研究所) 651 号 (2016.5)、1–4.

■ 新聞記事

田中明彦「執筆者座談会：激動の世界を読む—不確実で不透明な時代 日本はぶれない軸保て」『毎日新聞』2017 年 1 月 3 日、8–9.

田中明彦「執筆者座談会：激動の世界を読む—不確実で不透明な時代 日本はぶれない軸保て」『毎日新聞』2017 年 1 月 3 日、8–9.

田中明彦「激動の世界を読む：国際政治の法則 民主国家同士は戦争せず」『毎日新聞』2016 年 12 月 16 日、11.

田中明彦「過剰反応は禁物—緊急インタビュー トランプの米国」『毎日新聞』2016 年 11 月 13 日、1.

田中明彦「「第 11 回安全保障シンポジウム」安保法政のその先」『読売新聞』2016 年 10 月 9 日朝刊、7.

Tanaka, Akihiko. “Opinion & Analysis: Summit Diplomacy Key to Japan-China Ties.” *The Japan News* October 3, 2016, 5.

田中明彦「地球を読む：首脳外交 盛んな会談 効果どこに」『読売新聞』2016 年 10 月朝刊、1、2.

田中明彦「2016 参院選識者座談会：「3 分の 2」なぜ生まれた」『日本経済新聞』2016 年 7 月 12 日、8.

田中明彦「安全優先 危険ならば退避を一開発援助 意義は減らない」『熊本日日新聞』2016 年 7 月 5 日、8.

田中明彦「JICA 前理事長 田中明彦氏に聞く一危険ならば退避を」『西日本新聞』2016 年 7 月 5 日、7.

田中明彦「論点スペシャル：英離脱 国際秩序どうなる」『読売新聞』2016 年 7 月 1 日、11.

田中明彦「アジアの未来特集：世界とアジアの安全保障」『日本経済新聞』2016 年 6 月 16 日、33.

田中明彦「第 22 回アジアの未来：不安定化する世界とアジア安全保障—安定の道筋は パネル討論」『日本経済新聞』2016 年 6 月 1 日、9.

田中明彦「オバマ氏広島訪問 世界をどう見る—アジアの安保にプラス」『日本経済新聞』2016 年 5 月 28 日朝刊、14.

田中明彦「読売国際会議 2016「先進国に問われる新しい挑戦」」『読売新聞』2016 年 5 月 25 日朝刊、12.

Tanaka, Akihiko. “Opinion & Analysis: Maternal Health Key to Fighting Poverty.” *The Japan News*, May 10, 2016, 5.

田中明彦「地球を読む：最貧困層 過去 25 年で半減」『読売新聞』2016 年 5 月 9 日朝刊、1、2.

平勢 隆郎 教授 (2019 年度退職)

所属部門 東アジア第一研究部門

研究テーマ 中国古代領域国家の形成

プロフィール <https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/hirase.html>

I. 対象期間中の研究業績一覧

■ 著書

平勢隆郎 (著)、李彦樺 (訳)、高上雯 (導読)『從城市国家到中華一般周春秋戦国』台湾商務印書館、2018. 『都市国家から中華へ』2005 の中国語訳繁体字版.

平勢隆郎『「仁」の原義と古代の數理』雄山閣、2016.11.

■ 編著

野久保雅嗣、平勢隆郎 (編)『東方文化学院 (東京研究所) 研究の風景』(東洋学研究情報センター叢刊 26)、東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター、2018.3.

平勢隆郎、宇都宮美生、野久保雅嗣 (編)、岡村秀典、藤井恵介 (協力)『東洋文化研究所藏山本照像館撮影中国史跡写真目録』(東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター叢刊 24)、東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター、2017.

■ 学術論文

平勢隆郎「平勢隆郎春秋戦国『年表』与其後出土の文献」『東洋文化研究所紀要』(東京大学東洋文化研究所) 176 卷 (2020)、164-184. (中国語)

平勢隆郎「松丸道雄《殷墟卜辞之中的田獵地—商代国家結構研究序章》对後代研究的影響」『東洋文化研究所紀要』(東京大学東洋文化研究所) 176 卷 (2020)、186-192. (中国語)

平勢隆郎「春秋学與日本『左伝』学」国際会議“《春秋学》論壇”提出論文、曲阜、2018. (中国語)

平勢隆郎「何爲“昶伯者君”」『楚文化与長江中游早期開闢國際學術研究討會論文集』武漢大学、2018. (中国語)

平勢隆郎「楚国世族の邑管領と呉起変法」谷中信一 (編)『中国出土資料の多角的研究』汲古書院、2018、371-395.

平勢隆郎「序・小倉芳彦〈増淵龍夫与我〉補説」増淵龍夫、呂靜 (訳)『中国古代的社会与国家』上海古籍出版社、2017、1-3、7-8.

平勢隆郎「古代暦のよき助言者・古川麒一郎先生をしのんで」『日本暦学会』(日本暦学会事務局) 24 号 (2017)、6-7.

平勢隆郎「金代山本照像館写真の再検討」『東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター報—明日の東洋学』（東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター）37号（2017）、1-6.

長澤 榮治 教授 (2018 年度退職)

所属部門 西アジア研究部門

研究テーマ 近代アラブ社会経済史

プロフィール <https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/nagasawa.html>

I. 対象期間中の研究業績一覧

■ 著書

長沢栄治『近代エジプト家族の社会史』東京大学出版会、2019.2.

■ 編著

長沢栄治（編）『イスラーム・ジェンダー学の構築に向けて（日本学術振興会科学研究費基盤研究（A））』イスラーム・ジェンダー学の構築のための基礎的総合的研究（IG 科研）、2017.3.

後藤晃、長澤栄治（編）『現代中東を読み解くーアラブ革命後の政治秩序とイスラーム』明石書店、2016.8.

長澤栄治、栗田禎子（編）『中東と日本の針路ー「安保法制」がもたらすもの』大月書店、2016.5.

■ 学術論文

Nagasawa, Eiji. “Communist Movement in the Era of Arab Nationalist Revolutions: The Martyrdom of an Arab Communist, Farajullah El Helou.” 『平成 25～28 年度科学研究費補助金基盤研究（B）「アラブ・イスラーム世界におけるマルクス主義の展開ー運動・哲学・歴史像をめぐる」』（課題番号 25284131 研究代表者：栗田禎子（千葉大学））報告書』2017、49–69.

長沢栄治「アラブ革命を振り返るー背景・展開・遺産」『日本の科学者』（日本科学者会議）第 51 巻第 11 号（2016.11）、6–11.

長沢栄治「はじめにー中東と日本」後藤晃、長澤栄治（編）『現代中東を読み解くーアラブ革命後の政治秩序とイスラーム』明石書店、2016.8、3–10.

長沢栄治「中東近代史のもう一つの見方ーアラブ革命の 5 年間を振り返って」後藤晃、長澤栄治（編）『現代中東を読み解くーアラブ革命後の政治秩序とイスラーム』明石書店、2016.8、18–50.

長沢栄治「エジプトー革命の 5 年間」後藤晃、長澤栄治（編）『現代中東を読み解くーアラブ革命後の政治秩序とイスラーム』明石書店、2016.8、100–120.

長沢栄治「あるヌビアの友人との別れ」後藤晃、長澤栄治（編）『現代中東を読み解くーアラブ革命後の政治秩序とイスラーム』明石書店、2016.8、121–123.

Nagasawa, Eiji. “Henri Curiel: A Jewish Egyptian Dedicated to Peace and Socialism.” *Mediterranean*

Review: 9, 2016.6: 77–96.

長澤榮治「中東の悲劇に対して市民ができること」長澤榮治、栗田禎子（編）『中東と日本の針路—「安保法制」がもたらすもの』大月書店、2016.5、182–193.

長澤榮治「大国エジプトの変節—宗教、帝国主義、民族主義、そして新しい時代へ」白杵陽、鈴木啓之（編）『パレスチナを知るための 60 章』明石書店、2016.4、232–236.

■ 一般向け記事

長沢栄治「アラブ詩における非暴力主義の伝統—中東と日本の平和主義を考える（続き）」『詩人会議』（詩人会議）第 56 巻第 2 号（2018.1）、84–88.

長沢栄治「中東と日本の平和主義を考える—ラフィーク・シャーミーの作品を手がかりにして」『詩人会議』（詩人会議）第 55 巻（2017.3）、37–75.

長沢栄治「ラフィーク・シャーミーの闇—シリアの悲劇とメルヘンの世界」『詩人会議』（詩人会議）第 55 巻（2017.1）、86–88.

羽田 正 教授 (2018 年度退職)

所属部門 西アジア研究部門

研究テーマ 世界史の再構築

プロフィール <https://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/faculty/prof/haneda.html>

I. 対象期間中の研究業績一覧

■ 著書

羽田正『グローバル化と世界史』(『シリーズ・グローバルヒストリー』1) 東京大学出版会、2018.3.

羽田正『東インド会社とアジアの海 (繁体字中国語訳)』八旗文化、2018.2. (中国語)

羽田正『東インド会社とアジアの海 (学術文庫版)』講談社、2017.11.

羽田正『増補 モスクが語るイスラム史—建築と政治権力』筑摩書房、2016.12.

■ 編著

Oka, Mihoko., and Masashi Haneda, eds. *Maritime History of East Asia*. Kyoto and Melbourne: Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2019.3.

羽田正 (編)『グローバル・ヒストリーの可能性』山川出版社、2017.10.

羽田正 (編)『地域史と世界史』(『MINERVA 世界史叢書』1) ミネルヴァ書房、2016.10.

秋田茂、永原陽子、羽田正、南塚信吾、三宅明正、桃木至朗 (編著)『「世界史」の世界史』ミネルヴァ書房、2016.9.

■ 翻訳

羽田正 (著)、張厚泉 (訳)『全景世界史』全 5 巻、復旦大学出版社、2018.6. (中国語)

Haneda, Masashi. *Toward Creation of a New World History*. Translated by Makito Noda. Tokyo: Japan Publishing Industry Foundation for Culture, 2018.3.

羽田正 (著)、鄭淳一 (訳)『海から見た歴史 (韓国語)』Minumsa Publishing Group、2018. (韓国語)

羽田正 (著)、林詠純 (訳)『東印度公司與亞洲的海洋』八旗文化／遠足文化事業股份有限公司、2018.1. (中国語)

羽田正 (著)、張雅婷 (訳)『從海洋看歷史』広場出版、2017.5. (中国語)

■ 学術論文

Haneda, Masashi. “World/Global History and the Positionality of Historians.” *Voyages, Migration and the Maritime World: On China’s Global Historical Role*. Edited by Clara-Wing-chung Ho, Ricardo K.S. Mak, and Yue-him Tam. Berlin: De Gruyter Oldenbourg, 2018.9, 23–36.

Haneda, Masashi. “In Memoriam: Jean Calmard (1931–2017).” *Iranian Studies* 51(4), 2018.4: 659–661.

羽田正「日本におけるグローバル・ヒストリーと世界史」羽田正（編）『グローバル・ヒストリーの可能性』山川出版社、2017.10、80–104.

羽田正「グローバル・ヒストリーの豊かな可能性」羽田正（編）『グローバル・ヒストリーの可能性』山川出版社、2017.10、1–12.

Haneda, Masashi. “A Vision for the 21st-Century World and Japan’s Contributions: Universalization and Regionality.” *Toward the Abe Statement on the 70th Anniversary of the End of World War II: Lessons from the 20th Century and a Vision for the 21st Century for Japan*. Translated by Tara Cannon. Tokyo: Japan Publishing Industry Foundation for Culture, 2017, 223–249.

Haneda, Masashi. “Le Japon et la mer.” *La Période moderne (La mer dans l’histoire 3)*. Edited by Christian Buchet and Gérard Le Bouëdec. Woodbridge, Suffolk and Rochester, NY: The Boydell Press, 2017, 564–579.

Haneda, Masashi. “A New Global History and Regional Histories.” *The ‘Global’ and the ‘Local’ in Early Modern and Modern East Asia*. (Leiden Series in Comparative Historiography 10). Edited by Benjamin A. Elman and Chao-Hui Jenny Liu. Leiden and Boston: Brill, 2017, 52–61.

羽田正「イスラーム世界—歴史を語る空間概念の枠組みの功罪」羽田正（責任編集）『地域史と世界史』ミネルヴァ書房、2016.10、63–77.

羽田正「地域史と世界史」羽田正（責任編集）『地域史と世界史』ミネルヴァ書房、2016.10、1–10.

Haneda, Masashi. “Safevi Hassa Birliklerinin Tekâmülü.” *Cihannüma: Tarih ve Coğrafya Araştırmaları Dergisi* 2(1), 2016.7: 125–150.

■ 書評論文・書誌紹介

羽田正「書評—岡本隆司『世界史序説—アジア史から一望する』（ちくま新書、2018年）」『日本経済新聞』2018.9.

羽田正「書評—平川新著『戦国日本と大航海時代』（中公新書、2018年）」『日本経済新聞』2018.6.